

WAI 技法を用いた 自我の実証的研究 (1)

1. 序にかえて	5
2. 主な自我・自己についての理論	9
3. 自我の概念の整理と技法の検討	23
4. WAI 技法による self-image の収集と評価カテゴリーの作成	33
5. WAI 反応の分析結果	39
6. 総括と展望	51
7. 文献	55
8. 資料	59

本研究では、データの収集において、たくさんの被験者の方々をはじめ、諸学校の先生方、企業の方々に御協力をいただきました。その方々に心より御礼を申し上げます。

慶應義塾大学文学部人間科学専攻榎田ゼミナールの第14期生（1984年卒）から20期生（1990年卒）の皆さんには、数千にも及ぶ膨大なデータの整理、評価、集計をしていただきました。ここに記して感謝の気持ちを表す次第です。特に、この研究プロジェクトの当初から現在に至るまで参加していただいている西村麻由美さんと、このモノグラフにも収録されている基準書の作成に力を尽くしていただいた笠原克己君（1988年卒）、小林高広君（1989年卒）には改めて御礼を申し上げます。また、研究の過程の様々な点において御支援、御協力をいただいた伊藤隆一氏、小林和久氏、兼高聖雄氏にも心より感謝いたします。

執筆者紹介

●まきた ひとし （慶應義塾大学文学部教授）

●いわくま しろう （慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）

1

序にかえて

われわれには「自分」というものがあり、この「自分」との様々な関わりの中で生活している。われわれは、この「自分」について様々なことを知っており、「自分」について考えをめぐらすこともできる。また、他者から「自分」を賞賛されれば喜び、侮辱されれば怒ったり沈み込んだりする。われわれは、「自分」を高めるために努力することもあれば、自暴自棄になることもある。このように、「自分」はわれわれの日常生活の至るところに顔を出し、様々な形でわれわれに影響を及ぼしている。

ところで、「自分」というものがなくなってしまったらどうなるのであろうか。もちろん、われわれ自身が死んでしまえば「自分」もなくなるのであろうが、特殊な例としては、生きながらに「自分」を失ってしまう人もいる。木村(1978)は、ある離人症患者の訴えを紹介している。この患者は、「自分というものが感じられない。自分というものがなくなってしまった。自分というものが非常に遠いところに行ってしまった」(木村, 1978, p.17) と訴えている。しかも、この患者は、「感情の喪失感、事物の非実在感、時間的経過や時間そのものの非連続感、自我の非連続感、空間の非

存在感、など」(木村, 1978, p.19-20) も訴えている。このことは、「自分」というものと、感情、事物の存在感、時間や空間の知覚などの基本的な経験との間に、密接な関係があることを示唆している。あるいは、このような、われわれの基本的な経験を支えているのが、「自分」というものなのかも知れない。

「自分」あるいは「私」にまつわる様々な現象は、心理学において「自我 (ego)」あるいは「自己 (self)」という用語を用いて研究されている。ところが、「自我」と「自己」の概念には多くの定義があり、この2つの概念の区別も理論背景によってかなり異なる。そこで、本稿では用語や概念の問題については後に考察することとして、それまでは、便宜的に「自我」と「自己」という用語を明確に区別せずに用いることにする。

Allport (1943) は、アメリカ東部心理学会で、「現代心理学における自我」と題する講演を行ない、心理学における自我の重要性を強調した。彼はこの講演において、様々な心理学的事実が、自我を考慮することなしには説明できないことを示している。彼は、パーソナリティ特性や態度の一

貫性の問題や、判断、記憶、準拠枠、学習、動機づけ、要求水準、産業心理学の問題について、実験例や具体例を挙げて示している。以下にその説を紹介しながら、この問題を少時考えてみたい。

パーソナリティ特性や態度の一貫性については、当時、Allport 自身も関わっていた論争があった。ある実験者たちは、人間行動が状況ごとに特殊であると主張していた。例えば、ある状況で正直な子供も、他の状況では正直でないことがあるというのである。一方、他の研究者たちは、ある状況で正直な人物が、他の状況でも正直であることを示している。Allport 自身も、パーソナリティ特性に一般性あるいは一貫性があるという立場をとっていた。Klein と Schoenfeld (1941) は、被験者に6つの知能テストを受けさせ、その結果に対する被験者の自信を評定させるという実験を行なった。その結果、自我関与のない条件でこの実験を受けた被験者では、6つのテストの評定の間に一貫性がないのに対し、自我関与のある条件で実験を受けた被験者では、評定間に一貫性があることを示した。Allport はこの実験結果から、自我関与があれば一般特性が存在し、自我関与がないと一般特性は存在しないという仮説を導き出している。態度に関しては、態度の強さと一般性との間に強い相関があるという報告も紹介している。

判断については、Marks(1943)のアメリカ黒人の皮膚の色についての判断の実験が紹介されている。それによると、中程度の色の濃さの黒人は、比較的色の薄い黒人からは色が濃いと判断され、比較的色の濃い黒人からは、色が薄いと判断された。つまり、このような色の判断は、波長という物理的尺度の関数であるだけでなく、社会的地位の感覚という自己中心的な尺度の関数でもあるというのである。1940年の大統領選挙の前の調査では、大統領候補の Willkie を強く支持している人々の71%は彼が選挙で勝つと予測し、弱い支持者は47%の人しかこのような予測をしなかった。この場合の態度の強さは自我関与の強さと考えられ、自我の領域に関わるかどうかによって、予測に違いが出ることを示している。

記憶の領域では、Edwards (1941) の実験が紹

介されている。彼は1940年のニューディール政策に対し賛成、中立、反対の各意見を持つ3群の被験者に、ニューディール政策についての文章を聞かせ、その直後と3週間後に46項目の再認テストを行なった。その結果、正しい答えと自分の態度との間に葛藤がある時に、記憶の合理化が認められた。つまり、記憶題材は、自我関与した枠組みに適合しないと、ねじ曲げられたり、忘れ去られたりするというを示している。

Allport によれば、準拠枠とは、個人の態度、習慣、判断の多くを相互に関連づけ、新しい判断、態度、習慣の形成に影響する何らかの時間的-空間的または文化的な方向づけを意味する。すべての準拠枠に常に自我関与があるわけではないが、それまで無関心であった準拠枠でも、危機に瀕すると自我関与され、自己の身体の一部のように守られることがある。その例として、アルザス地方の人々の二重言語の準拠枠が挙げられている。彼らは2つの言語を話すことを当り前としていたが、ナチスによってドイツ語以外を使うことを禁じられると、それは中心的な重要性を持つようになり、彼らはまるで個人的な侮辱を受けたかのような反応をした。つまり、禁止されることによって、彼らの二重言語の準拠枠が自我関与されたのである。

学習は心理学で最も大きい領域を占めているが、この領域では自我や興味の重要性が全く考慮されてこなかった。しかし、教育心理学を含むすべての応用心理学の第1のルールは、あらゆる子供と大人が何らかの成功の経験と社会的是認を必要としているということである。ある領域での成功は、他の多くの領域での失敗を補っても余りある。また、心の健康と幸福は、人間がどこかに何らかの成功の領域を見つけることにあるように思われる。つまり、満足させられるべきものは自我であって、食欲や性欲などの動因ではない。ほとんどの学習理論は複数の動因を仮定しており、しかも、それらすべてが誘因として学習に等しく有効であるとされることが多い。しかし、多くの状況で賞賛が誘因として等しく有効であることを考慮すれば、少なくとも誇りや是認に対する欲求などの自我動因が、他の動因よりも優勢であること

を認めるべきであろう。Allport は知能について、自我がそれ自身の問題を解決するための道具であると述べている。従って、子供の知能を最大限にするには、自我を最大限に拡大してやる必要がある。また、個人が全く興味を持っていない事柄で知能を測定することは、明らかに公正とは言えない。

ここで Allport は、学習理論で最も有力な法則と認められている「効果の法則」に対する批判も行なっている。報酬を受けた反応は繰り返されるという、この法則の仮定に問題があるというのである。報酬を受けた反応は、適切な刺激があっても、盲目的に繰り返されるわけではないことが、多くの実験によって示されている。Allport は、自我関与のない行動の場合に成功と反復との間の関係が強いと述べている。一方、自我関与した行動の場合、目標や反応は変更される。つまり、「効果の法則」は、自我関与の原理に対し二次的なものに過ぎないのである。

動機づけは、反応を確実なものにするためには不可欠なものである。Allport は、これについて、自我関与的なものとそうでないものとを区別すべきだと述べている。ここでは、Huntley (1940) と Wolff (1932) がそれぞれ独立に行なった実験の結果が示されている。被験者は、多くの人々のパーソナリティを、その人の筆跡、録音された声、手の写真、話し方などの表出行動の記録から判断するよう求められる。その際、被験者はごく普通に動機づけられている。そして、実験の途中で、被験者は自分自身の表出行動の記録を見せられるのだが、ほとんどの被験者はそれを自分のものと意識の上では気づかなかつた。しかし、そのときの評定は、よく似た他者の表出行動に比べて、非常に好意的になったり、ひどく非好意的になったりして、決して無関心な評定とはならない。さらに、被験者が自分の記録であることに半ば気づくと、評定は一層偏ったものとなるが、完全に気づくと評定はどっちつかずのものとなる。この結果は、自我関与システムが、被験者がその理由を知らないのに、極端に判断に影響することを示して

いる。また、自我関与の識閾が、自己認識の識閾より低いことも示されている。さらに、動機づけに関して重要なことは、自我に関わった動機づけとそうでない動機づけとが異なるということである。

要求水準の多くの研究者は、自我の概念を全く使用していない。しかし、要求水準の研究結果は、被験者が自己評価を可能な限り高い水準に維持しようとするという Hoppe (1930) の仮説を、直接的あるいは間接的に支持している。例えば、Frank (1935 a) によると、状況に強く関与した被験者は、そうでない被験者に比べて、達成を望んだり期待したりした目標と実際の結果との差が、3倍から7倍も大きい。さらに、Frank (1935b) は、自我関与した被験者が要求水準を能力に合わせる前に試行を繰り返すことを示した。競争心は、おそらく自我関与の徴候であり、通常、高く一貫した要求水準を生み出す。しかし、競争を恐れる被験者は、恥をかく危険を避けるために、一貫して要求水準を低くする。いずれにしても、要求水準を決定するのは、自我の要求なのである。

最後に、産業心理学の領域に関して、Roethlisberger と Dickson (1939) や Watson (1939) らの結果が示されている。それによると、従業員が何よりも望んでいるのは、仕事に対する信用、興味の持てる仕事、感謝、是認、雇用者や仲間との息の合った関係であった。従業員は、これらの満足を高い賃金や仕事の安全以上に望んでいる。つまり、従業員は、以前に考えられていたような「経済的人間 (economic men)」というよりも、「自我としての人間 (ego men)」なのである。

以上のように、Allport は心理学の様々な領域での自我の重要性を示している。ここでは、自我の概念についての明確な定義を行わずに実験例や具体例を示したが、Allport の用いる「自我」あるいは「自我関与」という概念のニュアンスは、このような例から汲み取ることができたのではないだろうか。まさに、このような様々な現象に関与し、われわれに影響を及ぼすものこそが、心理学が研究対象とすべき「自我」なのである。

2

主な自我・自己についての理論

1. James らの自我理論 9
2. 精神分析の自我理論 12
3. Rogers と Allport の 自我理論 15
4. 実験社会心理学での自我・自己の研究 19

自我については、多くの哲学者や心理学者が考察を重ねてきた。特に、19世紀の末から20世紀の前半にかけて、今日の自我研究に大きな影響を与えているいくつかの理論が生まれている。この章では、その中でも特に強い影響力を持つ、James らの自我理論、精神分析学的自我理論、Rogers、Allport の自我理論について述べる。さらに、近年大きな発展を遂げている実験社会心理学での成果についても言及したい。

1. James らの自我理論

William James は、プラグマティズムの哲学者として著名であるが、自我を最初に心理学において体系的に取り上げた心理学者でもある (James, 1890)。James (1892) によると、各個人にとっての宇宙は、自我と非自我に二分され、すべての人が各自の自我に唯一無二の興味を抱いていることは、根本的な心理学的事実である。さらに、他人の自我に対しては、自分の自我に対するのと同様の興味を持つことはできないとも述べている。

彼は、自我の分析を始めるにあたって、自我 (the self) を主我 (the I) と客我 (the Me) とに

分けている。James によれば、全自我は、いわば二重構造になっていて、半ば被知者であり半ば知者であり、半ば主体であり半ば客体である。そこで彼は、被知者または客体としての自我を客我と呼び、知者または主体としての自我を主我と呼ぶことにした。しかし、この両者は識別できる二方面であるというだけで、両者の同一性は否定困難な常識上の定説であると述べている。

客我は、考え得る最も広義においては、人が自らのものと呼び得るものすべての総和を指す。彼は、客我の構成要素として、物質的客我 (the material me)、社会的客我 (the social me)、精神的客我 (the spiritual me) の3つを挙げている。物質的客我には、身体、衣服、直接近親の家族、住居、財産が含まれており、その核心は身体である。われわれはすべて、身体を保護し、美しい服を着て、自分の家族を養育し、自分のための住居を見つけて住み、それを改善しようとする盲目的衝動を持っている。また同じように、財産を集めようとする。

社会的客我は、その人が周囲の他者から受ける認識である。従って、社会的客我は、その人を認める個人の数だけ存在することになる。しかし美

際には、そのような個人はいくつかの集団に分けられるので、その人の所属する集団の数だけ社会的客我が存在することになる。その結果として、人間はいくつかの自我に分裂し、場合によっては相互に調和しないこともある。社会的客我の中で最も特殊なものは、その人が愛する人の心の中にあるものである。この自我が認められるか否かによって、その人の満足は大きく左右される。

精神的客我は、自分の様々な意識状態、心的能力、諸傾向を具体的に集めた全体を意味する。精神的客我の中では、能動的な感じを伴う意識状態ほど中心的である。従って、感覚的なものよりも情緒や欲望の方が中心的であり、知的過程よりも意志決定の方が中心的となる。

James は、客我の構成要素が喚起する感情や情緒として、自己評価 (self-appreciation) を挙げている。これには、自己に対する満足と不満足との2種類がある。自慢、自負、虚栄、自尊、尊大、虚飾は、自己に対する満足の同意語であり、遠慮、卑下、当惑、自疑、羞恥、屈辱、悔恨、不名誉感、失望は、自己に対する不満足の同意語である。このような自己感情の正常な起因は、その人の実際の成功や失敗、世の中での地位の上下などである。しかし、自己満足や不満足は、原始的な情緒と考えられ、内臓的・有機的な条件によっても左右される。

客我の構成要素は、感情や情緒を喚起するだけでなく、人に様々な行為をとらせる。それが自己追求 (self-seeking) と自己保存 (self-preservation) である。James は、これらの中に根本的な本能的衝動が多く含まれていると述べている。例えば、身体的自己保存の行為には、有用な反射運動、消化運動、防御運動などがすべて含まれ、身体的自己追求の衝動には、狩猟、獲得、家庭建設、機具製作の本能が含まれている。また、恋愛、友情、他人の注目と賞賛を求める欲望や、競争心、嫉妬、栄誉、影響力、権力を愛することなどの社会的自己追求も、純粋な本能と見ることが可能であるとしている。一方、精神的自己追求は、心的発達に至るすべての衝動を含み、知的、道徳的、宗教的向上心などが含まれる。

このように客我には複数の構成要素があるが、

James は、これらの相互関係についても言及している。まず、様々な諸客我は必ずしも並存が可能とは限らないので、われわれはそのうちの一つを選択し、他を放棄しなければならないことがある。その場合、選択された客我のみが、われわれにとっての実在となる。そして、選択された客我の失敗は真の失敗となり羞恥を引き起こし、その成功は真の成功となり喜びをもたらすのである。

ところで、成功や失敗についての自己感情として、自尊心 (self-esteem) についても述べられている。James は、「自尊心=成功 (success)/願望 (pretensions)」と定式化している。つまり、自尊心の増大は、大きな成功をおさめることによって、願望を小さくすることによっても達成できるのである。選択された客我とは、この場合の願望にあたり、誇りであると同時に重荷でもある。

次に、様々な客我間の階層性について述べられている。それによると、身体的客我が最も底辺にあり、精神的客我が頂上にある。そして、身体以外の物質的客我と社会的客我が、その間に位置している。この階層性とは、上位の客我の自己追求や自己保存のために、下位の客我の自己追求や自己保存が放棄されることを意味している。さらに James は、各客我を現実的なものと可能的なものに区別し、後者の方が重要視される傾向があることも指摘している。例えば、身体健康のために現在の快楽を止めることなどが挙げられている。

最後に、主我についての James の理論を見てみよう。James は、主我が「考える主体」であり、これを意識の経過的状态であると考えた。意識は、一瞬間前の意識を、その所有していたところのものと共に包摂する。つまり、このような意識の流れを「考える主体」と考えたのである。それまでの多くの哲学者は、経過的意識状態の背後に不変の実体や行為者を想定している。そして、「靈魂」、「先験的自我」、「精神」などは、この不変的な「考える主体」に与えられた名称なのである。しかし、James は、自然科学的見地の範囲内では、このような実体を仮定せず、「考え」それ自体が「考える主体」であるという暫定的な解決をとるべきだと述べている。

以上が、James の自我論のあらましである。James の理論は、以後の多くの研究者に大きな影響を与えた。中でも C.H. Cooley と G.H. Mead は、James の正統な後継者と言えるであろう。そこで、この2人の理論にも若干触れておくことにする。

Cooley (1902) は、社会的な側面を大きく取り上げて自我論を展開した。そういう意味では、James の社会的客我を発展させたとも言えることができる。Cooley の理論によると、社会から離れた個人や、個人を離れた社会は、実際の経験ではありえず、個人の自己もまた他の人々に対する関係を含むものである。従って、自己とは社会的自己ということになる。Cooley は、この社会的自己の性質を説明するために、反映的自己、あるいは、鏡映的自己 (the reflected or looking glass self) という概念を提唱している。鏡映的自己は、自分が他者の心にどのように映っているかを、他者の言動や態度などから想像することによって形成される一種の自己観 (self-idea) である。これには、3つの主要な要素が認められる。第1は、他の人々の目に映った自分の姿についての想像であり、第2は、その姿に対する他の人々の判断についての想像である。そして第3は、それに伴う誇り、満足、屈辱などの自己感情である。この中でも第2の要素、即ち、他の人々の判断についての想像は特に重要である。というのも、個人に誇りや恥を抱かせるのは、機械的に映った自分の姿ではなく、その人に対する他の人の評価や判断の想像だからである。この意味では、社会的自己を鏡映像にたとえるのは、必ずしも適当ではないことになる。また、個人の自己感情は、彼の姿の映っている相手の性格によっても変化する。率直な人の前では、ごまかしの多い自分の姿を恥じ、勇敢な人の前では、自分の姿が臆病に見えることを恥じる。このように Cooley は、個人に対する周囲の人々の態度や行動によって、その個人の自己概念や自己感情が規定されることを強調した。

G.H. Mead (1934) も、Cooley のように自我の

社会的側面を強調した学者である。彼は、James のように、広義の自己 (the self) を主体としての自己 (the I) と客体としての自己 (the Me) との2つに分けて考えている。人は、他の人々を彼の対象とするように、自分自身を自分にとっての客体とすることによって、社会の一員として合理的で効果的な活動を為し、適切な態度をとることができる。こうした客体的自己を生じさせる基礎となる経験は、身振りを含む言語活動である。他の人々との会話の際には、身振りや発言は、聞き手に対するのと同じような効果を、話し手自身にも及ぼしている。話し手は、このような自分の側に映し出している聞き手の反応を考慮しながら、自分の話すことをコントロールしていくのである。このように、言語活動の際、聞き手の反応を自分の内に感じ取るところに、自己の生じる基礎がある。

次に客体的自己の発達の土台となるのは、役割遊技とゲームである。ゴッコ遊びで何かの役割を演じている子供は、その振舞いが相手の子供たちに与えるのと同様の効果を、自分自身の中にも呼び起こす必要がある。子供は、その役割を演じている自分を客体として見て、それに対応する態度をとらなければならない。つまり、子供の中では、自分とそれに対応するもう一人の自分との間で、一種の会話が進行するのである。ここに、主体としての自己と、客体としての自己の萌芽が認められる。ゲームになると、参加者は、他のすべての参加者の態度を内的に演ずる必要がある。例えば野球では、各選手の行動は、他のすべてのポジションの選手の行動を推測することに基づいて規定されている。Mead は、このような一連のプロセスに含まれる人々の態度の組織的なまとまりを他者 (the other) と呼び、さらに広い社会での様々な態度や行動の組織体を、一般化された他者 (the generalized other) と呼んだ。そして、この一般化された他者が、個人の中に自己という統一体をつくると考えたのである。つまり、自己は、社会の他の人々の、様々な場面における態度を身につけることによって形成されるのである。

それに対し主体としての自己は、個人の行動に個人性や独自性を生じさせる。主体としての自己

の行動には不確定的なところがあり、実際に行動にうつされるまでは、当の本人でさえもどのように行動が実行されるかは不確かである。そしてそこには、新奇で予測不可能なものが含まれているのである。それ故、客体としての自己が、社会の行動の基準や習慣などの内的に組織された態度として存在していても、主体としての自己によって行動が実行にうつされる時には、一種の独自性が見られることになる。全体としての自己は、このような社会的共通性を持った客体的自己と個性的な主体的自己との2つの側面を持ち、この両者が一つとなって一個のパーソナリティを形作っていると考えられるのである。

2. 精神分析の自我理論

精神分析学の始祖である Sigmund Freud の自我理論が形を整えたのは、1923年の「自我とエス」においてであり、それが完成に至ったのは、1934年の「続精神分析入門」においてである。Freud (1934) は、意識性を意識、前意識、無意識の3つの質に分け、心を超自我、自我、エスの3つの領域に分けている。ここでは、主に「続精神分析入門」(Freud 著 懸田・高橋訳, 1971) に基づいて、これらの性質や機能と、その相互関係について見ることにする。

まず意識性の問題について見ると、記述的意味で「無意識的」と呼ばれるものとは、例えば、作用の結果から見てその存在を仮定せざるを得ないが、しかしそれについて、われわれが何も知らないところの、ある心的過程のことである。ところが力動的意味では、無意識的なものを2種類に区別することができる。1つは、容易に意識的なものへと変えられるもので、もう1つは、意識的なものへの変換が起りにくく、それは非常な努力の結果可能になるか、場合によっては決して可能にならないという無意識である。Freud は、用語の意味の曖昧さを避けるために、後者のみを「無意識的」と呼び、きわめて容易に意識的となる前者を「前意識的」と呼ぶことにした。このようにして、意識、前意識、無意識という3つの述語を用いて、心的現象を記述するに至ったのである。

しかし、精神分析研究においては、「無意識的」という述語がさらに第3の意味で使われる必要が生じた。それは、通常、自我が心の営みの重要な一領域を認知することができないということに発している。この領域における諸過程は、力動的な意味において無意識的ということが出来る。そこで、「無意識的」という述語を局所的あるいは体系的な意味にも解し、心的なものの質というよりも、むしろ次第にある心理的な領域という意味を持たせるようになったのである。ところが、この領域だけが無意識的だというわけではないため、この領域を「無意識体系」と呼ぶことはできない。そこで、「無意識的」という語を体系的な意味では使用せず、この領域に新しい名称を与えることにした。それが「エス(Es)」である。この語は、ドイツ語の非人称代名詞で、心理的領分の自我無縁性をあらわすのに適していると考えられたのである。

エスは人格の暗い、近寄りたがたい部分であり、自我の対立物である。比喩的に表現するならば、エスは混沌、沸き立つ興奮に満ちた釜なのである。エスはもろもろの欲動からくるエネルギーで充満しているが、いかなる組織も持たず、いかなる全体的意志をも示さず、快感原則の厳守のもとにただ欲動欲求を満足させようという動きしか持っていない。エスにおける諸過程には、論理的思考法則は通用しないし、エスの中には時間的観念に相当するものも見出せない。つまり、放出を待ち望んでいる欲動充当がエスのすべてなのである。

Freud は、本来の自我の性格を記述するのにあたって、心の最上部層の知覚意識体系に注目している。この体系は外界に向けられていて、外界の知覚を媒介する。知覚一意識体系は、心全体の感覚器官であって、外から近寄ってくる刺激だけでなく、心の営みの内部からくる刺激をも感受する。自我は、この知覚一意識体系の媒介のもとで、外界の影響によって変化したエスの一部分である。自我は、刺激を受け入れたり防いだりするようにできている。そして、エスのためになるように、エスに対し外界を代弁するという任務を引き受けている。自我はこの任務を果たすために、

外界を観察し、外界の忠実な模像を知覚の記憶痕跡の中に沈澱させる。また、自我は運動性への通路を支配しているが、自我は欲求と行動との間に思考作業をはさみ込むことによって、エスにおいて支配的な快感原則を王座から退け、その代わりに現実原則を据えるのである。このように、エスが心の営みにおいて無制限な情欲を代表するのに対し、自我は理性と分別を代表することになる。

超自我は、これに対し、良心と自己監視の機能を持つ法廷と言うことができる。精神分析理論では、欲動生活の諸欲求とそれに逆らう抵抗との間の葛藤を、様々な症状の原因と考えてきた。そして、このように抵抗し、拒絶し、抑圧する法廷が存在すると思ったのである。例えば、注釈妄想に悩む患者は、未知の力に絶えず自分の内密な言動に至るまで監視されていて、その監視の結果を告げ知らせる声が幻聴として聞こえてくると訴える。この監視の前提となっているのは、自分が人に疑われていて、犯せば罰せられる厳禁行為の現場を取り押さえてやろうと待ち伏せされているということである。Freud は、この注釈妄想の患者の病像に強い印象を受け、刑罰をもって嚇かすような監視の法廷がわれわれの自我の中にあり、それは自我の他の部分と分離しているということが、自我の構造上の通例の特色なのではないかと考えるようになった。そして、われわれが良心と呼んでいるものが、実はこの法廷の別の一機能だと推測したのである。われわれは、良心がそれを許さないという理由で、快楽を約束してくれる行為を中止したり、あるいは、その行為の後に良心から痛烈な非難を持って罰せられ、その行為を行なったことを後悔する。発達的に見ると、超自我は主に両親との同一化によって形成される。そして、子供が両親から感じとる完全性は、超自我に自我理想という機能を持たせることになる。自我は、この自我理想に照らして自己を測り、これを模倣しようとし、完全になれという自我理想の要求を満たそうとする。このように、超自我は、良心、自己監視、自我理想という3つの機能を担っていることになる。

ここで、意識、前意識、無意識という3つの意識性と、エス、自我、超自我という3つの領域と

の関係について見ることにしよう。エスは、先にも述べたような概念の形成過程から見ても、無意識的である。Freud は、自我と超自我についてあまり明確には述べていないが、共に前意識的であり、若干部分は無意識的であると考えるのが一般的である。

自我とエスの関係を見ると、自我は、エスに対する外界の影響とエスの意図を有効にはたらかせるよう努め、エスの中で拘束されずに支配している快感原則の位置に現実原則を置こうと努めている。その一方で、力動的な点において自我は弱く、そのエネルギーをエスから借りている。自我は、エスからエネルギーを吸い上げるために、例えば、対象との同一化を行ない、エスのリビドーを自己に向けようとする。自我は一生涯のうちに多数の対象充当の沈澱物を自己の中に取り込んでいる。自我のエスに対する関係は、馬に対する騎手の関係に例えられる。馬は動くためのエネルギーを供給し、騎手は目的地を定め、馬という強い動物の動きを御する特権を持つ。しかし、しばしば、騎手は馬自身の行こうとする方向へ馬を勝手に行かせなくてはならないこともある。エスと自我の間には、このような密接な関係が存在しているのである。

一方、自我はいかなる場合でも厳しい超自我に監視されている。超自我は、自我に対して一定の規範を突きつけ、自我がそれに従わない場合には劣等性と罪悪意識という緊張感情をもって自我を罰する。さらに、自我はそもそも知覚体系の諸経験から出てきたものなので、外界の諸要求を代弁するのは自我の宿命となる。つまり自我は、エス、超自我、外界という3人の君主に仕え、それぞれの注文と要求をお互に調和させようと骨を折るのである。そして、自我は自分の弱みをさらけ出さざるを得なくなると、突如として不安状態に陥る。外界に対しては現実不安を発生させ、超自我に対しては良心と不安を発生させ、エスにおける情欲の強さに対しては神経症的不安を発生させるのである。

以上のように、Freud の自我理論は、それぞれ独自の役割や機能を持った自我、エス、超自我という3つの基本概念に基づき構成されている。精

Ⅷ 円熟期								自我統合 対 絶望
Ⅶ 成年期							生殖性 対 停滞	
Ⅵ 若い成年期						親密さ 対 孤独		
Ⅴ 思春期と青年期					同一性 対 役割混乱			
Ⅳ 潜在期				勤勉 対 劣等感				
Ⅲ 移動 性器期			自発性 対 罪悪感					
Ⅱ 筋肉 肛門期		自律 対 恥と疑惑						
Ⅰ 口唇 感覚期	基本的信頼 対 不信							
	1	2	3	4	5	6	7	8

図 2-1 Erikson (1950) の漸成的図式 (仁科訳 (1977) より作成)

精神分析学は、Freud 以降も発展し、自我の問題についても精神分析的な立場から研究が進められているが、自我、エス、超自我という概念は基本的には継承されている。但し、Freud の言う自我が、エス、超自我、現実の3者の要求の調整役として受動的に振舞うものであるのに対し、Freud 以降は、自我をより自律的なものとする傾向が強くなる。例えば、Freud の娘、A. Freud (1936) は、防衛機制に注目し、自我の防衛的側面について明確に系統立てて論述している。また、Hartmann (1939) は、自我がエスから発達するわけではなく、自我もエスも共に共通の母胎から分化すると考えた。ここでは、精神分析学的自我心理学者の中でも、心理・社会的側面から自我の発達に注目した E.H. Erikson の理論について述べておこう。

Erikson (1950, 1959) は、人間の誕生から死に至るライフサイクルを8つの発達段階に分け、人生の中で発達させられるべき精神的健康の構成要素を8つ挙げている。8つの発達段階とは、Ⅰ口唇・感覚期、Ⅱ筋肉・肛門期、Ⅲ移動・性器期、

Ⅳ潜在期、Ⅴ思春期と青年期、Ⅵ若い成年期、Ⅶ成年期、Ⅷ円熟期である。一方、8つの精神的健康の構成要素とは、1 基本的信頼の感覚、2 自律的意志の感覚、3 自発性の感覚、4 生産の感覚、5 同一性の感覚、6 親密さの感覚、7 生殖性、8 完全性である。そして、ⅠからⅧの発達段階と1から8の構成要素の間には対応関係が存在し、Erikson は、それを「漸成的図式 (epigenetic diagram)」に表している (図 2-1 参照)。これによると、各構成要素は、対応する発達段階において発達させられるべきもので、例えば、1の基本的信頼の感覚は、Ⅰの口唇・感覚期において発達させられるべき構成要素ということになる。正常な状態では、すべての構成要素は初めから何らかの形で存在しているが、対応する発達段階に至って初めて優勢になり、その危機に直面し、永続的解決を見出す。赤ん坊はきつく抱かれると怒って自由に手を動かそうとするといった特有の振舞い方をするが、そこには「自律性」に類似したものが示されている。しかし、正常な状態では、赤ん坊は2歳になって初めて、自律的存在か、依存的存在かのどちらかを選ぶという、全体としての危機

的な選択を経験し始める。また、そのとき初めて、環境との決定的出会いをするための準備態勢が整うのである。各段階ごとに記述されなければならないのは、まさにこの出会いであり、それによってもたらされる危機であると Erikson は述べている。

精神的健康の構成要素の中で特に重要なのは、同一性 (identity) あるいは自我同一性 (ego identity) の感覚である。この同一性の感覚とは、内的な不変性と連続性を維持する能力が、他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信のことである。人間生活の社会のジャングルの中では、この自我同一性の感覚がなければ生きているという感覚がなくなってしまう。自我同一性は、それ以前のすべての同一性の漸進的な統合から発達する。この発達では、全体は部分の総和以上の独自の特質を獲得する。そして、最終的な同一性は、青年期の終わりに確立される。このため社会は、各個人の要求に応じて何らかの形で公認された子供時代と大人時代の媒介期間、即ち、制度化された心理・社会的猶予期間 (psychosocial moratorium) を提供している。最終的な同一性は、すべての重要な同一化を包括するが、それらの同一化群から独自で適切なまとまりを持った全体を形成している。青年期の終わりは、はっきりした同一性の危機の段階であり、この時、同一性と対極をなすのが役割混乱あるいは同一性拡散である。同一性拡散は、自我同一性を確立する能力を失うという結果を生じる。そして、急性の同一性拡散の状態は、通常、青年が肉体的親密さや、決定的職業選択、激しい生存競争、心理・社会的な自己定義などに、同時に身を賭けることを要求するような一連の諸経験に身をさらず自分に気づく時に顕在化する。発生的な見地から見ると、同一性形成過程は、生得的、体質的要因、その個体特有なリビドー欲求、恵まれた能力、重要な同一化、効果的な防衛、成功した昇華、一貫した役割などを統合して行く構造化の過程と行うことができる。つまり、自我同一性の形成過程は、自我を統合していく過程なのである。

以上のように Erikson は、自我同一性という概念を用いて、自我あるいはパーソナリティの発達

について考察している。彼はこの概念を通じて、自我と社会の相互的な関係や、自我の統合の問題について示唆に富んだ見解を示していると言えるであろう。

3. Rogers と Allport の自我理論

上記の2つの研究の流れ以外にも数多くの自我理論があるが、ここでは、C.R. Rogers と G.W. Allport の自我理論について述べることにする。この2人の自我理論は、必ずしも類似しているわけではないが、個人の内的な視点を重視し、包括的な視点からパーソナリティを捉えたという点で共通点を持つ。

C.R. Rogers は、クライアント中心療法を提唱し、臨床心理学に大きな足跡を残した人物として著名である。この療法を裏付ける彼のパーソナリティあるいは行動についての理論においては、現象の場 (phenomenal field) における自己構造 (self structure) あるいは自己概念 (self-concept) が大きな意味を持っている。以下、Rogers (1951) のパーソナリティや行動の理論を見ていくことにしよう。

彼は、個人の経験や知覚を重視する立場をとっている。このような考え方によると、すべての個人が、自分が中心であるところの、絶え間なく変化している経験の世界 (world of experience) に存在することになる。この経験の世界は、現象の場 (phenomenal field) とか経験の場 (experiential field) と呼ばれ、有機体によって経験されるすべてを包含する。そして、有機体は、この場を知覚・体験したままのものとして、この場に対し反応する。すなわち、この知覚の場が、有機体にとっての現実 (reality) なのである。これは、有機体が絶対的な現実には反応するのではなく、知覚された現実には反応することを意味している。さらに、この有機体は、1つの組織化された全体 (an organized whole) として、この現象の場に反応するのである。有機体は、常に全体的に組織化された体系であり、その体系においては、ある部分の変化は、必ず他の部分に何らかの変化をもたらす。

次に、要求 (need)、行動、情動の関係について

見てみよう。彼によると、有機体には1つの基本的な希求 (striving) がある。それは、自分自身を現実化し、維持し、強化することである。この現実化とは、有機体の指向的な側面について述べたもので、有機体が成長、成熟、自己実現などを目指すことを意味している。すべての要求は、このような有機体が自己を維持し、強化しようとする傾向から生じ、すべての要求は、このような基本的な傾向と結び付いている。人間という有機体の場合は若干異なるが、行動とは、知覚された場において、自分が経験した要求を満足させようとする目標指向的な企てである。そして、情動とは、このような目標指向的な行動に伴ったもので、一般的にはこのような目標指向的な行動を促進するものである。情動は、基本的には2つのグループに分けられる。1つは不快あるいは興奮した感情で、もう1つは平穏なあるいは充足した情動である。前者は、有機体の行動という目標追求的努力に伴い、後者は、要求の充足、すなわち、完成的な経験に伴う傾向がある。情動の強さは、有機体の維持と強化に対して持つ行動の意味の知覚によって変化する。有機体の生死を決定すると知覚されるような行動は強い情動を伴い、有機体にとってわずかな意味しか持たないと知覚された行動は穏やかな情動を伴う。そして、行動を理解するために最も有利な観点は、その個人自身の内的な準拠枠 (internal frame of reference) から得られる。個人の経験の場を十分に知ることのできる唯一の個人は、その個人自身である。従って、できる限りその個人の目を通して経験の世界をながめることにより、その個人の行動は最もよく理解されることになる。しかし、その個人の準拠枠についての知識は、その個人とのコミュニケーションに依存しており、そのコミュニケーションは常に誤りを含んでいる。従って、準拠枠の理解も不正確なものとなる。

彼は、このような基本的な考え方を示した上で、自己についての理論を展開している。まず、自己は、全体的な知覚の場の一部が分化したものとして述べられている。これは、自己の発達について述べたもので、幼児が発達するにつれて、全体的な私的世界の一部が、次第に「私 (me, I,

myself)」として認識されるようになることを意味している。さらに、環境、特に他者との相互作用の結果として、自己の構造 (the structure of self) が形成される。この自己の構造は、「私」の特質や関係についての知覚が組織化された、流動的だが首尾一貫した概念のパターンである。そして、これらの概念に結び付けられている価値も自己の構造の中に組織化されている。この自己の構造は自己概念とほぼ等価なものと考えて差し支えないであろう。様々な経験に結び付けられている価値や自己構造の一部である価値は、ある場合には有機体によって直接経験されるが、ある場合には他人から取り入れられたり受け継がれたりする。しかし後者の場合でも、あたかも直接体験されたかのように、歪めた形で知覚されるのである。様々な経験が自己との関連でどのように扱われるかについては、3つの場合が考えられる。1つめは、何らかの自己との関係へと象徴化され、知覚され、組織化されるという場合で、2つめは、自己構造との関係が全然知覚されないため無視されるという場合である。そして3つめは、その経験が自己の構造と矛盾するため、象徴化を拒否されるか、あるいは、歪曲されて象徴化をされる場合である。この中で特に注意を必要とするのは3番目の場合である。これには意識的な知覚の拒否の場合もあるが、それよりも重要なのは Freud の言う抑圧 (repression) にあたる場合である。このような場合には、有機的な経験はあるが、この経験の象徴化が存在しないか、あるいは、歪曲された象徴だけが存在すると考えられる。それは、有機的な経験の適切な意識的な表象が、自己の概念と完全に矛盾すると考えられるためである。自己と行動の関係については、次のように述べられている。有機体によって採択される行動の仕方はほとんど、自己概念と首尾一貫している。これには例外もあるが、有機体が、何とかして自分の要求を満足させようとする時にとる形式は、自己概念と首尾一貫している形式でなければならない。これは、自己概念が行動の形式を統制していることを意味している。ところが、行動は象徴化されていない有機的な経験や要求から起こる場合もあり、このような行動は自己の構造と矛盾すると考

えられる。しかし、このような行動はその人自身によって、自分のものとは認められないのである。

Rogers は、このような自己の理論に基づいて、心理的不適応の問題についても考察している。それによると、心理的不適応は、有機体が重要な感覚的・内臓的経験を意識することを拒否し、そのような経験が象徴化されず、自己構造のゲシュタルトへと組織化されない時に存在する。そしてこのような状態が存在する時には、基本的あるいは潜在的な心理的な緊張が存在する。これは、現にあるがままの自分を体験している有機体と、行動に対して統治的な影響を及ぼしている自己概念との間に食い違いがあることを意味している。それに対し心理的適応とは、自己概念が象徴のレベルにおいて、有機体の感覚的・内臓的経験をことごとく自己概念と首尾一貫した関係に同化しているか、あるいは、同化するであろう時に存在する。つまり、心理的適応は、自己概念が、少なくともおおざっぱに有機体の一切の経験と一致する時に存在するということである。また、自己の構造と矛盾・対立するあらゆる経験は、何らかの脅威として知覚され、このような知覚が多くなるほど、自己構造はそれ自体を維持するように強固に組織化される。これは、脅威とそれに対する防衛についての記述と言える。このような防衛によって、象徴化を拒否されたり歪曲されて象徴化される感覚的・内臓的経験が多くなるほど誤った構造が維持されるようになり、新しい経験が脅威として知覚される見込みも大きくなる。結果として、個人において防衛的な行動が拡大することになるのである。

それでは次に、このような不適応に対するセラピーについての考え方を見ることにしよう。それによるとまず、自己の構造に対しての基本的に何らの脅威も含んでいない条件のもとでは、自己構造と矛盾・対立する経験は、知覚され、検討されるようになり、自己構造は、このような経験を同化し包含するように修正されるようになる。つまり、このような条件のもとで自己構造の再組織化が行なわれるのである。そして、個人が自分の感覚的・肉体的経験の一切を知覚し、それを首尾一貫した統合された1つの体系へ受容するならば、必

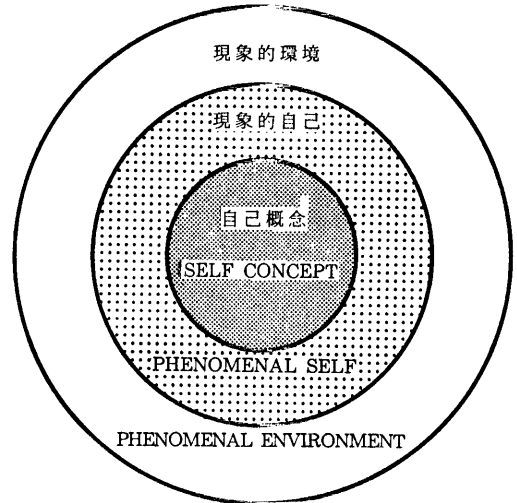


図2-2 Combs と Snygg (1959) の現象の場

然的に他の人々をより一層理解し、独立した個人として受容できるようになる。これは、セラピーの結果、より一層気楽に自分自身のままであり、より一層自分自身に確信を持った人が、他人との関係においてより一層現実的になり、より良い相互的な人間関係を発展させるという彼の臨床経験に基づいている。自己構造の再組織化の過程において、自分の有機的な経験を、ますます多く自己構造へと知覚し受容するにつれて、個人は、歪曲されて象徴化されていた自分の内面への投影に大きく基礎づけられた、現在の価値体系を、次々と起こっている有機体的な価値づけの過程へと置き換えていくのである。

このように Rogers の自己理論では、現象的な場における自己の知覚や、組織化された自己構造・自己概念と有機体としての感覚的・内臓的な経験との関係が問題となっている。現象的な場と、自己の知覚あるいは現象的自己については、Combs と Snygg (1959) の考え方とよく似ている(図2-2参照)。しかし、彼らが明確に意識された知覚を中心に理論を展開したのに対し、Rogers は感覚的・内臓的な経験という曖昧な知覚体験や抑圧の問題を扱っている点で異なる。これは、彼が意識にのぼったものだけを問題としているのではなく、広い意味での経験すべてを問題とすることのあらわれと言えるであろう。Rogers のセラピーの考え方は、大ざっぱに言ってしまえ

ば、自分の感知的・内臓的経験を知覚し、受容することによって、自己構造を再組織化することにある。これは、Freud の治療法とも通じるものがあるが、Freud が自我それ自体の構造をほとんど問題にしなかったのに対し、Rogers が自己自体を構造化されたものとして捉え、その再組織化をセラピィの中心問題に据えていることは、注目に値するであろう。

次に、G.W. Allport の自我理論について見ることにしよう。Allport (1943) は、第1章でも取り上げたように、自我・自己の現代心理学に置ける重要性を指摘した。この中で彼は、自我あるいは自己の概念の多様性を示した。しかし、Allport (1955) は、自我・自己の概念が何でも屋としていい加減に使用され、結果として自我・自己の研究に害を及ぼすことを憂慮した。また、心理学が最初にやるべきことは、個人にとって重要なことを弁別することであると主張している。彼は、このような考え方に基づいて、プロプリウム(proprium)という概念を用いることにした。これは、われわれが特に自分のものだと思わず、われわれの生活のすべての領域を指す。そして、このプロプリウムの主要な機能と特性を以下のように8つに分けて述べている。

- ① 身体感覚 (bodily sense) : これは発達的に見て、我々が最初に出会う客我 (me) である。これは、内臓や筋肉などの有機体の中で起こる感覚の流れで構成されている。この感覚の流れは通常はぼんやりとしか経験されず、しばしば全く気づかれないが、身体的な運動に伴う興奮や感覚的な喜びや痛みの瞬間には意識にあらわれる。身体感覚は、自己の感覚すべてを説明するものではないが、自己意識の生涯を通じての基盤となるものである。
- ② 自己同一性 (self-identity) : われわれは、昨日の思考の一部を今日覚えていて、今日の思考の一部を明日も覚えている。そして、それらが同一人物のものであることを主観的に確信している。このような状況は、神経筋システムの器官的な連続性が主要な要因になっているが、こ

の過程には、神経によって可能となる記憶力以上のものが含まれている。幼児は、自分の着衣や名前、社会的な相互作用によって自他の分離を行ない、徐々にこの感覚を発達させる。しかし、自己同一性の発達には困難が伴い、4、5歳になるまでは安定しない。

- ③ 自我高揚 (ego-enhancement) : これは、プロプリウムにおいて最も有名な特性であり、厚かましい自己追求 (self-seeking) を意味する。われわれは、本質的に自己主張の衝動や自己満足、誇りの感情を持っており、自我高揚は、生存の要求と結び付いているものと考えられる。
- ④ 自我拡大 (ego-extension) : 学習の結果、子供は所有や愛の対象物、やがては、理想となる主義・主張や忠誠心に関心を持つ。つまりこれらは、個人が「私のもの (mine)」と呼ぶ対象であり、重要と思う対象である。われわれは、成長するに従って、集団、近隣、国家と同一視し、それらがわれわれにとって重要な問題となる。しかし、他の人々の家族、国家、所有物はそうならない。
- ⑤ 合理的な対処者 (rational agent) : これは、内界の要求と外界の現実とを総合する自我の特性を指している。これは、Freud の言う自我 (ego) とほぼ同義で、防衛機制を行なう。しかし、真の問題解決、適切な適応、正確な計画、比較的誤りの少ない人生の方程式の解決なども行なうことができる。
- ⑥ 自己像 (self-image) : これは現象的自己とも呼ばれ、現在のセラピィでは、この自己像の精査、矯正、拡大に患者を導くことが行なわれている。自己像には、自分の現在の能力、地位、役割という側面と、自分になりたいもの、自分にとっての要求 (aspirations) という側面との2つがある。後者は、理想的自己像とも呼ばれ、プロプリウムの想像的な側面となっている。
- ⑦ 固有的希求 (propriate striving) : 動機づけには、固有的なものと周辺的なものとの2種類があるが、これらを弁別することは難しい。しかし、自我関与した行動は、そうでない行動と明かに異なる。固有的希求の特徴は、平衡に抵抗し、緊張が維持されることである。またこれ

は、葛藤に取り囲まれた時に、パーソナリティの統一に向かうという点でも他の動機づけと異なる。そして、個人の存在にとって中心的とみなされる長期的な目標の所有が、人間と動物、大人と子供、健康なパーソナリティと疾患とを区別するのである。

- ⑧ 知者 (the knower) : プロプリウムの他の機能から超越したような認識を行なう自己、すなわち、知者があるかどうかについて、James は、思考そのものが思考する者であるとして存在を否定した。しかし、知者としての自己は、最終的で不回避的な仮定としてあらわれてくる。知ることは、「特に自分のもの」であるところの状態であり、これはプロプリウムの明確な機能の1つである。

Allport は、以上のようにプロプリウムを説明しているが、後に、異なった見解を示している (Allport, 1961)。そこではまず、プロプリウムを①から⑦までとし、⑧の知者を除いて考えている。そして、プロプリウムに被知者としての客我の位置を与えている。彼は、知者を含めた主動者としての自己を、パーソナリティの内部の固有の体系から切り放して考えることを心理学においては避けるべきだと主張しており、これはその姿勢を反映したものと言えるであろう。確かに、これらのほとんどは知覚、感覚の対象であり客我と考えられるが、⑥の合理的対処者は、知覚や感覚の対象ではなく、主動的な役割も果たしている。そういう意味では、なぜこれがプロプリウムに含まれるのかという疑問も残る。

もう1つの違いは、発達の段階に従って、7つのプロプリウムの要素が提示されていることである。それによると、①身体感覚、②自己同一性、③自己高揚は誕生から3才までの間にあらわれ、④自我拡大と⑥自己像は4才から6才までの間にあらわれる。その後12才までの間に⑤合理的な対処者があらわれて、⑦固有的希求は青年期にあらわれるとされている。⑤と⑥の順序が入れ替わっていることから、1955年の時点でのプロプリウムは、明確な発達の位置づけを持っていなかったものと思われる。

全体的に見ると、プロプリウムは、他の自我・自己の理論を参考にして、包括的な視点から導き出されたものと考えられる。しかしこれは、単なる理論の寄せ集めではなく、概念的というよりも感覚的な統一を持っている。彼が自己のことを「生活の暖かい、中心的な、私的な領域」(Allport 著 今田監訳, 1968, p. 137) と述べていることからわかるように、このような統一は、生身の個人の視点から考察を行なうことによって得られたものと言えるであろう。

4. 実験社会心理学での自我・自己の研究

第2次大戦以降、アメリカでは実験社会心理学が盛んになり、現在では自我・自己に関する実験的な研究が多く為されている。しかし、自我・自己は、実験社会心理学において、はじめから中心的なテーマであったとは言えない。先にも述べたように、Allport (1943) が心理学における自我の問題の重要性を指摘したのも、実証的な研究においてあまり自我・自己が問題にされていなかったからにはかならない。Allport の講演の後、自我・自己に関する実証的研究は盛んになったが、実験社会心理学において自我・自己が特に大きく問題にされるようになったのは、1960年以降においてと言えるであろう。実験社会心理学が自我・自己の問題を大きく扱うようになったのには、主に2つの理由がある。1つは、社会心理学での重要な領域である態度研究において、自我・自己が問題とされるようになったためである。もう1つの理由は、実験社会心理学が扱う一般的なモデルがそれだけでは十分な説明力を持たず、個人差を変数としてモデルに加えるようになったためである。この個人差の変数は、従来は既存のパーソナリティ理論から導き出されるものが用いられていたが、次第に、社会心理学者が独自の変数を見つけてモデルに加えるようになったのである。ここでは、この2つの理由に即して、実験社会心理学の成果を見ることにしよう。

まず、態度理論において非常に注目を集めたものとして、Festinger (1957) の認知的不協和 (cog-

nitve dissonance) 理論がある。この理論の概略は以下のようなものである。まず、個人の認知要素間に矛盾(非一貫性)があると不協和が生じる。そして、この不協和は不快感を伴うため、個人は不協和を低減するために認知自体を変容させて、認知要素を一貫したものにする。Festinger と Carlsmith (1959) は、この理論に基づいた実験を行なった。その実験において被験者は、非常に退屈な作業をさせられた後、作業について何も知らない他者にその作業を面白いと告げなければならなくなる。しかも、この時巧みな実験操作によって、被験者は、自由意志に基づいてこのような発言をすることになる。つまり、作業がつまらないという自分の作業に対する態度と、それを面白いと他者に発言したということとの間に不協和が生じるのである。実験において、被験者は3つの条件に分けられていて、その内の1つのグループは、他者にそのような発言をすることに対し1ドルの報酬を受け取り、別のグループは報酬として20ドルを受け取ることになっている。最後のグループは、報酬も受け取らず、他者に対し発言もしない条件になっている。最後に被験者は、作業の面白さについての評定を求められるが、その結果、1ドルを受けた被験者が最も作業を面白いと評定した。この結果を Festinger と Carlsmith は、次のように説明している。作業が面白いと述べたという認知とそれは報酬のためであるという認知とは協和である。不協和の強さは、協和と不協和を含めた認知の総量に対する不協和の総量によって決定される。報酬を1ドル受け取った被験者は20ドル受け取った被験者に比べて、報酬のためにやったという協和の認知が少なくなり、従って不協和が強くなる。そのために、作業が退屈だという認知が変容したのである。

Festinger と Carlsmith の実験に対して、Nel, Helmreich, Aronson (1969) は別の視点からの解釈を加えている。彼らは、自己概念(self-concept)を変数として用いて、解釈を行なっている。それは、Festinger と Carlsmith の実験において不協和だったのは、「作業がつまらない」という認知と「作業が面白いと他者に告げた」という認知との間ではなく、「自分は善良で立派な人間だ」と

いう自己に対する認知と、「私は不正直な行ないをして、他者に害を与えた」という認知との間だということである。つまり、自己概念と自分の行動との間に不協和が起こったために、態度変容が起こったというのである。彼ら自身が意識していたかどうかは別として、彼らの視点は、態度理論に自我・自己の問題を持ち込んだことになる。すなわち、個人にとっての重要な態度の1つとして自分自身に対する態度が存在しており、その態度が維持されるように他の態度が変容することを意味している。それまでの態度理論が態度対象として扱っていたものは、主に自己にとって外的なものであったが、態度対象としての自我は、ある意味で、最も重要な態度対象と言えるであろう。このように対象として扱われる自我については、James (1892) の客我にも通じるものがある。この場合の自己概念は、おそらく精神的客我と考えられるべきものであろう。

Festinger と Carlsmith の実験の結果を全く新しい視点から解釈したものが、Bem (1967) の自己知覚理論(self-perception theory)である。この理論は、人間が自分自身の行動の観察に基づいて、自己の態度を推定するというものである。彼は、この理論の妥当性を示すために1つの実験を行なった。その実験では、被験者に Festinger と Carlsmith の実験手続きを描写した録音テープを聞かせ、録音テープの中に登場する被験者の態度を推定させた。その結果、Festinger と Carlsmith の実験の結果と類似した結果を得たのである。この実験は、必ずしも Bem の理論が Festinger の理論よりも妥当性の高いものであることを示しているとは言えないが、自我・自己の問題に対し興味深い示唆を与えてくれる。それは、個人が自分自身をどれだけ知っているのかという問題である。彼の理論は、態度のような内面的な事柄であっても、個人がそれを必ずしも明確に把握しているとは言えないことを示唆している。これの傍証としては、Schachter と Singer (1962) の実験が挙げられる。この実験は、個人が自分の生理的・情動的状态を外的な手がかりによって解釈することを示している。このような現象が常に起こるとは言えないにしても、個人にとって自分自身が必

ずしも明確で確かなものではなく、不確かさを持ったものであると言えるであろう。

Duval と Wicklund (1972) は、自己に注意を向けることが及ぼす様々な影響に注目して、自己客体視理論 (objective self-awareness theory) を提唱した。この理論に関する一連の研究では、実験的な操作によって被験者の注意を自己に向けさせている。例えば、被験者自身の声や姿を録音テープ、ビデオ・テープ、鏡を用いて被験者に示したり、被験者の前にテレビ・カメラを置くというような操作が行なわれている。こうして自己に対する注意が高まった時に自分についての肯定的なフィード・バックを受けると、被験者は自己を高く評価するが (Ickes, Wicklund, & Ferris, 1973), フィード・バックが否定的であったり、フィード・バックがなかったりすると、自己を低く評価する (Wicklund, 1975)。また、自己に対する注意が高い時には低い時と比べて、自分の行為の結果を自分に帰属させる傾向が強いことも示されている (Duval & Wicklund, 1973)。

自己客体視理論では、自己に注意が向けられた状態 (states) に注目したのに対し、Fenigstein, Scheier, Buss (1975) は個人の特性 (traits) という視点から分析を行なった。つまり、自己に対する注意の強さにおける個人差の分析を行なったのである。彼らは、この特性を自意識 (self-consciousness) と呼び、それに関わる項目で質問紙を構成して因子分析を行なった。その結果、自意識が私的自意識 (private self-consciousness) と公的自意識 (public self-consciousness) の2つの因子に分離できることを示した。私的自意識は、自己の内面や感情、気分などの他者から直接観察されない自己の側面への注意の強さを示し、認知的で私的な自己への関心を扱っている。それに対し、公的自意識は、自己の服装や髪型、他者に対する言動などの他者が観察し得る自己の側面に対する注意の強さを示し、社会的な対象としての自己に対する意識や関心を強調している。これは、個人の認知や関心の対象となる自己が、大きく分けて2つの側面を持つことを示唆している。特に、公的自意識は、James (1892) の社会的客我や Cooley (1902), Mead (1934) の自我論とも関

連を持っており、自我の社会的側面の重要性を実証的に示したものと言える。その一方で、私的自意識の存在は、自我が社会的側面以外の側面も持っていることを示していると言えるであろう。

そのほかの研究の流れとして自発的な自己概念 (spontaneous self-concept) をめぐる研究がある。これは、McGuire を中心として行なわれている研究で (e.g., McGuire & McGuire, 1981; McGuire, McGuire, & Winton 1979; McGuire & Padawer-Singer, 1976), 被験者が自発的に記述した自己の特徴の分析を行なっている。例えば、McGuire ら (1979) は、小学生の自発的な自己概念と家族構成との関連を分析し、女性が大多数を占める家族の男子は、そうでない男子に比べて、自発的な自己記述において性別により多く言及し、女子においても同様な結果が得られることを示した。彼らの研究は、自己概念を研究者の視点からだけ分析するのではなく、自発的で顕在的な自己概念を分析することによって、被験者にとってどのような側面が重要な意味をもつのかを実証的に示したものとして評価できる。また、このような自己概念の顕在性については、ほかにも興味深い研究がある。それは、Markus (1977) の self-schemata についての研究である。これは、自己に関する認知的な情報処理に注目したものである。彼女によると、self-schemata は、過去の経験から導き出された自己に関する認知的な一般化で、これは、自己に関する情報の処理を組織化し、方向づけるものとされている。彼女の実験では、自律的 (independent) な被験者が、自律性に関連する特性をあらゆる形容詞により速く反応することが示されている。自発的な自己概念や self-schemata の研究は、自己概念を含む自己に関する情報が組織化あるいは構造化されており、その構造の中での位置づけによって異なる意味を持つことを示唆している。

以上が、実験社会心理学における自我研究の成果を概観したものである。ここでは主に、自我・自己についての全く新しい視点を実証的な方法を用いて示した研究を中心に言及した。これらの研究は、自我・自己を総合的に扱っているとは言えず、ある意味では非常に局所的な研究もある。し

かしながら、ここで得られた視点は、自我・自己を総合的に考える上でも貴重なものと言えるであろう。従って、今後このような研究の蓄積が行なわれていけば、自我・自己の総合的な理解が進むものと期待される。

本章では、自我・自己についていくつかの理論を見てきた。自我・自己についての考察は多くの研究者によって為されており、ここではそのほん

の一部を概観したに過ぎない。しかし、ここに挙げた理論だけを見ても、自我・自己の多様性と重要性は理解できるのではないだろうか。自我・自己については、心理学だけではなく、哲学をはじめとする様々な領域で理論的に考察されてきた。そして、このような理論的考察は、益々盛んになる傾向を示している。そういう意味では、今後、自我の理論的な研究も大きく発展するものと期待できるであろう。

3

自我の概念の整理と技法の検討

1. 自我・自己の概念の整理	23
2. 分析の対象	26
3. 自我の実証的分析のための技法	27

前章では、自我・自己についての様々な理論について述べた。しかし、これらの理論の中で用いられる自我・自己の概念は多様で、そこから導き出される結論も多様である。このような混乱の1つの理由は、実験社会心理学での研究を除いて、これらの理論の多くが実証的な手続きで得られた研究結果に基づいたものではないことにある。実証的な研究の1つの利点は、研究者同士のコミュニケーションが容易なことにある。実証的な研究の場合、得られた結果は勿論のこと、研究の手続きや理論的な前提についても具体的に示される。そのため、ある研究者が得た結果を、他の研究者が別の視点から解釈し直すことも可能となる。このような研究者間のコミュニケーションが、やがては一般性と妥当性を持つ自我・自己の理解につながるものと思われる。本研究の目的は、このような視点に立ち、自我・自己を実証的な手続きで分析していくことにある。そこで本章では、実証的な分析に先立ち、自我・自己の概念の整理と実証的な研究技法の検討を行なうことにする。

1. 自我・自己の概念の整理

前章で見たように、自我・自己についての概念は、研究者によって実に多様である。しかし、実証的な研究を行なうにあたっては、研究対象としての自我をどのように捉えるかということを描定しておく必要がある。そこで、ここでは、自我の概念の整理を行ない、具体的に何を研究対象とすべきかを決定するための準備をしておこうと思う。まずはじめに、Allport (1943) がそれまでの心理学の文献に見られる最も重要な自我 (ego) の概念を8つにまとめているので、それを見ることにしよう。

① 知者としての自我 (the ego as knower) : これは、Brentano 流に言えば、世界との関係付けを常に「指向している」何らかの主体を意味しており、James の主我 (the I) や純粹自我 (Pure Ego) にあたる。これは、James 以来、心理学者によって見過ごされてきたが、主体-客体の問題は、現象学者やパーソナリティ科学者にとっての重要な問題として残っている。

- ② 知識の対象としての自我 (the ego as object of knowledge): これについては、2つの事実において合意が得られている。1つは、幼児は自分自身を個人として認識していないということである。つまり、幼児にとって自己と環境は未分化で、徐々にしかも困難さを伴って、分離した自己が発達する。もう1つは、我々が意識する自我は、それがどのような次元におかれているかによって異なるということである。このような自我は、身体全体を含まないこともある。身体以上のものを含むこともある。
- ③ 原初的利己心としての自我 (the ego as primitive selfishness): Max Stirner は、人間が本質として不変的に自己中心的であるという命題を発展させた。投影、合理化、防衛機制的目的は、このような自己中心的な動機づけの隠蔽にある。
- ④ 優越動因としての自我 (the ego as dominance-drive): このような立場から見れば、自我とは、地位と名声を望むパーソナリティの一部分と行うことができる。不安、不安定感、防衛性、抵抗は、自我が低下した時に、地位を守り回復しようとする衝動のあらわれである。
- ⑤ 心的な過程の受動的な組織としての自我 (the ego as passive organization of mental processes): 精神分析学では、エゴイズムを ego ではなく id から生じる衝動に帰属している。Freud の ego は、精力的な力を持たない受動的な知覚者であり、id、超自我、外的な環境といった敵対する力に気づいている「心的な過程のまとまりを持った組織」である。ego は、できる限りこれらの敵対する力を調停し、操縦しようとするが失敗すると不安に陥る。
- ⑥ 目的追求者としての自我 (the ego as 'fighter for ends'): これは、McDougall の立場や James の目的論的な時期の立場からの自我の見方である。このような見方は、Koffka の「自我を上の方に推進する力」が常に存在するという仮定ともつながる。
- ⑦ 行動のシステムとしての自我 (the ego as behavioral system): Koffka によれば、自我は同質的な場において唯一分離したシステムであ

る。自我の境界は時によって大きく変化し、また、自我はある状況下では出来事の推移を決定するシステムとして働く。しかし、多くの場合、行動は自我システムの影響から自由である。

Lewin は、自我が関与している時に存在する特殊な緊張を考慮しなければ、要求水準の変化などの多くの実験結果を説明できないとしている。Lewin も Koffka と同じように、自我を単一の実体として考えるのを避け、人間が環境との新しい危険な関係に入る時に喚起される諸力の可変的な組合せと見ることを好んだ。

- ⑧ 主観的に組織された文化としての自我 (the ego as the subjective organization of culture): Sherif によると、自我は、両親や教師からの絶えまない影響のもとで獲得され、主に社会的な価値によって作られている。そして彼は、自我が人間の中の社会的な部分にほかならないと結論づけている。Sherif ほど極端な立場を取っていない Cantril は、人間の自我と自分自身を見る時の見方は、決してまわりの文化にいつも完全に限定されるものではないが、大部分社会的に決定されることは否定できないと述べている。彼らは、自我の社会的な内容を強調することによって、ego と超自我との Freud の人工的な区別や、Stirner と Le Dantec の反社会的な唯我論に反対している。

以上が、Allport による自我の概念の整理である。この整理は、広範囲の理論が包括されているということによって重要なだけでなく、8つのまとまりとして呈示されていることにも大きな意味がある。これらの概念は相互に関係を持っていて、それらを相互に関係づけることによって、自我の概念を考える時の次元があらわれてくる。しかし、初めからそのような次元の上にこれらの概念を呈示すれば、概念の予め持っていた意味が限定されてしまう。つまり、Allport がこのような形で概念を整理してくれたおかげで、その後の研究者はこれらを自由に関係づけることができ、自我・自己の概念を広く考えることができるのである。実際、Allport の整理から、自我・自己の概念を考える上での次元あるいは視点を示している研究者

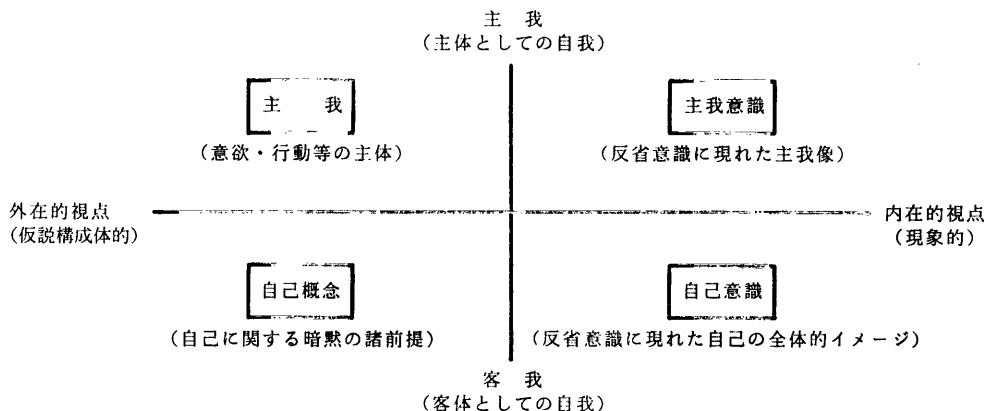


図3-1 主我と客我に関する概念整理の基本的枠組み (梶田, 1988)

が何人かいる。例えば、北村 (1977) は、次の3つの視点から Allport の整理を再分類している。なお、Allport の分類は番号で示しておいた。

- (1) 主体としての自我：①⑤⑥
 客体としての自我：②③④⑦⑧
- (2) 個人の意識的事実として本人に体験されているもの：①②
 人の行動を説明するために仮定または推定された構成概念：③④⑤⑥⑦⑧
- (3) 個人内の心身の諸機能に即して捉えられているもの：①②⑤⑥⑦
 他者または社会あるいは外界の事物に対する対立、関係交渉において捉えられているもの：③④⑧

梶田 (1988) は、2つの視点のみに注目して概念の整理を行なっている。1つは、「認識や行動の主体として考えられるものか、それとも自分自身に対する反省的意識の内容、すなわち認識の対象として考えられるものか」(梶田, 1988, p. 29) という視点である。前者には Allport の①知者が分類され、後者には②知識の対象、⑦行動のシステム、⑧主観的に組織された文化が分類されている。もう1つの視点は、「外在的視点から、つまり主体の外側から、その主体の意識や行動を統一的に理解するために要請されるものであるか、それとも、内在的視点から、つまりその主体の実際の意識体験として現われるものであるのか」(梶

田, 1988, p. 29) という視点である。後者には②知識の対象が分類されるが、それ以外は前者の色彩が強いとしている。

彼は、さらにこの2つの視点を用いて、図3-1のような自我に関する基本概念の整理を行なっている。この枠組みでは、自我全体が「主我」、「主我意識」、「自己意識」、「自己概念」という4つの下位概念によってあらわされている。主我は、身体的精神的諸機能の統合的主体であり、主我意識は主我の働きについて意識化されたものである。James の主我では、知者としての認識機能だけが問題とされているが、ここでは身体的精神的諸機能の統合主体としての、より広い意味づけが為されている。つまり、このような主我は、運動機能と、意欲、感情、興味・関心なども含めた精神的機能の統合的な主体として考えられるのである。自己意識は、自分自身に対して現に抱く意識で、自分の身体的・精神的特性、社会的な関係や役割、所有物や所属などに対する現時点での気づきやイメージである。自己概念は、このような自己意識を暗黙のうちに支えていると想定される基盤的な概念構造である。従って、自己概念はその時点で必ずしも全体が意識されているわけではなく、外在的な視点に立った1つの仮説構成体である。

梶田のこの枠組みは、実証的に自我の分析を行なうのに際して有効なものとなる。というのは、自我を実証的に測定するためにどのような側面に注目すべきかを、この枠組みから理解することが

できるからである。まず、梶田がこれら4つの概念の関係について述べているので、それについて見てみよう。それによると、主我意識は、自己意識の一部を構成するもので、しかも、自己概念の重要な一部として組み込まれていると述べられている。つまり、主我意識とは主我そのものの働きが意識化されたものであり、自己意識の一形態にはかならない。また、自己概念は、生活史を通じて形成された、様々な自己意識の沈澱物と考えることができる。従って、自己意識の一形態である主我意識も自己概念の中に組み込まれることになる。このように考えると、主我をめぐる様々な意識、イメージ、概念構造が形成されていることになる。そして、それらは主我と独立して存在しているのではなく、主我のあり方を反映しつつ存在している。しかも、それらは、主我そのもののあり方にも影響を及ぼしていると考えられる。

2. 分析の対象

それでは、実証的に自我を分析するには、何を分析の対象としたらよいのであろうか。主我は、身体的精神的諸機能の統合的の主体であり、自我と呼ばれるものの核心はこれにあると言える。主我そのものを実証的な方法で捉えようとすれば、直接的には、その個人の身体的精神的な機能の活動を総合的に測定する必要がある。しかも、主我は絶えず変化しているものなので、長期間にわたってそのようなデータを収集し、集められた膨大なデータを分析して、主我の姿を捉えることになる。しかし、行動はまだしも精神的な活動を絶えず長期間にわたって総合的に測定することは不可能である。また、もしそのような測定が可能だとしても、得られた多様で大量のデータの分析の過程においては、研究者の先入観やア・プリオリな枠組みがデータを歪めてしまう可能性もある。

ところがある意味では、各個人はそのような測定とデータの分析を自分自身で行なっている。そのあらわれが主我意識、自己意識、自己概念である。もちろんすべてではないが、主我の活動は主我意識にあらわれてくる。また、その時は主我意識にあらわれていなくても、自分の行動の結果は

自己意識という形で意識されることになる。つまり、このような「測定」が覚醒状態では絶えず行なわれていることになる。そして、得られた「データ」の一部は、他のデータと関連づけられ、分析され、自己概念としてその後の主我の活動に影響を及ぼすことになるのである。このような「測定」や「分析」の主体は、もちろん主我そのものである。つまり、主我は、自らの活動を主我意識、自己意識、自己概念などを通じてモニターしていることになる。以上のように考えると、主我意識、自己意識、自己概念を測定し分析することで、主我を含めた自我の分析も可能と言うことになる。

しかし、主我意識、自己意識、自己概念から自我の分析を行なう場合にいくつかの問題がある。その1つは、主我意識、自己意識、自己概念がどの程度正確に自我全体を反映しているのかということである。実際には、主我は膨大な自己に関する情報を知覚し分析しなければならない。しかし、すべての情報を漏れなく処理することは不可能であり、そこでは必ずと情報の選択が行なわれることになる。その時の選択には動機づけが働いており、おそらく生存や適応にとって必要な情報が選択されることになる。つまり、広い意味でその個人にとって重要な情報が選択されることになる。そういう意味では、主我意識、自己意識、自己概念は、自我全体を完全に反映してはいないものの、代表性のあるデータとなるであろう。ところが、情報の選択の時に働く動機づけはそれだけではない。例えば「自分を立派な人間と思いたい」という思いは、誰にでも多かれ少なかれあるものだが、そのような動機づけが、抑圧、合理化、投影などの形をとって、自己についての情報にバイアスをかけることになる。このようなバイアスは、その個人のパーソナリティについての情報からある程度は修正できるかも知れないが、それには限界がある。しかし、各個人は、そのようなバイアスのかかった姿を自らの姿として生活している。各個人にとっての自己とは、自分が知っているところの「私」にはかならない。そう考えると、たとえバイアスを含んでいても、それがその個人の主我意識、自己意識、自己概念である以上、分析に値す

るものと言えるであろう。

もう1つの問題点は、実際に主我意識、自己意識、自己概念をどのように測定するかということである。主我意識と自己意識は意識にあらわれるものである。意識にあらわれる以上、それらは被験者に言語化させることによって測定可能となる。しかし、これらは時間的経過に伴い常に変化している。そのため、これらから自我を捉える場合には、主我そのものを測定する場合と同様の問題が起こってくる。つまり、絶えず長期間にわたって測定を行なうことが必要となるのである。それに対し、自己概念は自己意識を支える基盤的な概念構造であり、生活史の中で徐々に変化して行くものである。しかも、主我意識と自己意識の沈澱物であり、これらの重要な要素を反映している。従って、自己概念を測定することによって自我の重要な構成要素を捉えることが可能となるであろう。ところが、自己概念は必ずしも意識化されているものとは限らない。むしろ、自己概念そのものは意識化されているものではなく、自己概念は自己意識として時々あらわれてくるものに過ぎない。つまり、実際に測定が可能なのは、このような自己意識にあらわれた自己概念なのである。問題は、自己概念をどのようにして自己意識として意識化させ、時間経過に伴って変化する自己意識の中からどのようにして自己概念を選び取るかということである。次節では、自己意識にあらわれる自己概念を測定するための技法についての検討を行なう。

3. 自我の実証的分析のための技法

自己概念 (self-concept) は、自我・自己についての実証的な研究において最もよく扱われる概念の1つである。先に述べた梶田の見方からすれば、このような研究において測定されているのは、自己概念そのものというよりも自己意識にあらわれた自己概念と言うべきであろう。また、測定の結果得られるものには、概念として確立したものだけでなく、一時的な自己意識も含まれている。そういう意味では、厳密に自己概念を測定することは不可能であり、自己概念に近い自己意識

を捉えることしかできない。自己概念に近い自己意識として、self-image (自己像) が挙げられる。これは、各個人にとっての自分の姿である。但し、自己概念のような、恒常的な構造を持ったものとは限らず、そこには一時的な自己のイメージも含まれている。自己概念を測定している従来の研究も、多くの場合、この self-image を測定していると考えられる。ところが、self-image にも意識にあらわれない潜在的なものがあり、各個人は、それらを含めると膨大な self-image を持っていることになる。従って測定技法の課題は、そのような膨大な self-image の中から、自己概念とも呼べるような、ある程度の恒常性を持って主我そのもののあり方にも影響を及ぼすような self-image を、どのように自己意識として意識化させ測定するかということになる。

自己概念や self-image を測定するための技法はいくつか考案されているが、それらは、評定法またはチェック・リスト法、Q分類技法、自由回答法の3つに大きく分けることができる。このなかで最も一般的なものは、評定法とチェック・リスト法である。これに属する技法は非常に多いが、基本的な手続きは類似している。これらの技法では、いくつかの項目が質問紙に示され、被験者はその項目が自分にどれくらいあてはまるかを評定する。項目は、形容詞のような単語で示される場合もあるし (e.g., Gough & Heibrun, 1980; Sarbin & Rosenberg, 1955)、行動や性格特性の記述のような文章で示される場合もある (e.g., Fittes, 1964)。また、被験者の反応の仕方にもバリエーションがある。1つは、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までが数段階の尺度で示されていて、被験者はその間のいずれかを選択するというものである (e.g., Fittes, 1964)。もう1つは、チェック・リストと呼ばれるもので、項目があてはまる場合のみ項目にチェックを付けるというものである (e.g., Gough & Heibrun, 1980; Sarbin & Rosenberg, 1955)。そのほかに、SD (semantic differential) 法を用いたものもある。これは、項目を反対の意味を持つ形容語の対で示して、被験者は2つの形容語のどちらが自分にあてはまるかを何段階かで評定するというものであ

る(e.g., 長島他, 1966)。Q分類技法は, Stephenson (1953) や Butler と Haigh (1954) によって使用されている。これは, 被験者が行動や性格特性についての記述の書かれた100枚のカードを, それらが自分にどのくらいあてはまるかに従って, 9つの群(パイル)に分類するというものである。この時各パイルに分類されるカードの数は予め決められていて, 分類されたカードが正規分布するようになっている。

この2種類の技法は, 研究者が項目を予め用意するという共通点を持っている。しかし, 項目を予め決めて被験者に呈示することにはいくつかの問題がある。その1つは, 被験者の self-image や自己概念を測定するのに, どのくらいの数の項目が必要なのかということである。項目数は数十から数百に及ぶものまでであるが, 個人の持つ膨大な self-image の数に比較すれば, いずれにしても十分な数とは言えないであろう。かと言って数千項目にも及ぶテストを施行することは, 被験者の負担を考えれば不可能と言わざるを得ない。従って, 被験者に呈示される項目が, 何らかの基準で選択されることになる。そして, この項目の選択に第2の問題がある。予備的に収集されたデータに基づいて帰納的に項目の選択を行なっている研究者もいるが, 研究者の関心や研究者の考える重要性に従って恣意的に項目選択が為されていることも少なくない。恣意的に選択された項目を用いた研究の最大の問題は, どんな項目を用いても何らかの結果が得られ, その結果の妥当性を確かめることが難しいことにある。何らかの外的な基準を用いて妥当性を検討する試みは為されているが, その時使われる外的な基準とは, 精神的な疾患があるか否かとか, 他のパーソナリティ・テストの結果であり, 自己概念や self-image としての妥当性を調べるためのものとは言えない。以上2つの問題点とも関連するが, 第3の問題は, これらの技法において被験者は与えられた項目に対し受身的に反応しているだけで, その個人にとって重要な self-image, すなわち自己概念に近い self-image を得られる保証が全くないということである。例えば, 「自律性のある人間である」という自己概念をもっている個人は, テストに自律

性に関する項目が含まれていればそれに反応することができるが, もしなければ, その個人にとってそれがいかに重要な自己概念であっても, テストには反映されない。またその反対に, 自分の自律性についてまるで考えたこともない個人は, 自律性に関する項目に一時的で信頼性のない反応しかできないであろう。つまり, そのような個人の自己概念や self-image において, 自律性はほとんど意味を持っておらず, 自律性に関する項目のあること自体が問題なのである。

このように考えると, 研究者が予め用意した項目を用いる限りは, 被験者にとって意味のある自己概念や self-image が得られる保証はないことになる。むしろ, 被験者が自発的に反応内容を選択する場合にのみ, 適切な自己概念や self-image の測定が行なえると言えるであろう。前章で若干触れた McGuire と Padawer-Singer (1976) も, 個人が実験者によって示された次元のどこに自分を位置づけるかということよりも, その個人が自分を記述するのにどんな次元を選ぶかということに, 自己概念についての興味深い情報があると述べている。彼らは, このような視点から, 自発的な反応を得るために, 自由回答法を用いた自己概念の測定を行なっている。自由回答法では, 研究者が項目を用意するのではなく, 被験者が自発的に自分の言葉で自己記述を行なう。そのため, 研究者の視点によって被験者の反応が左右されることはなく, 被験者の自己概念・self-image において全く意味を持たないような反応が出ることもない。このような点を考慮すると, 自己概念・self-image の測定には, 評定法, チェック・リスト法, Q分類技法よりも自由回答法の方が望ましいと言えるであろう。

自由回答法による自己概念・self-image の測定技法で一般的に用いられているものとしては, W-A-Y 技法 (Bugental & Zelen, 1950), WAI 技法 (Kuhn & McPartland, 1954), “Tell Us about Yourself” テスト (McGuire & Padawer-Singer, 1976) が挙げられる。これらの技法は, かなり類似したものであるが, 教示, 回答数, 反応方法に違いがある。W-A-Y 技法は, 被験者が「あなたは誰ですか? (Who are you?)」という質問に対

する3つの回答を書くものである。これは、1950年に考案されたもので、他の2つの技法の先駆けとなったものである。その4年後に考案されたのがWAI技法である。これは、20答法 (TST: Twenty Statements Test) と呼ばれており、被験者が「私は誰でしょう? (Who am I?)」という問いに自問自答して20通りの回答を書くというものである。最後の“Tell Us about Yourself”テストは、「あなたのことについて私たちに教えて下さい。(Tell us about yourself.)」という教示に対し、被験者が7分間紙に反応を書くか、あるいは、5分間話しをするというものである。これらの技法のうちどれが最も優れているのかは、使用する状況によっても異なるため一概には言えないが、W-A-Y技法は、反応を3答しか得られないという難点があり、また、WAI技法の教示によって多様な反応が得られることを示唆する報告もある(菊地, 1970)。“Tell Us about Yourself”テストは、最も被験者に対する制限が少なく、被験者の自発的な反応を得るのには適している。その一方で、この技法の場合、内容が自伝的になり、反応が冗長になりがちである。また、被験者の反応の単位が明確でないため、データの収集後に反応を適当な単位に分割する必要がある。さらに、時間制限を行なっているため、施行可能な状況も限られるという問題もある。以上のような点を考慮すると、大量のデータを収集することを目的とした場合、WAI技法が最も適していると言えるであろう。実際に、WAI技法は、最も広く用いられており、多様な研究デザインによる研究が為されている。例えば、WAI技法を自己概念の発達的变化の分析に用いているものや(e.g., 横田・岩熊, 1988b; Montemayor & Eisen, 1977)、自己概念の心理的負荷(psychological loading)、つまり、被験者にとっての自己概念・self-imageの明瞭さ、重要性、好悪などを調べたものもある(e.g., 西村・星野, 1964; 高垣, 1974)。そのほかには、self-image間の関連性を分析したものもある(岩熊・横田, 1989)。もちろん、WAI技法が、自己概念・self-imageを調べる上で、常に最善の技法であるというわけではない。使用の目的や状況によっては、他の技法の方が適している場合も

ある。また、WAI技法についても、今後も教示や施行方法等の検討・改善が進められて行くべきであろう。

実証的な分析においては、なるべく多くのデータを分析することが、より妥当性のある結果を得ることにつながる。大量のデータを分析する場合には、多くの場合、データを数量的な方法で処理することになる。前述の評定法、チェック・リスト法、Q分類技法の場合、得られたデータを直接、数量的に処理することができるが、WAI技法で得られるデータは、被験者自身の言葉による言語反応であるため、数量的な処理を直接施すことはできない。WAI反応を数量的に処理するためには、反応を何らかの категорияに分類する必要がある。ところが、この反応categoryの違いによって分析結果が大きく異なってしまうので、反応categoryがWAI反応の分析の急所となる。これまでに、WAI反応の評価categoryがいくつか考案されているが、特によく用いられているのがGordon (1968)のcategoryとMcLaughlin (1966)のcategoryである(表3-1参照)。この2つのcategoryに限ったことではないが、従来の評価categoryにはいくつかの問題がある。その第1は、category数の問題である。例えば、GordonとMcLaughlinのcategoryは、両者ともにcategory数が30である。他のcategoryを見ても、100以上のcategoryを持つものは少ない。しかし、被験者の自発的な言語反応は非常に多様であり、それを少数のcategoryに分類してしまえば、データの多様性を損なうことになってしまう。

それ以上に重大な問題は、これらのcategoryのほとんどが研究者によってア・プリオリに設定されていることである。例えばGordonは、社会的同一性という視点からcategoryを設定しており、McLaughlinは、C.R. Rogersの理論を参考にしてcategoryを設定している。categoryをア・プリオリに設定した場合、評定法やチェック・リスト法と同じような問題が起こってくる。つまり、研究者の視点によって分析結果が歪められて、被験者の反応が結果に十分反映されなくなってしまうのである。自由回答法のメリットは、

表 3-1 Gordon (1968) と McLaughlin (1966) の WAI 反応の評価カテゴリー

Gordon(1968)のカテゴリー	McLaughlin(1966)のカテゴリー
A. Ascribed Characteristic 1. Sex 2. Age 3. Name 4. Racial or National Heritage 5. Religious Categorization	a. Roles 1. Male-Role 2. Student-Role 3. Intellectual-Role 4. Family-Role 5. Interpersonal-Role 6. Social-Group-Role
B. Roles and Memberships 6. Kinship Roles 7. Occupational Role 8. Student Role 9. Political Affiliation 10. Social Status 11. Territoriality, Citizenship 12. Membership in Actual Interacting Group	b. Value and Interests 7. Religious-Reference 8. Political-Reference 9. Economic-And-Status-Reference 10. Aesthetic-Reference 11. Physical-Reference 12. Recreation-And-Sports-Reference
C. Abstract Identifications 13. Existential, Individuating 14. Membership in an Abstract Category 15. Ideological and Belief References	c. Temporal and Spatial Orientations 13. Past-Orientation 14. Future-Orientation 15. Place-Orientation
D. Interests and Activities 16. Judgements, Tastes, Likes 17. Intellectual Concerns 18. Artistic Activities 19. Other Activities	d. Cognitive and Behavior Orientations 16. Acceptance-Orientation 17. Rejection-Orientation 18. Action-Orientation 19. Cognitive-Orientation 20. Achievement-Orientation
E. Material References 20. Possessions, Resources 21. Physical Self, Body Image	e. Self-Evaluations 21. Positive-Self-Evaluation 22. Negative-Self-Evaluation 23. Neutral-Self-Evaluation
F. Major Senses of Self 22. Sense of Competence 23. Sense of Self-Determination 24. Sense of Unity 25. Sense of Moral Worth	f. Psychological States 24. Sign-Content 25. Sign-Discontent 26. Sign-Need
G. Personal Characteristics 26. Interpersonal Style 27. Psychic Style	g. Expressive Modes 27. Overstate 28. Understate 29. Negateve
H. External References 28. Judgements Imputed to Others 29. Situational References 30. Uncodable Responses	h. Consensual Human Identity 30. Consensual

研究者の視点に左右されない被験者の反応が得られることであり、ア・プリオリに設定されたカテゴリーを用いることは、この長所を殺してしまうことになる。これらの問題を回避するためには、WAI 反応の内容分析の結果に基づいて、帰納的に反応の評価カテゴリーを作成する必要がある。このような手続きでカテゴリーを作成すれば、反応そのものの分類結果が評価カテゴリーとなり、研究者の視点にほとんど左右されない分析結果を

得ることができる。本研究においても、このような視点に立ち、WAI 反応の内容分析を行ない、その結果に基づいて WAI 反応の評価カテゴリーの作成を行なった。

本章では、自我・自己の概念の整理と実証的な研究のための技法の検討を行ってきた。次章では、WAI 技法を用いて self-image の収集を行なった過程と、WAI 反応の評価カテゴリー作成の手続きについて述べる。

4

WAI 技法による self-image の収集と 評価カテゴリーの作成

1. WAI 技法の施行……………33
2. 反応の評価カテゴリー……………34

前章で述べたように、WAI 技法は、self-image 及び自我の心理学的研究において有効性の高いものと言えるであろう。本章では、実際に WAI 技法を用いてデータの収集・分析を行なった過程と、WAI 技法で得られた反応を分類するための評価カテゴリー作成の手続きについて述べる。

1. WAI 技法の施行

WAI 用紙の作成

実際に WAI 技法を施行するのにあたっては、被験者の反応を得るための用紙が必要となる。そこで、中学生以上の被験者を対象とした一般用 WAI 用紙と、小学生を対象とした小学生用 WAI 用紙を作成した。一般用 WAI 用紙には、B4 版の紙が用いられ、左半分にはフェイス・シートと被験者への教示が印刷され、右半分に被験者が反応を記入するスペースが設けられている。左半分のフェイス・シートには、氏名、性別、調査日時、生年月日、年齢、現住所、未婚・既婚、職業、学歴を記入する欄があり、その下には、以下のような被験者への教示が印刷されている。

「私は誰でしょう？」(Who Am I?) という問いに対し、あなたのことについて、20通りの異なる答えを右のページの1番から順に書いていってください。思いつくままに、自由に書いていってください。書き終わったら、1から20までの答えを見て、特に自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください。○はいくつつけてもかまいません。もし、どうしても最後(20番)まで答えを思いつかない場合は、思いつくところまでで結構ですので、そこまでの内容で、自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください。

用紙の右半分の反応を記入する欄は、20本の野線が引かれ、各行の先頭に1から20の番号が付けられただけのものである。被験者は、これらの各行に1答ずつ反応を記入していき、最終的に20の回答を記入することになる。

小学生用 WAI 用紙は、一般用と同じ大きさの紙を用い、形式もフェイス・シートと教示を除いて同じになっている。小学生用のフェイス・シートの項目は、氏名、性別、調査日時、生年月日、年齢、現住所、親の職業、学校名、学年である。

教示は、以下のように、一般用よりも平易なものになっている。

「私はだれでしょう？」という問いを自分に試してみてください。そして、その問いに対する、20通りのそれぞれちがう答えを、右のページの1番から順番に書いていってください。思いつくままに、自由に書いていってください。もし、20番まで答えを思いつかないときは、思いつくところまででかまいません。答えを書きおえたら、あなたがかいた答えを見て、特に自分らしいと思う答えの番号を○でかこんでください。○は、いくつつけてもかまいません。

施行

施行に際しては、このような一般用および小学生用 WAI 用紙を使用した。小学生の被験者（3年生以上）に対しては小学生用を用い、それ以上の被験者に対しては一般用を用いた。データの収集は、大部分の学生の場合、主に教室において集団施行で行なわれた。この場合、用紙を配布し、被験者全員に対し口頭で教示を行ない、その後、被験者からの質問を受けつけた。反応に要する時間には個人差があるため、各自が自分のペースで反応するよう教示し、特に時間制限は設けなかった。20分から40分程度の時間をとって施行したが、時間内に書き終えなかった被験者については、自宅で記入して後日提出するよう求めた。集団施行でない場合は、個人的に被験者に依頼して WAI への反応を求めた。その場合、用紙を手渡して口頭で教示を行ない、自宅で記入して提出するよう求めた。

被験者

1980年前後から組織的にデータの収集を始め、1988年までに7,520名の WAI 反応を収集した。被験者の年齢は9才（小学校3年）から90才以上にまで及んでいる。性・年齢別のサンプル数を表4-1に示す。これを見てもわかるように、年齢、性によってサンプル数に偏りがある。1セルのデータ数は、大学生以下で数百から1,000以上あるのに対し、23才以上になると少なくなり、50才以

表4-1 年齢・性別のサンプル数

年齢	男性	女性	計
小学生	707	478	1,185
中学生	937	211	1,148
高校生	1,606	1,057	2,663
大学生	382	863	1,245
23~29才	280	123	403
30~39才	179	124	303
40~49才	154	155	309
50~59才	65	91	156
60才以上	40	68	108
計	4,350	3,170	7,520

上では1セルに100以下となっている。社会人のデータの収集は今後の課題と言えるであろう。なお、社会人の被験者の職業は、会社員と主婦が多い。

2. 反応の評価カテゴリー

WAI 技法は、被験者の持つ self-image を、被験者自身の言葉による自由記述の形で得るものである。そのため、研究者の視点に制約されない自由で自発的な反応を得ることができる。ところが、このような自由記述のデータは、そのままの形では数量的な分析を行なうことができない。大量のデータを数量的に分析するためには、反応を何らかの基準で分類する必要がある。しかし、この分類の基準が、研究者の視点からア・プリオリに設定されたものであれば、分析結果は反応の自発性を十分に反映しなくなってしまう。そこで、本研究では、WAI 技法で得られた反応の内容分析の結果に基づいて、帰納的に反応の評価カテゴリーを作成することにした。

1983年度版基準書の作成

われわれは、帰納的な手続きで、「基準書」と呼ばれる WAI 反応の評価カテゴリーを作成する試みを続けているが、基準書の最初の版は、1983年に作成されている。この1983年度版基準書の作成には、内容分析の手法として KJ 法（川喜田、1967）が用いられた。KJ 法とは、分析対象となるものをそれぞれカードに書き写し、分析者が類

似たカードをまとめてクラスターを作っていくというものである。作られたクラスターには、クラスター内のカード全体の内容を包括するようになラベルを付け、さらに類似したクラスターをまとめていく。いずれのクラスターにも入らないカードは、その1枚のカードを1つのクラスターとみなして作業を続けていく。この時、何らかの理論、仮説、予見などが極力入らないように心がけ、カードあるいはクラスター間の類似性だけを見て自然にクラスターをまとめあげていく。そしてこのような作業の結果、分析対象の全体的な構造が得られることになる。1983年度版基準書は、この KJ 法による内容分析を通じて作成された。具体的には、以下のような手続きをとった。

- ① 1983年度までに収集された1,123人分のデータから、年齢、性別に偏りのないように300人分のデータを抽出した。
- ② 各データの20の反応をそれぞれカードに書き写した。但し、反応が重文の場合は分割して2枚のカードに書き、各々のカードが単文になるようにした。
- ③ 300人分のカード(約6,000枚)を100人分ずつ3つのグループに分け、KJ法による内容分析を行なった。
- ④ 3つのグループの分析結果を比較検討し、3者にほとんど差がないことを確認した。
- ⑤ 内容分析の結果を整理し、WAI反応の評価カテゴリーとして使用できるものにした。

以上のような手続きで作成された基準書は、全部で1,786のカテゴリーを持ち、これらの各カテゴリーは、「小項目」と呼ばれている。小項目は、334の「中項目」にまとめられ、さらに、中項目は10の「大項目」にまとめられている。中項目や大項目を含めた項目の配置においては、評価カテゴリーとして使う時の見やすさや使いやすさを主に考慮した。1983年度版の概要については、表4-2に示しておく。

基準書の改訂

1983年度版基準書を用いて、すべてのデータの

表 4-2 1982年度版基準書の概要

	大項目名	内 容	中項目数	小項目数
1	帰属特性	性別、年齢、国籍、人種、名前、宗教などについての記述。	5	24
2	所属・役割	出身地、住所、未婚・既婚、職業、所属、役割、資格などについての記述。	12	69
3	対人関係	異性、友人、家族との関係についての記述、態度、感情。 対人関係一般についての記述。	55	260
4	身 体	体格、容姿、健康状態、体質などについての記述。	4	34
5	性 格	自分の性格についての記述。	95	555
6	願望・主義・信条 生活態度	願望や欲求、生活信条、政治的な態度などについての記述。	32	181
7	趣味・嗜好・関心	趣味や事物についての好き嫌い、興味関心などに関する記述。	32	252
8	生活の記述	日常生活についての記述。 所有物についての記述。 過去や未来についての記述。	22	132
9	自己への評価・感情・能力、他者からの評価	自己評価や自己の能力に関する記述。 他者からの評価についての記述。	67	229
10	そ の 他	評価できないもの、無効回答など。	10	50
計			334	1,786

分類評価と集計を行ない、反応傾向の分析を行なった。その結果、カテゴリーの中には反応頻度の非常に少ないものや区別しにくいものがあり、また、カテゴリー数が多すぎて、実際の分析において分類評価が難しいこともわかった。そこで、反応頻度の少ないものや区別しにくいものを併合し、項目の配置にも手を加えた。このような改訂によって、1984年度版が作られた。この基準書を

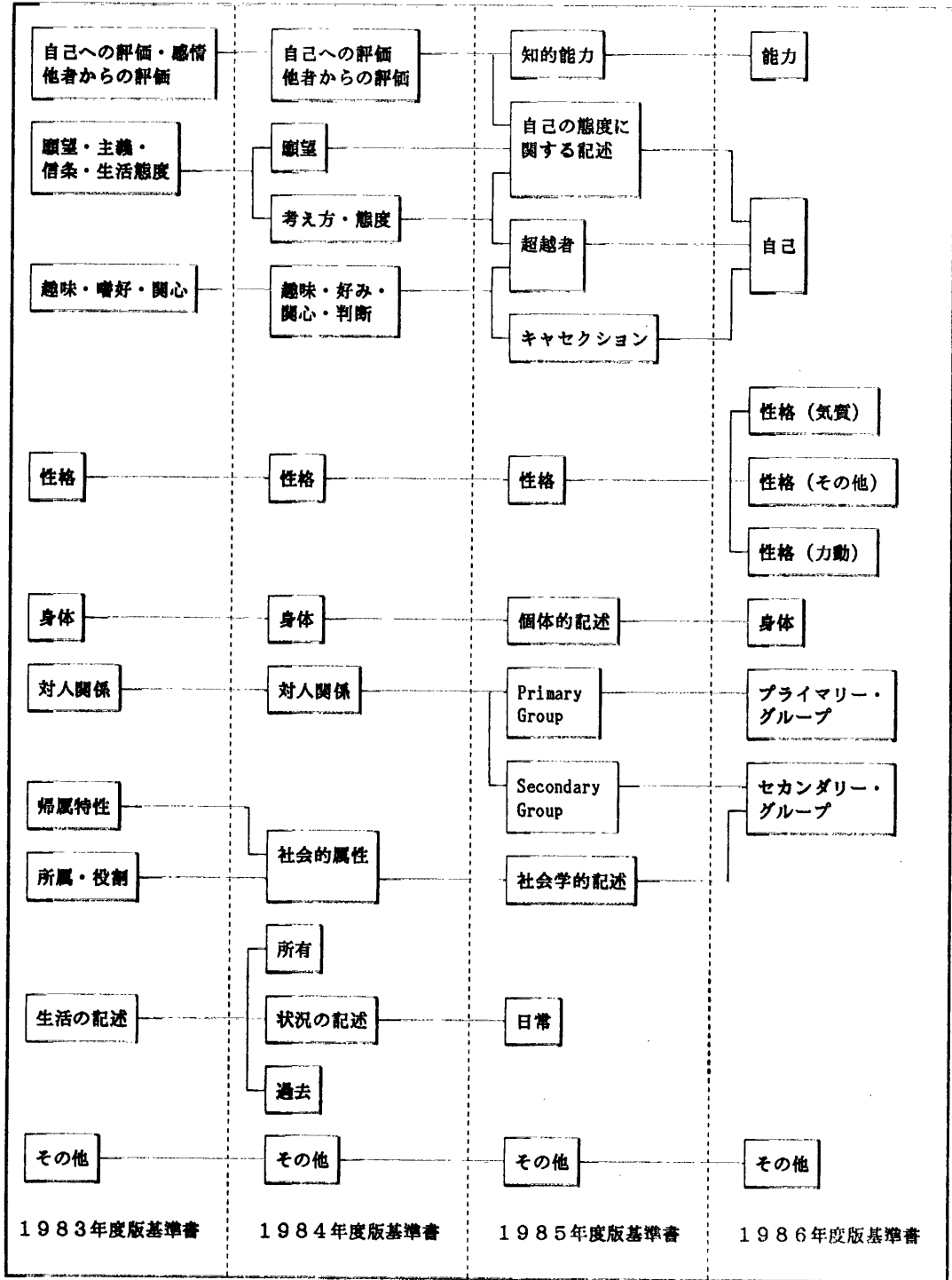


図 4-1 基準書の大項目の変遷

表 4-3 パーソナリティの概要(横田・佐野(1965)より作成)

パーソナリティ	能力的	知能, 精神的分化, 見通し, 評価の客観性等。	
	情意的	気質, 性格等情意的側面のうち, 比較的固定的なもの, すなわち, 性格類型(特性)等。	
	指向的	目標, キャセクション, 生活態度, 価値観, 人生観等。	
	力動的	安定—不安定, コンプレックス等。	
決定要因	個体的	容姿, 体力, 健康等。	
	環境的	家庭的	家族, 生育歴とその環境, 生活水準等。
		社会的	社会生活, 交友関係等。

用いて, 新たに収集されたものも含めたすべてのデータを分類評価し, 反応傾向の分析を行なった。データを収集する一方で, このような「基準書の改訂→反応の分類評価→集計→反応傾向の分析→基準書の改訂」という過程を数年間にわたって繰り返して, 基準書の精緻化を進めてきた。そして, 1986年までに, 現在の基準書とほぼ同じものが完成された。1983年度から1986年度に至る大項目の変遷を図 4-1 に示しておく。

詳しい改訂の内容については他に譲るが(横田・岩熊, 1988 a; 横田・岩熊, 1988 b), 2つの改訂点についてだけ触れておく。1つは, 1985年に行なわれた中項目の廃止である。カテゴリーは多いほど細かい反応傾向を捉えることができる。その一方で, 全体のカテゴリー数が千以上もあると分類評価の作業は難しく, 評価にも多くの時間と労力を要することになる。1984年までの分析でおおよその反応傾向はわかったため, 1985年の改訂では, カテゴリー数を減らして, 基準書による評価が容易にできるようにした。具体的には, それまでの中項目を最小単位のカテゴリーとし, 以後それを小項目と呼ぶことにした。なお, それまでの小項目は, 独立したカテゴリーとしては扱わないが, 例示として基準書に記載することにした。

もう1つの改訂は1986年に行なわれたもので, そこでは, 横田・佐野(1965)のパーソナリティの概要のスキーム(表 4-3 参照)を考慮して, 項

表 4-4 1988年度版基準書の概要

	大項目名	内 容	小項目数
1	能 力	知的能力, 専門的能力, 对人的能力などについての記述。	8
2	性格(気 質)	自分の性格についての記述のうち, 精神医学的性格類型の気質(S, Z, E)といわれるものにほぼ相当するもの。	70
3	性格(その他)	性格(気質), 性格(力動)以外の自分の性格についての記述。	47
4	自 己	自己に対する感情・評価などについての記述。 欲求, 願望, 希望などについての記述。 態度, キャセクションなどについての記述。 「私は私」, 「私は誰」, 実存的な記述。 上位概念, 比喩的な表現など。	90
5	性格(力 動)	自分の性格についての記述のうち, 力動的側面を表すもの。	43
6	身 体	容姿・体格, 健康・体質, 身体機能・身体的能力についての記述。	3
7	プライマリーグループ	血縁的役割, 家族, 家庭についての記述。	12
8	セカンダリーグループ	名前, 性別, 年齢, 現住所, 出身地, 生年月日, 職業, 所属団体, 学歴などについての記述。 友人関係, 対人関係についての記述。	28
9	そ の 他	評価できないもの, WAIに対する批判, 無効回答など。	2
計			303

目の配置を行なった。このスキームは, パーソナリティ診断の基本的な枠組みとなるもので, 広く人間を捉える上で有効なものとしてされている。とこ

ろが、1985年度版基準書の大項目を見ると、このパーソナリティ・スキームとの対応関係が認められる。具体的には、基準書の「知的能力」とスキームの「能力的」側面とが対応しており、「個体的記述」と「個体的」決定要因、「Primary Group」と「家庭的」決定要因、「Secondary Group」・「社会学的記述」と「社会的」決定要因とが対応している。さらに、「性格」は、スキームの「情意的」側面と「力動的」側面に対応しており、「自己の態度に関する記述」、「超越者」、「キャセクション」は、スキームの「指向的」側面に対応している。これは、WAI 反応がパーソナリティのあらゆる側面、決定要因に及ぶことを示している。また、WAI 反応を帰納的にまとめあげた結果である大項目とパーソナリティ・スキームが対応したということは、基準書とパーソナリティ・スキームの妥当性を示していると言えるであろう。このようなことから、1986年度版はこのスキームに従って大項目の設定を行ない、そこに各小項目を配置することにした。ただし、配置された小項目は、若干の変更はあるものの、基本的には1985年度版のものと同じである。1986年度以降1988年度に至るまでの改訂は、数項目の小項目に変更が加えられた程度で、1988年度版基準書は、基本的には1986年度版と変わっていない。

1988年度版基準書は、以上のように、WAI 反応の内容分析の結果に基づいて作成された1983年度版基準書を、数回にわたり改訂した結果得られたものである。この基準書では、303の小項目が9つの大項目にまとめられている。1988年度版基準書は巻末の資料に掲載してあるが、その概要を

表4-4に示しておく。

基準書による反応の分類評価

WAI 技法で得られた反応は、反応の評価カテゴリーである基準書で分類評価されてから、集計・分析される。この分類評価においては、WAIの各反応の内容を見て、等価あるいは最も内容的に近い小項目のコードを割り当てていく。分類評価は、原則として反応単位で行なわれる、つまり、被験者の20の回答をそれぞれ独立に評価するのである。ただし、1つの反応だけからでは評価ができない場合、その被験者の前後の反応を参考にして評価を行なった。また、1つの反応の中に、複数の内容が含まれている場合は、それぞれの内容を1反応として評価を行なった。そのため1人の被験者の反応が20を越えたケースもあった。

今回の分析では、大学生14人が評価者として、WAI 反応の分類評価にあたった。評価者は、分類評価に先立ち約3ヶ月間のトレーニングを行なった。トレーニングでは、同一の反応を全員がそれぞれ評価し、その結果について全員で討議を行なう。このような討議を通じて、評価者全員が同一の基準で反応を分類評価できるようにした。実際の分類評価は、評価者が分担して行なったが、評価者が1人では判断できないものについては、全員で討議して判断するようにした。

以上のように本章では、WAI 技法を用いてデータを収集した手続きと、WAI 反応の評価カテゴリー作成の手続きについて述べた。次章では、このようにして得られた反応の分析結果について述べる。

5

WAI 反応の分析結果

1. 大項目別に見た反応傾向……………39
2. 小項目別に見た反応傾向……………44

前章で述べたような手続きに従って、1988年までに7,520名のWAI反応を収集した。本章ではこれらのデータを1988年度版基準書を用いて分析した結果について述べる。また、巻末の資料編には、被験者のWAI反応をそのまま事例として掲載してある。これを見れば、WAI技法によって得られる反応がどのようなものであるかを理解し易いのではないかと思う。

1. 大項目別に見た反応傾向

WAI 反応を基準書を用いて集計・分析していく方法は大きく分けて2つある。それは大項目を単位として集計していく方法と、小項目を単位として集計していく方法である。両者はそれぞれに長所と短所を持ち合わせているが、ここではまず、大きな反応傾向をつかむのに適した大項目を単位とした分析を行なう。表5-1は、各大項目の平均反応数を年齢・性別に分けて示したものである。そして、この表の一番右の欄には、被験者1人当りの総反応数が示されている。総反応数の平均は、男性が18.26、女性が19.26であった。各被験者は、原則として20の回答をすることになって

いるが、回答を20答書かない被験者がいたり、1つの回答に複数の内容が含まれているために反応数が20を越える被験者がいたりする。そのため、総反応数の平均は20にはなっていない。年齢や性別で見ると、傾向として20代以降の被験者の反応数が多い。特に50代は、男女共に、最も平均値が高くなっている。それに対し小学生は、最も反応数が少なく、17反応以下になっている。性差が最も顕著なのは高校生で、女性の反応数は男性を約2反応上回っている。その一方で、各大項目間には平均反応数に大きなばらつきが認められる。「自己」の反応数が、1人当たり8反応近くあるのに対し、「能力」、「性格（その他）」、「プライマリー・グループ」では1反応に満たない。また、各大項目の平均反応数には、年齢差や性差が認められるものもある。そこで、各大項目ごとに反応傾向を分析していくことにする。

「能力」には、知的能力(e.g., 頭がいい・悪い)、専門的能力(e.g., ピアノが得意・不得意)、対人的能力(e.g., 指導力がある・ない)、一般的能力(e.g., センスがある・ない)といった反応が分類される。反応数を見ると非常に少なく、0.5にも満たない。つまり、おおまかに言って、この大項目の反応を

表 5-1 各大項目の平均反応数と標準偏差

年齢	性別	能力	性格 (気質)	性格 (その他)	自己	性格 (力動)	身体	プライマリー グループ	セカンダリー グループ	その他	計
小学生	男性 N= 707	0.52 (0.90)	0.61 (1.12)	0.36 (0.74)	7.94 (4.24)	0.30 (0.81)	2.04 (2.02)	0.65 (1.10)	4.07 (3.14)	0.07 (0.35)	18.56 (4.88)
	女性 N= 478	0.37 (0.74)	0.84 (1.15)	0.33 (0.70)	7.85 (4.43)	0.36 (0.73)	1.71 (1.69)	0.89 (1.24)	4.18 (2.97)	0.02 (0.14)	18.55 (4.90)
中学生	男性 N= 937	0.47 (0.84)	1.31 (1.69)	0.73 (1.12)	8.51 (4.18)	0.65 (1.25)	1.95 (2.03)	0.55 (1.01)	3.89 (3.43)	0.31 (1.14)	18.37 (3.58)
	女性 N= 211	0.39 (0.68)	1.50 (1.86)	0.59 (0.84)	9.02 (4.39)	0.91 (1.42)	1.56 (1.87)	0.65 (1.01)	3.46 (2.89)	0.27 (1.38)	18.34 (4.03)
高校生	男性 N=1,806	0.39 (0.72)	1.27 (1.83)	0.74 (1.10)	7.42 (4.34)	0.90 (1.53)	1.19 (1.87)	0.61 (1.21)	4.20 (3.14)	0.54 (1.74)	17.26 (4.39)
	女性 N=1,057	0.25 (0.55)	1.85 (2.05)	0.77 (1.11)	8.49 (4.03)	1.50 (1.93)	1.44 (1.72)	0.89 (1.34)	3.76 (2.85)	0.22 (0.81)	19.18 (3.19)
大学生	男性 N= 382	0.38 (0.68)	2.60 (2.55)	1.05 (1.32)	7.98 (4.12)	1.74 (2.10)	0.94 (1.24)	0.49 (0.92)	3.97 (3.19)	0.23 (0.91)	19.36 (3.82)
	女性 N= 863	0.23 (0.54)	3.28 (2.75)	1.07 (1.16)	6.96 (3.75)	2.30 (2.23)	1.13 (1.44)	0.93 (1.14)	4.13 (3.00)	0.05 (0.28)	20.07 (3.09)
23才 29才	男性 N= 280	0.38 (0.66)	3.20 (2.70)	1.20 (1.31)	7.49 (3.74)	1.60 (1.81)	1.39 (1.51)	0.97 (1.24)	4.41 (3.38)	0.02 (0.15)	20.66 (2.68)
	女性 N= 123	0.29 (0.61)	3.17 (2.89)	1.01 (1.26)	7.57 (3.74)	1.93 (1.97)	1.07 (1.61)	1.28 (1.55)	4.46 (3.19)	0.03 (0.18)	20.83 (2.49)
30才 39才	男性 N= 179	0.42 (0.72)	3.62 (2.76)	1.17 (1.10)	7.36 (3.29)	1.71 (2.00)	1.32 (1.36)	2.35 (2.19)	4.10 (3.28)	0.07 (0.27)	22.12 (3.36)
	女性 N= 124	0.51 (0.87)	3.04 (2.67)	1.11 (1.24)	7.66 (3.97)	1.25 (1.59)	1.23 (1.52)	2.62 (2.38)	3.17 (2.93)	0.04 (0.27)	20.63 (2.90)
40才 49才	男性 N= 154	0.45 (0.83)	3.59 (2.90)	1.31 (1.35)	6.65 (3.44)	1.10 (1.45)	1.43 (1.34)	2.36 (1.88)	4.24 (3.36)	0.01 (0.11)	21.14 (2.92)
	女性 N= 155	0.48 (0.82)	3.32 (2.74)	0.99 (1.17)	7.86 (4.23)	1.25 (1.94)	1.13 (1.55)	2.99 (2.76)	3.12 (2.86)	0.01 (0.16)	21.14 (2.94)
50才 59才	男性 N= 65	0.60 (0.92)	2.94 (2.90)	0.78 (0.98)	7.95 (4.20)	1.12 (1.40)	1.66 (2.09)	2.54 (2.37)	5.77 (4.45)	0.09 (0.34)	23.46 (6.02)
	女性 N= 91	0.31 (0.57)	2.86 (2.49)	0.88 (1.06)	8.84 (3.98)	1.00 (1.34)	1.35 (1.57)	3.56 (3.20)	3.55 (2.71)	0.01 (0.11)	22.35 (5.24)
60才 以上	男性 N= 40	0.35 (0.80)	2.08 (2.35)	0.75 (1.43)	9.95 (4.83)	0.70 (1.14)	1.05 (1.34)	2.65 (2.78)	4.30 (4.20)	0.03 (0.16)	21.85 (3.61)
	女性 N= 68	0.10 (0.31)	1.59 (2.49)	0.35 (0.77)	8.69 (4.72)	0.50 (0.97)	0.68 (1.09)	3.19 (2.81)	3.15 (2.84)	0.00 (0.00)	18.25 (6.67)
全体	男性 N=4,350	0.43 (0.78)	1.62 (1.97)	0.77 (1.10)	7.80 (4.17)	0.91 (1.48)	1.50 (1.75)	0.80 (1.27)	4.13 (3.27)	0.30 (1.22)	18.26 (4.43)
	女性 N=3,170	0.29 (0.62)	2.26 (2.27)	0.80 (1.06)	7.93 (4.05)	1.47 (1.82)	1.35 (1.60)	1.20 (1.55)	3.86 (2.92)	0.11 (0.61)	19.26 (3.92)

※各セルの上段の数値は平均反応数を示し、下段の括弧内の数値は標準偏差を示す。

表 5-2 各大項目の言及率

年齢	性別	能力	性格 (気質)	性格 (その他)	自己	性格 (力動)	身体	プライマリ グループ	セカンダリ グループ	その他
小学生	男性 N= 707	35.2	34.0	24.8	98.4	17.7	73.8	37.9	91.0	4.8
	女性 N= 478	27.2	48.1	24.3	98.3	24.1	71.8	48.5	91.6	1.5
中学生	男性 N= 937	31.2	56.6	41.9	99.0	32.6	71.6	33.3	85.5	15.4
	女性 N= 211	29.9	59.2	40.3	99.5	44.6	64.5	41.2	85.3	9.0
高校生	男性 N=1,806	28.7	51.5	42.1	97.9	39.9	51.9	34.9	88.0	20.9
	女性 N=1,057	20.7	68.5	45.0	99.6	57.4	60.5	47.7	89.9	12.0
大学生	男性 N= 382	27.8	76.7	54.7	98.7	62.3	51.6	30.6	86.4	13.1
	女性 N= 863	18.3	84.6	59.9	97.7	75.9	55.2	55.6	87.8	3.8
23才 29才	男性 N= 280	30.0	84.6	65.4	98.6	64.3	63.6	52.1	88.6	2.1
	女性 N= 123	23.6	82.1	54.5	98.4	68.3	47.2	61.0	88.6	3.3
30才 39才	男性 N= 179	31.3	87.2	68.2	98.9	60.9	64.3	79.3	87.2	6.2
	女性 N= 124	35.5	85.5	58.9	99.2	55.7	54.0	78.2	83.1	2.4
40才 49才	男性 N= 154	29.9	85.7	63.0	98.7	55.2	67.5	80.5	88.3	1.3
	女性 N= 155	31.6	83.2	54.2	99.4	49.0	52.9	80.0	83.9	0.7
50才 59才	男性 N= 65	38.5	76.9	47.7	96.9	52.3	64.6	83.1	92.3	7.7
	女性 N= 91	26.4	81.3	55.0	98.9	50.6	64.8	86.8	92.3	1.1
60才 以上	男性 N= 40	22.5	62.5	30.0	100.0	37.5	60.0	65.0	85.0	2.5
	女性 N= 68	10.3	51.5	22.1	95.6	27.9	41.2	73.5	82.4	0.0
全体	男性 N=4,350	30.5	57.2	43.6	98.4	39.8	61.8	40.2	87.9	13.5
	女性 N=3,170	22.8	71.1	46.8	98.7	55.7	59.6	54.5	88.6	6.2

※各大項目の言及率は、該当集団内でその大項目の反応を1反応以上した被験者のパーセンテージを示す。

する被験者は、2人に1人以下であることを示しているが、2反応以上している被験者もいるので、この大項目の反応を1反応以上している被験者の割合は、50%をかなり下回ると思われる。そこで、実際にこの大項目の反応を1反応以上している被験者の割合（言及率）を算出してみた。表5-2は、各大項目の言及率を年齢・性別に示したものである。「能力」の言及率は、男性が30.5%、女性が22.8%であり、男性の方が反応する割合が高くなっている。年齢差については、男女共に60才以上で最も言及率が低くなっている。このように能力的側面についての言及が全般的に少ないの

は、日本の文化・社会習慣によるところが大きいように思われる。例えば、アメリカのような個人の能力を重視する文化・社会では、自分の能力は、個人にとって大きな意味を持つことになるのではないかと。

「性格（気質）」は、自分の性格を記述した反応のうち、気質的なものにほぼ相当する反応が分類される大項目である。性格についての項目としては、ほかに「性格（その他）」と「性格（力動）」がある。後者は、性格を記述した反応のうち、ヒステリー性格や神経質などの力動的な側面についての記述が分類され、前者は、上記の2つの大項

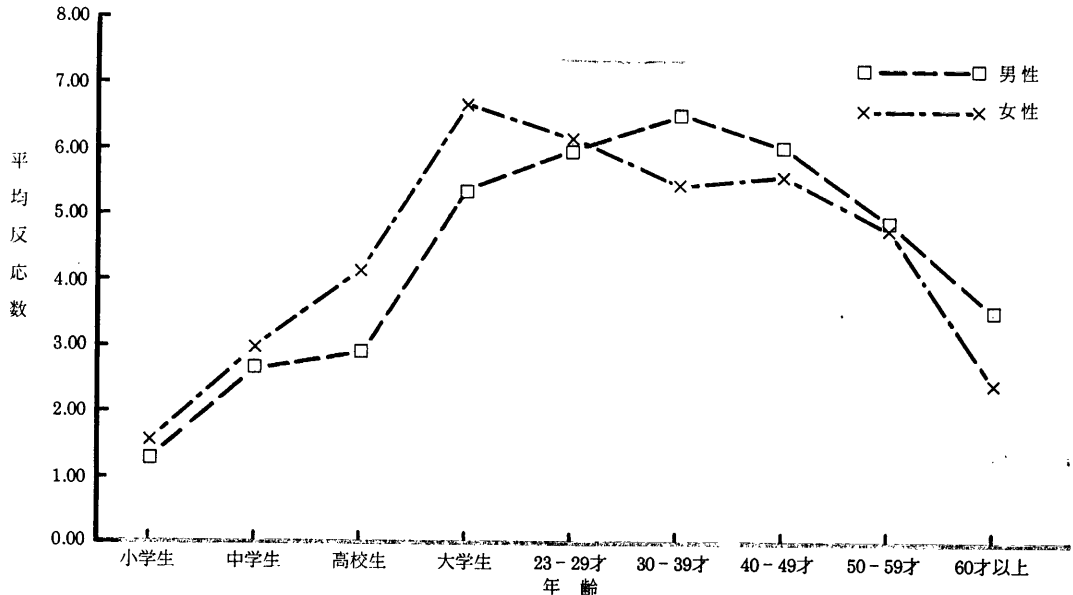


図5-1 性格全体の平均反応数

目の中には分類できない性格記述が分類される。「性格(気質)」の平均反応数は、小学生では1に満たないが、それから年齢を追うごとに増える傾向があり、20代から40代では3反応以上になる。そして、50代以降では減少している。性差については、小学生から大学生までは女性の反応の方が多い。それ以降は男性の方が若干多いが、差は小さなものとなっている。「性格(その他)」と「性格(力動)」も似た傾向を示しているが、反応数自体が「性格(気質)」よりも少ない。また、「性格(その他)」では性差はほとんど認められず、「性格(力動)」では、反応数の多い年齢層が若干低く、大学生から30代までとなっている。このように、性格の3つの大項目は、平均反応数において類似した傾向を示している。そこで、この3つの大項目の反応数を合計して性格全体の反応数を算出し、その平均値の分析を行なうことにした。それをグラフ化したものが図5-1である。これを見ると、男女共に逆U字形の曲線を描いている。女性では小学生から大学生までの間増加し、その後減少している。一方男性では、小学生から30代まで増加して、その後減少している。しかも、男性の平均反応数は、小学生から大学生まで女性を下回っており、20代でほぼ女性と同じになった後、

30代以降では女性を上回っている。これは、性格の反応数と発達および加齢との間に何らかの関係が存在し、そこには性差によるずれがあることを示唆している。

「自己」は、欲求・希望・願望、自己評価、キャセクション、趣味、超越者に対する態度、実存的な自己意識などを示す反応が分類される大項目である。この大項目には全部で90の小項目があり、最もカテゴリー数の多い大項目である。反応数も最も多く、全体の平均は、男性が7.80、女性が7.93となっている。また、言及率を見ると、全体の98.5%の被験者がこの大項目の反応を少なくとも1反応している。年齢や性別による反応数の変化を見ると、かなり複雑な動きを示している。男性は、中学生で1つのピークがあり、大学生で再び増加するが、全体としては40代までなだらかに減少する傾向がある。しかし、40代から60才以上にかけては急激に増加し、60才以上の男性の反応数は9.95に達している。一方女性では、中学生で最高値の9.02になった後、大学生まで急激に減少し、それ以降は50代までなだらかに増加している。性差は、高校生、大学生、40代に強くあらわれている。特に、高校生と大学生の間では男女が入れ替わっている。高校生では女性の反応数の方

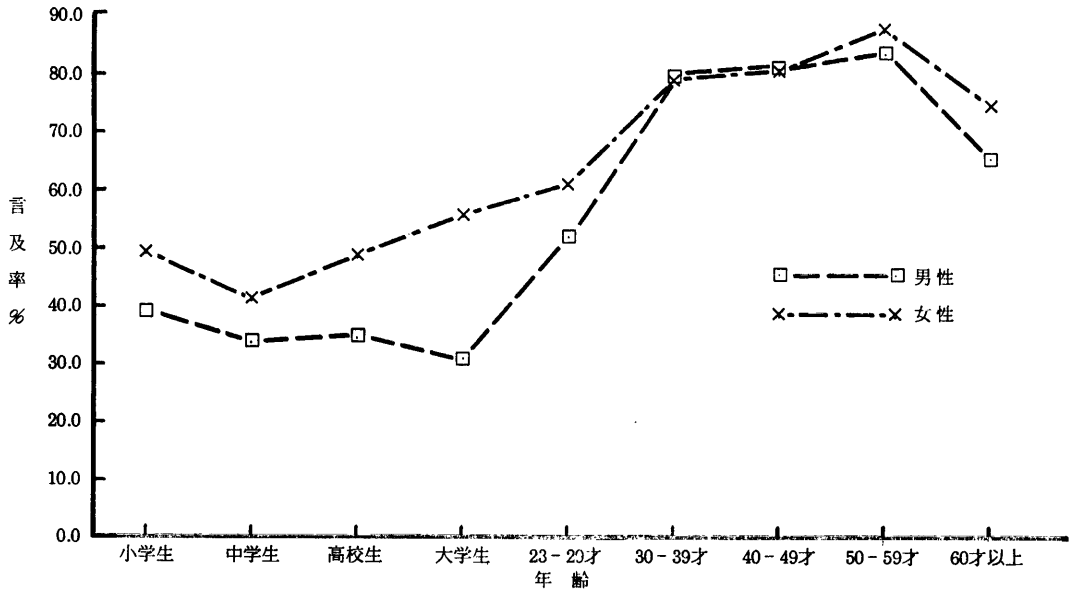


図 5-2 「プライマリー・グループ」の言及率

が多いのに対し、大学生では男性の方が多くなっている。このような複雑な変動があるのは、この大項目に分類される反応が多様なものであるためとも考えられ、より明確に理解するためには、小項目単位の分析が必要と考えられる。

「身体」には、容姿、体格、健康状態、体質、身体能力、身体機能などについての記述が分類される。平均反応数は、男女共に小学生で最も高くなっている。そして、大学生あるいは20代まで減少傾向を示しており、その後50代で再び高くなっている。これは加齢に伴う身体の衰えとも関係しているように思われる。性差については、小学生と中学生では男性の方が反応数が多いのに対し、高校生と大学生では女性の方が多くなっている。これは、思春期において女性が、男性よりも身体に対し強い意識を持っていることを示唆していると言えるであろう。

「プライマリー・グループ」には、自分の家族や家庭についての記述、あるいは、血縁関係や親戚などについての記述が分類される。この大項目の平均反応数は全体で1.73であるが、被験者全体での言及率は46.2%である。言及率を性・年齢別にグラフ化したものが、図5-2である。これを見ると、ほとんどの年齢層において男性よりも女性の

方が言及率が高く、特に大学生以下ではその差が大きくなっている。これは、女性にとって家族が大きな意味を持ち、特に青年期以前の、両親から独立していない段階において、女性は男性よりも家族と強い関係を持っている場合が多いことを示唆している。年齢差については、30代になると急激に「プライマリー・グループ」の反応をする被験者が増加し、30代から50代までは80%付近の言及率がある。しかも、この期間の性差はほとんどない。30代から50代は、自分の家庭を築いて子供を養育している時期である。そういう意味では、自分の家族が自己概念・self-imageに反映されるのは当然と思われる。しかし、女性は、一般的に男性よりも家庭の中にいる場合が多く、男性よりも言及率が高くなるものと予想されるが、実際には大きな差は認められない。そこで平均反応数を比較してみると、30代から50代にかけて0.3から1.0程度女性が多くなっている。このような事実から、家庭・家族は、30代から50代にかけて大多数の男女のself-imageに反映されているが、各個人の中の位置づけを見ると、女性にとってより大きな意味を持っていると考えることができる。

「セカンダリー・グループ」は、氏名、性別、年齢などのデモグラフィックな属性についての記

述や、学校、職業、所属集団についての記述などが分類される大項目である。この大項目の平均反応数は「自己」に次いで多く、全被験者の平均は4.01となっている。男性は、50代に5.77となるのを除いて、平均反応数4前後で安定している。それに対し、女性は小学生と中学生の間で4.18から3.46まで下がり、中学生から20代の間で、4.46まで緩やかに増加している。そして30代になると再び3.17に減少し、その後比較的安定している。50代の男性における急激な上昇の理由については明確にはわからないが、おそらく、この時期に起こる社会的な地位の変動が関係しているのではないかとと思われる。女性の平均反応数の変動は、女性と社会との関係を反映したものと解釈できる。小学生の時点では、女性の社会との関わりが男性と大きく異なるということはないが、中学生や高校生の時期には、男性と違う役割期待が求められるようになる。その一方で女性の社会進出が様々な形で問題にされており、就職の時期となる大学生・20代において女性が強い社会意識を持つようになる。しかし、30代になると多くの女性の生活の中心が家庭に移り、社会意識もそれに伴って弱くなるものと考えられるのである。実際に、女性の「プライマリー・グループ」の平均反応数は、30代で急増しており、「セカンダリー・グループ」と「プライマリー・グループ」の平均反応数の差は、20代で3以上あったのに対し、30代では0.55、40代で0.13、それ以降は0.1以下となっている。

最後に「その他」について見ることにしよう。大項目「その他」には、WAI 自体に対する批判が分類される「その他」と、「無回答」の2つの小項目しかない。しかし、今回の分析では無回答を分析対象から外したため、大項目「その他」の反応数は、小項目「その他」の反応数と同じものを意味することになる。被験者全体の平均反応数は0.22で、9つの大項目の中で最も少ない。しかも、小学生と20代以降では、0.1以下となっている。つまり、このような反応が出るのは、中学生から大学生にかけての間ということになる。特に多いのは高校生の男性で、平均反応数は0.54となっている。WAI に対する批判が出る1つの理由としては、学校において施行されたために、結果とし

てWAIに回答するか否かが、完全な自由意志に基づいたものではなくなくなってしまったためとも考えられる。もう1つの理由として、自己の発達という視点から見て、この時期には内的な葛藤が多く、自己を直視することを嫌う被験者が多かったためとも考えられる。

以上が大項目から見たWAI反応の分析結果である。このような分析から、自己概念・self-imageの発達のな変化をおおまかに捉えることができたのではないかと思う。次に小項目を用いてより細かい分析を行なうことにする。

2. 小項目別に見た反応傾向

反応傾向の分析に大項目を用いた場合、カテゴリーの抽象度が高いため、WAI反応にあらわれたself-imageの細かいニュアンスは失われてしまう。それに対し小項目はかなり具体的であるため、被験者の反応の実態を知るには適している。ここでは、小項目の言及率、すなわち、各小項目の反応を1反応以上した被験者の割合を、性別・年齢に分けて算出して分析を行なうことにする。しかし、基準書には303の小項目があり、その中には、非常に反応の少ないものも含まれている。そこで今回の分析では、性別と年齢で分けた18の被験者集団のいずれかで、20%以上の言及率のあった小項目だけに言及するにとどめる。

上記のような条件を満たす小項目は全部で49項目ある。しかし、これら49項目に対する18の集団の言及率を一度に見ると煩雑になるので、まず、小学生から大学生までの8つの集団について、この条件を満たす30の小項目について見ることにしよう。表5-3が、30の小項目の言及率を小学生から大学生までについて男女別・年齢別に示したものである。この表においては、表を見やすくするために、言及率を数値ではなくアスタリスクの数で示してある。言及率10%ごとにアスタリスク1つが表示されており、60%以上はすべてアスタリスク6つで表現されている。小項目の言及率が70%越える場合は極めて少なく、大学生までについて言えば、中学生の女性の72.5%が「好み」に言及しているのと、高校生の男性の71.3%が「学

表 5-3 小項目の言及率 (学生)

番号	小項目名	小学生		中学生		高校生		大学生	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
2050	明るい・明朗・陽気		*	*	**		*		**
4180	現在の欲求・希望			*	**	*	**	*	**
4190	生活習慣 (生活態度)	**	*	**	*	**	**	**	**
4200	生活状態	**	*	**	*	**	**	**	**
4730	審美		*	*	*	*	*	*	*
4770	飲食	**	**	*	*	*	*	*	*
4780	スポーツ	**	**	**	**	*	*	*	**
4810	その他の趣味	*	*	*	*	*	*	*	*
4820	好み	**	**	**	**	**	**	**	**
4850	勉強	**	**	*	*	*	*	*	*
4954	上位概念・機能部分	**	**	**	*	**	*	*	*
4955	自己規定	*	*	*	*	**	*	*	*
4959	その他			*	*	*	*	**	*
5210	自分勝手						*	*	**
6010	容姿・体格	**	**	**	**	*	**	*	**
6020	健康・体質	**	*	**	**	*	**	*	**
6030	身体機能・身体的能力	**	*	**	*	*	*	*	*
7010	血縁的役割	*	*	*	*	*	*	*	*
7050	兄弟に関する記述	*	*		*		*		*
8010	名前	**	**	*	*	*	*	*	**
8020	性別	**	**	**	*	**	**	**	**
8040	国籍	**	*	**	*	**	*	*	*
8050	出身地							*	*
8060	住所	*	*	**	*	**	*	*	**
8070	年齢	*	*	*	*	*	*	*	**
8090	世代 I (年齢)	*	*	*	*	*	*	*	*
8160	学内サークル	*	*	*	*	*	*	*	*
8200	学校に関する記述	**	**	**	**	**	**	**	**
8250	友人に関する記述	*	*	*	*		*	*	*
9060	その他			*		*	*	*	

※ 各セルのアスタリスクの示す言及率は以下の通りである。*: 10%以上, **: 20%以上, ***: 30%以上, ****: 40%以上, *****: 50%以上, *****: 60%以上。

※ ここには、各年齢・性別集団のいずれかで、20%以上の言及率のある小項目だけを掲載した。

※ 一部省略化された小項目名もある。正確な小項目名と小項目の内容については、巻末資料の「1988年度版基準書」を参照されたい。

校に関する記述」に言及している。大項目別に見ると、「自己」が12項目、「セカンダリー・グループ」が10項目、「身体」が3項目、「プライマリー・グループ」が2項目、「性格(気質)」、「性格(力動)」、「その他」が各1項目となっている。これを見ると、大項目別の平均反応数の分析で、平均反応数の高い大項目に属する小項目が多く含まれている。

この8つの集団のいずれかで40%以上の言及率のある小項目は、「スポーツ」、「好み」、「勉強」、「上位概念・機能部分」、「容姿・体格」、「身体機

能・身体的能力」、「名前」、「性別」、「学校に関する記述」の9項目である。このうち、「スポーツ」から「上位概念・機能部分」までの4項目は、大項目「自己」の小項目である。「スポーツ」は、スポーツに対する指向を示す記述が分類される。スポーツに対する指向には、自分が行なう場合と観戦する場合とがあるが、多くの場合、この両者を WAI の反応から弁別することは困難なため、両者を同一の小項目に分類している。言及率は、小・中学生で比較的高く、高校生と大学生で若干低くなっている。「好み」には、好みに関する記

述全般が分類されるが、スポーツ、趣味、食べ物の好き嫌いなど、反応頻度の多い反応は別にカテゴリーが設けてあり、それらは「好み」には分類されない。具体的には、「白が好き」とか「人混みが嫌い」といった反応が分類される。この小項目は、女性の言及率の方が高いという傾向を示している。「勉強」も指向・キャセクションについての項目で、勉強そのものや科目に対しての興味や好き嫌いについての記述が分類される。これは、小学生においては50%以上の言及率があるが、年齢が高くなるに従って下がり、大学生では10%代になっている。「上位概念・機能部分」には、「人間」、「生物」、「地球人」といった反応や、「手が2本ある」といった反応が分類される。これも年齢とともに言及率が下がっているが、「勉強」ほど強い下降傾向は示していない。

「容姿・体格」と「身体機能・身体的能力」は、大項目「身体」に属する3のつ小項目のうちの2項目である。「容姿・体格」は、年齢とともに言及率が下がっており、また、女性の言及率の方が高い。それに対し「身体機能・身体的能力」は、同じように年齢とともに言及率が下がっているものの、男性の言及率の方が高い。これは、身体の捉え方が年齢・性別によって異なることを示している。また、「身体」の小項目の言及率の高いこと自体が、身体の self-image における重要性を示唆していると言えるであろう。

「名前」、「性別」、「学校に関する記述」は、大項目「セカンダリー・グループ」の中の小項目である。「名前」については、小学生では40%以上の言及率があるのに対し、中学生では10%代になっている。そして、高校生以降で再び上昇傾向が認められる。「性別」は、中学生では両性共に30%代であるが、それ以外では、男性が40%代、女性が50%代となっている。「学校に関する記述」は、学校名、クラスなどから教師に関する記述まで、学校全般に関する反応が分類される。この小項目の言及率は、小学生から大学生に至るまで、男女ともに60%以上の言及率があり、この中で最も言及する被験者の多い小項目となっている。

これらの結果を見ると、言及率の高い小項目には、パーソナリティの社会・生物学的基礎に関する

記述が多く含まれており、しかも、それらの多くが年齢の上昇とともに言及率を下げている。それに対し、言及率が明確な上昇傾向を示す小項目は、この表の中にはほとんど見られない。これは、年齢の上昇に伴い反応が多様化し、特定の小項目に反応が集中する傾向が弱くなるためと考えられる。それでも、言及率が上昇傾向を示している小項目もある。それは、大項目「自己」の中の「その他」と大項目「性格(力動)」の「自分勝手」である。「自己」の「その他」には、自分自身についての記述ではあるが、他の小項目には分類できない反応が分類される。ある意味で難解、複雑な反応が分類されることになる。つまり、これも年齢の上昇に伴う反応の多様化を示している。「性格(力動)」の「自分勝手」は、否定的なニュアンスを持った小項目である。この小項目の言及率が年齢とともに上昇する理由は、発達に伴って自己の行動を客観的に見つめたり反省する能力が獲得され、自己の否定的な側面をも self-image に取り入れることができるようになるためと考えられる。そのほかに、女性についてのみ、高校生と大学生で「血縁的役割」と「年齢」の言及率の上昇が認められる。これは、この年齢層の女性に対する社会的な役割期待とも関連しているものと考えられる。

社会人を年齢と性別で分けた10の集団のいずれかで、20%以上の言及率のあった小項目は41項目ある。これらの小項目の言及率を集団別に示したものが、表5-4である。これも表5-3のようにアスタリスクで言及率が示されている。社会人の10の集団のいずれかで40%以上の言及率のある小項目は、「生活習慣(生活態度)」、「生活状態」、「審美」、「飲食」、「スポーツ」、「その他の趣味」、「好み」、「健康・体質」、「血縁的役割」、「子どもに関する記述」、「性別」、「職場・職業に関する記述」である。これと学生で言及率の高かった小項目とを比較すると、両者で共通するのは、「スポーツ」、「好み」、「性別」の3項目だけである。また、この条件を満たす小項目数も学生が9項目であったのに対し、社会人では12項目になっている。これは、社会人と学生の WAI 反応が大きく異なり、社会人の方が多様な反応を示すことを示

表 5-4 小項目の言及率 (社会人)

番号	小項目名	23~29才		30~39才		40~49才		50~59才		60才以上	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
2090	協調性がある・同調的	*	*	*	*	***	*	*	*		*
2530	まじめ	*		*		**	*				
3010	短気である	*	*	*	*	**	*			*	
4120	老後への希望									**	*
4150	今の精神状態									**	*
4180	現在の欲求・希望	*	*	**	**		*		*	*	*
4190	生活習慣 (生活態度)	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
4200	生活状態	***	***	**	**	*	***	***	***	*	***
4230	自分は幸せだ						*			**	**
4250	自分に満足している									**	*
4580	心がけ	*	*	**	*	*	*	***	*	***	**
4600	健康に関する心がけ							*	*	**	
4730	審美	**	**	**	***	*	***	*	***	*	***
4760	社会				*		**	**	*	**	*
4770	飲食	**	*	***	**	***	**	**	***	**	**
4780	スポーツ	***	**	***	*	***	**	**	**	***	*
4790	旅行	*	*		*	*	*		**	**	**
4800	ギャンブル			*		**					
4810	その他の趣味	***	**	***	***	***	***	***	***	***	***
4820	好み	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***
4954	上位概念・機能部分	**	***	*	**	*	*	*	*		
4959	その他	*	*	**	*		*	*	*		
6010	容姿・体格	***	**	***	***	***	**	***	*	*	*
6020	健康・体質	***	**	***	*	***	***	***	***	***	***
6030	身体機能・身体的能力	***	**	**	**	***	*	**	**		
7010	血縁的役割	***	***	***	***	***	***	***	***	**	**
7060	配偶者に関する記述			**	**	**	**	*	**	**	**
7070	子供に関する記述			***	***	***	***	***	***	***	***
7090	孫に関する記述									**	**
7110	家族・家庭		*	**	*	***	*	***	*	**	
8010	名前	*	**		*		*				
8020	性別	***	***	**	***	**	**	**	**	**	*
8040	国籍	*	**		*		*	**	*	*	*
8050	出身地	***	*	**	*	*	*	**	**	*	**
8060	住所	*	**	*	*	*	*	**	*		
8070	年齢	**	**	**	*	*	*	**	*	*	
8140	生活形態	***	**	**	*	**	*	**	*	**	***
8200	学校に関する記述			*						**	*
8220	職場・職業	***	***	***	***	***	***	***	***	***	**
8250	友人に関する記述	*	*	*	*	*	**	**	*	***	**
8280	人間関係に関する記述					*	*	**	*		

※ 各セルのアスタリスクの示す言及率は以下の通りである。*: 10%以上, **: 20%以上, ***: 30%以上, ****: 40%以上, *****: 50%以上, *****: 60%以上。

※ ここには、各年齢・性別集団のいずれかで、20%以上の言及率のある小項目だけを掲載した。

※ 一部省略化された小項目名もある。正確な小項目名と小項目の内容については、巻末資料の「1988年度版基準書」を参照されたい。

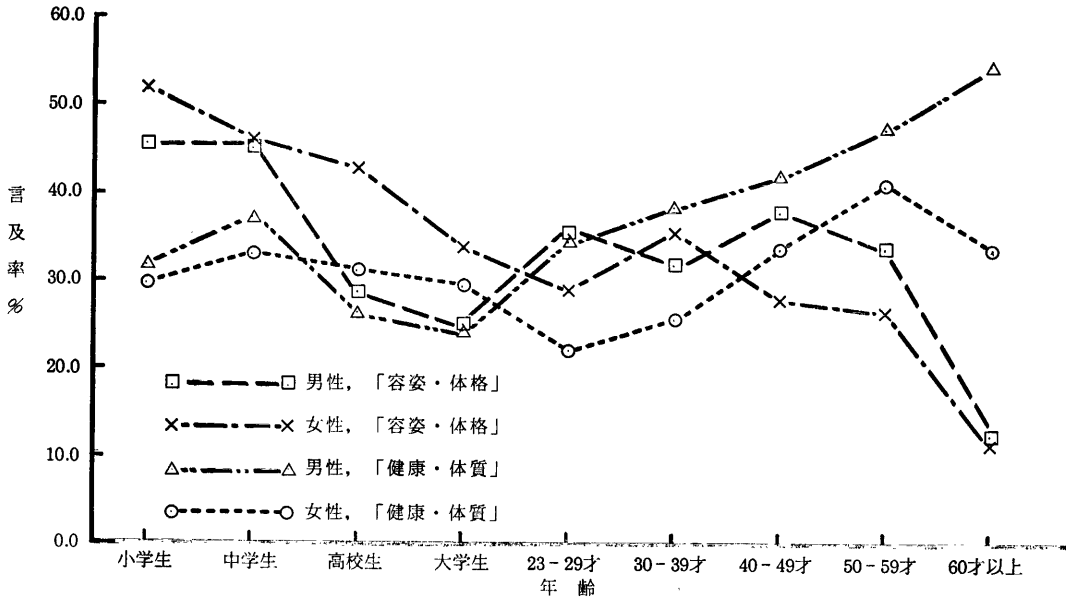


図5-3 「容姿・体格」「健康・体質」の言及率

している。

「生活習慣（生活態度）」と「生活状態」は大項目「自己」の小項目である。「生活習慣（生活態度）」には日常生活における習慣的な行動の記述が主に分類される。言及率を見ると、どの集団でも30%以上の言及率があり、性差もほとんどない。「生活状態」には生活習慣以外の日常生活の記述が分類されるが、集団間での言及率の違いが大きい。男性について言えば、全体的に年齢とともに下降する傾向があるが、50代で高くなっている。女性についても、20%代から30%代にかけて変動しているが、50代においてだけ40%代になっている。「生活状態」の言及率が高くなるということは、self-imageの中で日常生活が顕在化することを意味している。おそらく、これは、50代において日常生活に何らかの大きな変動があることを示唆しているものと考えられる。

「審美」、「飲食」、「スポーツ」、「その他の趣味」、「好み」は、いずれも大項目「自己」の中の指向・キャセクションについての項目である。「審美」には、美術、音楽、文学をはじめとする、美に対する指向を示す記述全般が分類される。この小項目の言及率は、20代ではほとんど性差はないが、30代以降では男性よりも女性において高い。「飲

食」は、男性が20%代から30%代にかけて変動しているのに対し、女性は10%代から40%代にかけて変動しており、女性の年齢による変動が大きくなっている。「スポーツ」は、50代を除いて、男性の言及率が女性を大きく上回っている。「その他の趣味」には、他に該当する小項目のない趣味についての記述が分類される。この小項目の男性の言及率は、60才以上のほかは30%代で安定しているのに対し、女性は年齢とともに高くなる傾向を示している。「好み」は、年齢による変動はほとんどなく、一貫して女性の言及率が高い。ただし、60才以上においては女性の言及率が下降し、男性の言及率を下回っている。

「健康・体質」は、「容姿・体格」と「身体機能・身体能力」と共に大項目「身体」を構成している。「容姿・体格」と「身体機能・身体的能力」は、学生においては高い言及率を示していたが、社会人では比較的低くなっている。ところで、容姿と体格、健康と体質は、自己の身体を捉える時の2つの見方とすることができる。つまり、目に見える姿としての外面的な身体的自己と、身体感覚などの自分だけがアクセスできる情報から構成された内面的な身体的自己との2つである。この2つが年齢や性別によってどのように変化するかを、

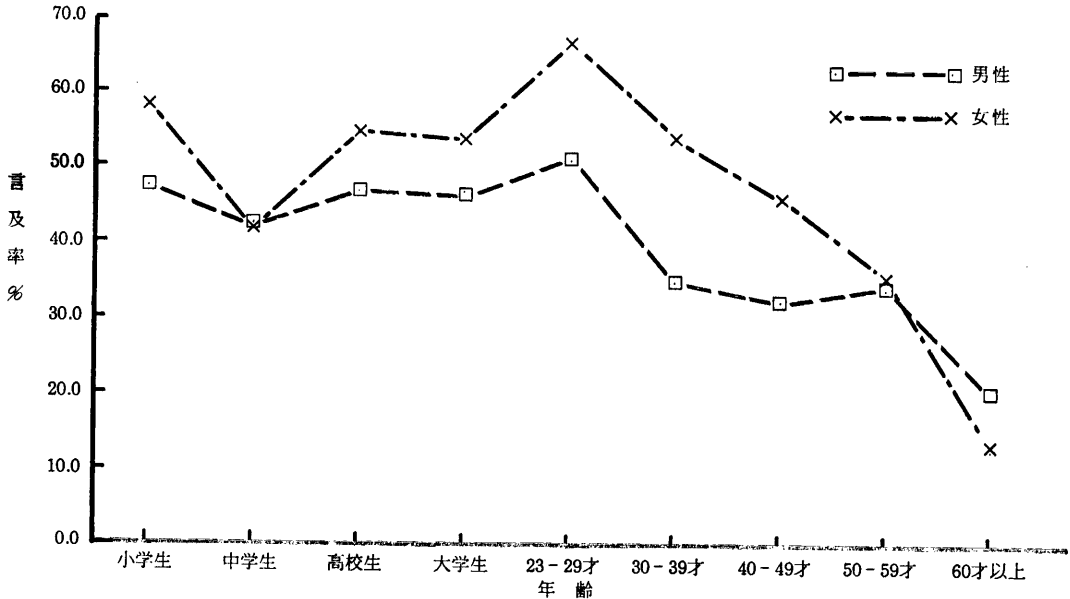


図5-4 「性別」の言及率

「容姿・体格」と「健康・体質」の言及率から見ることにしよう。図5-3は、この2つの小項目の言及率の変化を、男女別に小学生から60才以上まで示したものである。「容姿・体格」については、男性は、小・中学生の45.5%から大学生の24.9%まで下降し、20代から50代まで30%代で変動しており、60才以上では12.5%まで下降している。女性では、30代で一時上昇するものの、全体的な傾向として小学生の51.5%から60才以上の11.8%まで下降している。男女を比較すると、大学生までは女性の方が高いが、それ以降は男性の方が高い傾向を示している。一方、「健康・体質」については、男性は、中学生の37.6%から大学生の24.6%まで下降し、その後60才以上の55.0%まで上昇している。女性では、小学生から大学生まで30%付近で変動しているが、20代で22.0%まで下降し、その後50代の40.7%まで上昇している。また、全体的に男性の言及率の方が高い。まとめると、大学生あるいは20代まで「容姿・体格」と「健康・体質」の言及率は共に下降傾向を示している。これは、身体の self-image の中での位置づけが、発達とともに中心的なものから周辺的なものになることを意味していると思われる。また、20代以降、「容姿・体格」は一度上昇してか

ら下降傾向を示すのに対し、「健康・体質」は上昇傾向を示している。これは内面的の身体的自己が年齢とともに顕著になってくることを示しており、これには加齢に伴う身体の衰えが関係しているものと考えられる。

大項目「プライマリー・グループ」に属する小項目の言及率は、学生の8つの集団のいずれにおいても40%に達していない。ところが、社会人では「血縁的役割」と「子どもに関する記述」の2項目がかなり高い言及率を示している。「血縁的役割」には、「親」、「子」、「夫」、「妻」などの家庭内における自分の役割を述べた反応が分類される。この小項目には女性が言及することが多く、特に30代では60%以上の女性がこのような反応をしている。「子供に関する記述」は年齢差が大きく、20代では10%以下であるに対し、30代から50代にかけては男女共に40%以上の言及率がある。特に50代の女性では、60%以上の言及率がある。これは、子供のいない者の多い20代と、子育ての時期にあたる30代から50代との差を明確に示している。

「性別」と「職場・職業に関する記述」は、大項目「セカンダリー・グループ」の小項目である。性別は、年齢とともに言及する者が減る傾向

を示している。性別に対する言及は性的同一性とも深く関連し、その発達的变化を追うことには大きな意味がある。そこで小学生から60才以上に至るまでの「性別」の言及率を図5-4に示しておいた。これを見ると、全体的に女性の言及率が男性より高いことがわかる。ただし、中学生と60才以上においては、男性の方が高くなっている。また、女性の方が男性よりも年齢による変化が大きい。20代の女性の66.7%が性別に言及しているのに対し、60才以上の女性で性別に言及する者は11.8%に過ぎない。これは、女性の性的同一性が年齢とともに大きく変化し、特に、20代において最も強くなることを示唆していると言えるであろう。「職場・職業に関する記述」は、社会人で最も言及率の高い小項目である。特に50代の男性の言及率は、83.1%にも達している。これは、男性にとって職業が大きな意味を持っていることのあらわれと考えられる。20代の女性の言及率が高いのは、実際に就業している女性が多いためと思われるが、30代以降については「主婦」という反応がこの小項目に分類されているためであろう。

その他の傾向としては、社会人では性格に関する小項目の言及率が高くなっていることが挙げられる。性格のうち、いずれかの集団で20%以上の言及率のある小項目として、学生では「明るい・明朗・陽気」が挙げられているだけであったが、

社会人では「協調性がある・同調的」、「まじめ」、「短気である」の3項目が挙げられている。40代の男性は、これら3項目の言及率がすべて20%以上で、「協調性がある・同調的」の言及率は31.2%もある。協調性や同調性が社会生活の中で求められる特性であることを考慮すると、社会的な役割期待が自己の性格記述にも大きく反映されていると考えることもできる。

以上が、言及率の高い小項目からのWAI反応の分析結果である。ここに挙げられた小項目を見ただけでも、被験者の反応の多様性は理解できると思う。1988年度版基準書の小項目は303項目あり、そのすべてについて述べることはここではできなかった。これらすべてについて詳細に分析すれば、さらに多様なself-imageがあらわれてくるであろう。その一方で、実際の被験者の反応全体は20の自己記述であることを忘れてはならない。つまり、被験者は個々の反応の中で自己を表現しているだけでなく、20の回答全体を通して自己を表現している。このようなことを考慮すれば、20回答を基準書で分類評価し、最終的には被験者の言及した20の小項目の組合せパターンの分析や、自分らしさの評価（被験者が、「特に自分らしい」反応として○を付けたもの）、反応の出現順位も含めた総合的な分析が必要となるであろう。

6

総括と展望

1. 研究結果の要約	51
2. 研究結果に対する考察	52
3. 研究の位置づけと今後の展望	53

1. 研究結果の要約

本研究の目的は、自我・自己を実証的に分析することにあり、そのための1つの有力な技法としてWAI技法を用いた。自我あるいは自己を実証的に分析する際の糸口として被験者のself-imageは有効なものと考えられる。また、WAI技法は、研究者の視点から制限することなしに、被験者の自発的なself-imageを得られるという長所を持っている。その一方で、WAI技法で得られた反応に対しては、直接、数量的な分析を行なうことができず、数量的な分析を行うためには、何らかの反応カテゴリーによって反応を分類する必要がある。しかし、研究者の視点から設定された反応カテゴリーを用いれば、反応の持つ自発性が活かされないことになる。そこで本研究では、WAI反応をKJ法によって内容分析し、その結果に基づいて、帰納的に反応の評価カテゴリーを作成した。

この評価カテゴリーは基準書と呼ばれ、1983年に初版が作成されて以来、数回の改訂が施されている。基準書の改訂は、WAI反応の基準書によ

る分類・評価と集計の結果に基づいて行なわれてきた。1986年には、基準書のカテゴリーと榎田・佐野のパーソナリティ・スキームとの間に対応が認められたため、このスキームを参考にしてカテゴリーの配置が行なわれた。そして、1986年以降は、基準書の大きな改訂は行なわれていない。本研究の分析に使用された1988年度版基準書は、1986年度版基準書とほぼ同じもので、小項目と呼ばれる303のカテゴリーを持ち、それらの小項目は、大項目と呼ばれる9つのクラスターに分類されている。

今回の分析の対象となった被験者は、9才(小学校3年生)から60才以上の高齢者にまで及び、被験者数は、男女合わせて7,520名である。大項目を用いた反応の全体的傾向の分析結果を見ると、WAI反応には、項目による違いや性差・年齢差が認められる。

まず、WAI反応に多いのは、指向的側面についての記述と、デモグラフィックな属性および社会関係についての記述である。この2つについては、反応数だけでなく反応をする被験者数も多く、指向的側面についての記述はほぼ100%、デモグラフィックな属性・社会関係については80%

から90%の被験者が反応している。その一方で、能力についての記述は少ない。年齢差については、性格についての記述が大学生あるいは20代まで年齢とともに増加し、それ以降減少する傾向がある。また、30代から50代にかけての被験者の多くが、家族や家庭に関する記述をしている。この家族や家庭に関係する記述の数は、男性よりも女性で多くなっている。

小項目を用いた詳細な分析結果を見ると、小学生から大学生にかけては、スポーツや勉強などに対する指向、身体、名前、性別、学校などに関する記述をする者が多い。特に、学校に関する記述をしている者は60%以上にも昇る。社会人では、日常生活、趣味などに対する指向、健康・体質、血縁的な役割、子供、性別、職場や職業に関する記述をする者が多い。学生では、多くの小項目の言及率が年齢とともに下降しており、特に勉強に関する指向は強い下降傾向を示している。その一方で、難解で複雑な反応と「自分勝手」という性格記述の言及率は年齢とともに上昇している。社会人では、身体に関する記述で年齢的な変動が認められる。健康や体質に関する記述は、年齢とともに言及率が上昇しているのに対し、容姿や体格に関する記述は、40代以降で言及率が下降している。性差が最も明確にあらわれているのは、性別に関する記述で、ほとんどの年齢層で女性の言及率が高くなっている。

2. 研究結果に対する考察

今回の分析の被験者は約7,500名にも及び、従って、今回の結果はかなり高い信頼性を持つと言えるであろう。今回得られた結果から次のようなことが考えられる。まず、WAIには個人にとって重要なもの、あるいは、重要な事柄があらわれる傾向があるということである。反応数や言及率の分析で得られた結果には、ある意味で、一般的な常識からも当然と考えられるものが多い。例えば、自分の家庭を築き自分の子供を育てている世代において、家族や家庭に関する記述や子供に関する記述が多いという結果もそれにあたる。しかし、一般的な常識は、家庭を築いたものが家庭や

自分の子供に対し、強い愛情あるいは関心を示すことを当然としているからこそ、このような予測を生み出すのである。つまりこれは、WAIの反応が個人の自我関与、あるいは、自己概念と密接に関連していることを示唆している。もちろんすべての反応が、このような重要性を持つとは言えないが、各個人の20の回答を総合的に分析することにより、個人の自我・自己を理解する際の重要な手がかりを得ることができよう。

次に、個人の指向的側面、デモグラフィックな属性、社会関係が、self-imageの中でも特に中心的あるいは顕在的なものであるということである。反応数が多い項目を見ると、確かに指向的な側面についてのものが多い。この理由としては、指向的な側面についてのカテゴリー自体が多いということが挙げられる。しかし、基準書のカテゴリーは、帰納的に設定されたものであることを忘れてはならない。つまり、実際にそのような反応が多いからこそ、それらが分類されるカテゴリーも多いのである。指向的な側面は、心理学的には要求、動機づけ、態度、キャセクションなどを含んでいる。これは、個人の心が何に向いているのか、あるいは、個人が何に生きているのかをあらわす側面と言うこともできるであろう。動機づけや要求などを個人が内的に経験する際、それらは非常に生き生きとした感覚を伴う。おそらく、個人はそれらの感覚を「自分自身のもの」として強く感じるであろう。とすれば、そのような感覚が比較的頻繁に経験されることにより、自己概念に反映することも当然の帰結と考えられる。内的な感覚を根底に持つことが、自我・自己と呼ばれるための1つの重要な要因となるのではないかと、いう仮説も考えられる。それに対し、デモグラフィックな属性と社会関係は、個人を取り巻く社会と文化の影響を示していると言えるであろう。自我・自己に対する社会・文化の影響は、多くの研究者の指摘するところであるが、この結果はそれを裏付けするものと言える。しかし細かく見ると、発達段階において両者の関係に相違がある。小学生では、名前を反応する者が目立つが、それ以降は極端に減少する。名前とは、おそらく個人が社会・文化から最初に受け取るものの1つであ

り、それは、その後の社会関係の基礎となるものである。しかし、これはあくまでも受動的に受け取るものであり、そこに主体性は反映されない。それに対し職業生活、家庭建設などはすべて能動的な社会参加である。このような意味では、ある程度発達段階が進めば、個人は、社会・文化から一方的に影響を及ぼされるのではなく、社会・文化との相互作用の中で自己の意味を見出ししていくものと考えべきかも知れない。

最後になるが、年齢とともに self-image の個人差が拡大するというのも重要である。これは、年齢の上昇とともに反応が特定の項目に集中することが少なくなることに示されている。個人は、発達とともに精神的に分化して行くものである。おそらく自我・自己も、このような過程をたどるものと思われる。結果として成人の自我は、子供に比べて非常に多くの側面を持つことになる。問題は、その分化の仕方である。この分化の過程には外界との相互作用が大きな影響を及ぼしており、交互作用の内容が違う以上、個人間にも分化の仕方に違いがあらわれるはずである。これは上に述べた指向の問題とも関係するが、様々な交互作用を通して様々な内的な経験をし、それが自我・自己あるいは自己概念に反映されるのである。つまり、その相互作用の行なわれる時の“外界”，“内界”，そして，“その両者の関係”という3つの変数によって、個人独自の自我・自己が形成されていくと考えることもできるであろう。

3. 研究の位置づけと今後の展望

自我・自己は、誰もが持っているものであり、誰にとっても最も重要なものに違いない。それ故、古代から多くの哲学者、思想家を悩ませてきたのである。にもかかわらず、自我・自己の実証的な研究が盛んになったのは、最近になってのことである。現在の研究状況は、成長過程で言えば“育ち盛り”で、まさに知識を蓄積する時期にあると言えるであろう。ところが、実証的な科学における栄養であり財産でもあるデータとその分析から得られた事実は、必ずしも豊かなものとは言えない。確かに、膨大な研究が毎年世に出されて

いるが、自我・自己のある特殊な側面を少ないデータで研究したものも少なくない。実証的研究で最も価値あるものは、データのもつ研究者間での互換性である。すなわち、ある研究者が得たデータを他の研究者が、データを取った研究者の主観的解釈をほとんど経ずに受け取ることができるということである。しかし、特殊な立場から得られた少数のデータは、例外を除いて、たとえそれからどれだけ重要な結論が導き出されたとしても、データそのものの価値として高いものとは言えない。それに対し、広い視点から取られた大量のデータは、凡庸な結論しか導き出されなくても、他の研究者に取っても貴重なものとなるであろう。今回のわれわれの研究も、このような立場から行なわれたものである。結局は、どこかで研究者の主観が入るものだが、われわれはその時期を極力遅らせるよう努めた。つまり、被験者の反応そのものや反応の分類・評価に、われわれの主観が入らないように努めたのである。また、できる限り広い層の多くの人々のデータを集めるようにも努めた。そのため、分析結果に主観が入っていたとしても、ほとんど無垢のデータを大量に蓄積することができた。これは、他の研究者が全く別の視点から分析することも可能なデータとなり得るものである。

しかしながら、これはまだ十分なものとは言えない。いくつかの課題が残されている。まず、第1に被験者の問題である。確かに、データ数としては大量だが、被験者の内訳は、学生に偏ったものとなっており、特に高齢者のデータは少ない。自我・自己がライフ・サイクルを通じて変動していること、そして、自我・自己が、死の瞬間まで個人に影響を及ぼし続けることを考慮すれば、高齢者のデータの収集は是非とも行なう必要がある。第2の問題は、分析結果の中にかに個人を浮かび上がらせるかという問題である。大量のデータの数量的な分析では、どうしても個人よりも集団に焦点が行ってしまう。これらの解決策としては、数値的な解析手法を改良・開発することによって、より個人を包括的に捉えられるようにすることが考えられる。これは、多変量解析の進歩から言っても期待できるものと思われる。もう1

つの解決策は、もっと少数の被験者を包括的に深く分析することであろう。このような分析では、反応を数値に置き換えることもなく、被験者個人の反応をありのままに見ることも可能となる。そして、このような分析は、自我・自己の理解によって非常に示唆に富む知見をもたらすものと期待

される。

このモノグラフは、この研究の中間的なまとめに過ぎない。われわれは、今後、データの蓄積と他の分析法も導入した多角的な分析によって、自我・自己の理解がより一層深まるものと考えている。

- Allport, G. W. (1943) Ego in contemporary psychology. *Psychological Review*, **50**, 451-478.
- Allport, G. W. (1955) *Becoming: Basic considerations for a psychology of personality*. New Haven: Yale University Press.
- Allport, G. W. (1961) *Pattern and growth in personality*, New York: Holt, Reinhart & Winston.
(今田恵監訳 1968 人格心理学 (上・下) 誠信書房)
- Bem, D. J. (1967) Self-perception: an alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena. *Psychological Review*, **74**, 188-200.
- Bugental, J. F. T., & Zelen, S. L. (1950) Investigation into 'self-concept': I. The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, **18**, 483-498.
- Butler, J. M., & Haigh, G. V. (1954) Changes in the relation between self-concepts and ideal concepts consequent upon client-centered counseling. In C. R. Rogers & R. F. Dymond (Eds.), *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of Chicago Press, Pp. 55-75.
- Cooley, C. H. (1902) *Human nature and social order*. New York: Scribner's.
- Combs, A. W., & Snygg, D. (1959) *Individual behavior: A perceptual approach to behavior*. New York: Harper.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. (1972) *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. (1973) Effects of objective self-awareness on attribution of causality. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 17-31.
- Edwards, A. L. (1941) Political frames of reference as factor influencing recognition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **36**, 224-235.
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 1・2 みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959) *Psychological Issues*. Vol. 1. *Identity and the Life cycle*. New York: International Universities Press.
(小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975) Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Festinger, L. (1957) *A theory of cognitive dissonance*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
(末永俊郎監訳 1965 認知的不協和の理論 誠信書房)
- Festinger, L., & Carlsmith, J. (1959) Cognitive consequences of forced compliance. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **58**, 203-210.

- Fittes, W. H. (1964) *Tennessee self concept scale: Test booklet*. Nashville, Tenn.: Counselor Recordings and Tests, Department of Mental Health.
- Frank, J. D. (1935a) Individual differences in certain aspects of the level of aspiration. *American Journal of Psychology*, **47**, 119-128.
- Frank, J. D. (1935b) Some psychological determinants of the level of aspiration. *American Journal of Psychology*, **47**, 285-293.
- Freud, A. (1936) *Das Ich und die Abwehamechanismen*. Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
(外林大作訳 1998 自我と防衛 誠信書房)
- Freud, S. (1923) *Das Ich und das Es*. Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
(井村恒郎訳 1970 自我とエス フロイド選集・4 自我論 日本教文社)
- Freud, S. (1933) *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
(懸田克躬・高橋義孝訳 1971 精神分析入門(正・続) フロイド著作集・1 人文書院)
- Gordon, C. (1968) Self-conceptions: Configurations of content. In C. Gordon, & K. J. Gergen (Eds.), *The self in social interaction*. Vol. 1. *Classic and contemporary perspectives*. New York: Wiley. Pp. 115-136.
- Gough, H. G., & Heibrun, A. B., Jr. (1980) *The Adjective Check List manual: 1980 edition*. Palo alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.
- Hartmann, H. (1939) *Ich=Psychologie und Ampssungs Problem*. Internationael Zeitschrift für Psychoanalyse und Imago.
(霜田静志・篠崎忠男訳 1967 自我と適応 誠信書房)
- Hoppe, F. (1930) Erfolg und Miserförg. *Psychologisch Forschung*, **14**, 1-62.
- Huntley, C. W. (1940) Judgements of self based upon records of expressive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **35**, 398-427.
- Ickes, W. J., Wicklund, R. A., & Ferris, C. B. (1973) Objective self-awareness, choice, and dissonance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **28**, 262-269.
- 岩熊史朗・楨田 仁 (1989) 個人のセルフ・イメージの構造 ——大学生を被験者とした WAI 反応の反応の相互関連性の分析—— 心理学研究, **60**, 237-244.
- James, W. (1890) *Principles of psychology*. New York: Holt. 2 vols.
- James, W. (1892) *Psychology: Briefer course*. New York: Holt.
(今田恵訳 1939 心理学 上・下 岩波文庫)
- 梶田叡一 (1988) 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会.
- 川喜田二郎 (1967) 発想法 中公新書.
- 菊池登紀子 (1970) 青年期における自己観 [1] ——私立女子高校生における発達の様相—— 岩手大学教育学部研究年報 **30**, 57-74.
- 木村 敏 (1978) 自覚の精神病理 紀伊國屋書店.
- 北村晴朗 (1977) 新版 自我の心理 誠信書房.
- Klein, G. S., & Schoenfeld, N. (1941) The influence of ego-involvement on confidence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **36**, 249-258.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. (1954) An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 68-76.
- McGuire, W. J., & McGuire, C. V. (1981) Spontaneous self-concept as affected by personal distinctiveness. In M. D. Lynch, A. A. Norem-Hebeisen, & K. J. Gergen (Eds.), *Self Concept: Advances in theory and research*. Cambridge, Mass.: Ballinger. Pp. 147-171.
- McGuire, W. J., McGuire, C. V., & Winton, W. (1979) Effects of household sex composition on the salience of one's gender in the spontaneous self-concept. *Journal of Experimental Social Psychology*, **15**, 77-90.

- McGuire, W. J., & Padawer-Singer, A. (1976) Trait salience in the spontaneous self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **33**, 743-754.
- McLaughlin, B. (1986) The WAI dictionary and self-percieved identity in college students. In P. J. Stone, D. C. Dunphy, M. S. Smith, & D. M. Ogilvie (Eds.), *The general inquirer: A computer approach to content analysis*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press. Pp. 548-566.
- 榎田 仁・岩熊史朗(1988a) WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (1) ——内容分析 (KJ 法) による基準書の作成—— 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, **28**, 61-71.
- 榎田 仁・岩熊史朗(1988b) WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (2) ——WAI 反応の発達的变化—— 哲学 (慶應義塾大学三田哲学会), **87**, 305-327.
- 榎田 仁・佐野勝男(1965) Dosefu-Test 基本生活領域の診断 ——テスト解説—— 金子書房.
- Marks, E. (1943) Skin color judgements of Negro college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **38**, 370-376.
- Markus, H. (1977) Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 63-78.
- Mead, G. H. (1934) *Mind, self and society*. Chicago: University of Chicago Press.
(稲葉三千男他訳 1973 精神・自我・社会 青木書店)
- Montemayor, R., & Eisen, M. (1977) The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, **13**, 314-319.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀 洋道(1966) 自我と適応との関係についての研究 (1) ——Self-differential 作成の試み—— 東京教育大学教育学部紀要, **12**, 84-91.
- Nel, E., Helmreich, R., & Aronson, E. (1969) Opinion change in the advocate as a function of the persuasibility of his audience: A clarification of meaning of dissonance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 117-124.
- 西村春夫・星野 命(1964) 自己態度の記述の心理的負荷について 科学警察研究所報告 (防犯少年編), **5**, (2), 13-28.
- Roethlisberger, F. L., & Dickson, W. J. (1939) *Management and the worker*. Cambridge: Harvard University Press.
- Rogers, C. R. (1951) *Client-centered therapy: It's current practice, implications and therapy*. Boston: Houghton.
(伊藤博訳編 1967 パースナリティ理論 ロージャズ全集8 岩崎学術出版社)
- Sarbin, T. R., & Rosenberg, B. G. (1955) Contributions to role-taking theory: IV. A method for obtaining a qualitative estimate of the self. *Journal of Social Psychology*, **42**, 71-81.
- Schacter, S., & Singer, J. E. (1962) Cognitive, social and physiological determinants of emotional state. *Psychological Review*, **69**, 379-399.
- Stephenson, W. (1953) *The study of behavior*. Chicago: University of Chicago Press.
- 高垣忠一郎(1974) T S T にあらわれた反応の心理的負荷について 京都大学教育学部紀要, **20**, 209-227.
- Watson, G. (1939) Work satisfaction. In G. W. Hartmann (Ed.), *Industrial conflict: A psychological interpretation*. New York: Cordon Press. Chapter 6.
- Wicklund, R. A. (1975) Objective self-awareness. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in expermental social psychology*. Vol. 9. New York: Academic Press. Pp. 233-275.
- Wolff, W. (1932) Selbstbeurteilung und Fremdbeurteilung im wissentlichen und unwissentlichen Versuch. *Psychologisch Forschung*, **16**, 251-329.

8

資料

1. 1988年度版基準書	59
2. 事例集	81

1. 1988年度版基準書

基準書は、WAI反応のための評価カテゴリーである。基準書は、WAI反応の内容分析の結果に基づいて帰納的に作成されており、1983年に初版が作成されて以来、数回の改訂が施されている。基準書の第6版にあたる1988年度版には、小項目と呼ばれる303のカテゴリーがあり、それらは大項目と呼ばれる9つの上位カテゴリーに分類されている。

ここには、1988年度版基準書の全カテゴリーの小項目名と例示を掲載した。例示は、実際どのような反応がそのカテゴリーに分類されるかを示している。また、※の付いた例示は、そのカテゴリーに分類される反応としては、例外的な反応であることを示している。実際のカテゴリ評価においては、小項目名と例示を総合的に見て、最も近いと思われるカテゴリーに反応を分類することになる。小項目の中には、例示を挙げていないものもあるが、その場合は、小項目名のみが分類評価の基準となる。なお、基準書の巻末には、小項目名の五十音順の索引を掲載してある。

1988年度版基準書の構成は右のようになっている。

大項目名	小項目番号	ページ
1. 能力	1010~1080	60
2. 性格（気質）	2010~2900	60
3. 性格（その他）	3010~3490	64
4. 自己	4010~4959	66
5. 性格（力動）	5010~5560	70
6. 身体	6010~6030	72
7. プライマリー・グループ	7010~7120	73
8. セカンダリー・グループ	8010~8280	73
9. その他	9060~9070	75
小項目名五十音順索引		76

1. 能力

小項目番号 小項目名	例 示
1010 頭が良い	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しがきく。 ・頭はまあまあ賢い。 ・頭は悪いわけではない。 ・IQ（知能指数）が高い。 ・頭の回転は速い方である。 ※客観的。 ※理性的。
1020 頭が悪い	<ul style="list-style-type: none"> ・知能が低い。 ・頭の回転が遅い。 ※特別頭のきれる人間ではない。
1030 専門的能力がある	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が得意。 ・ピアノが得意。 ・経営・営業能力がある。 ※本当は食品部門のバイヤー向きだ。 ※芸術家に向いているような気がする。
1040 専門的能力がない	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が不得意。 ・経営・営業能力がない。 ・理数系が天敵である。 ※あまり特技がない。 ※仕事の要領はあまりよくありません。 ※いい加減に日本語が難しくて怒ってる人。
1050 対人的能力がある	<ul style="list-style-type: none"> ・指導力がある。 ・組織力がある。 ・説得力がある。
1060 対人的能力がない	<ul style="list-style-type: none"> ・指導力がない。 ・組織力がない。 ・説得力がない。 ※人を動かすことが苦手。 ※人の名前を覚えるのが苦手。 ※人のうえに立つのは得意ではありません。
1070 一般的能力がある	<ul style="list-style-type: none"> ・発想が豊か。 ・成績がよい。 ・センスがある。 ・想像力がある。 ・美的センスがある。 ・集中力・判断力がある。 ・整理整頓（片付け）が上手。 ※もの覚えがよい。 ※人の真似をするのが上手。

1080 一般的能力がない	<ul style="list-style-type: none"> ・悪趣味。 ・成績が悪い。 ・センスがない。 ・美的センスがない。 ・集中力・判断力がない。 ・整理整頓（片付け）が下手。 ※理詰め思考が苦手。 ※理屈をこね回すのが苦手。 ※物事を論理的に考えたりすることが苦手。
------------------	--

2. 性格（気質）

小項目番号 小項目名	例 示
2010 私はZ その他	<ul style="list-style-type: none"> ・単純。
2020 外向的	※自分一人の世界にとじこもるのがいや。
2030 開放的	<ul style="list-style-type: none"> ・秘密を持たない。 ・思ったことをすぐ顔に出す。 ※自分の感情を隠すのが下手。
2040 気さく	<ul style="list-style-type: none"> ・愛想が良い。 ・親しみやすい。 ・人見知りしない。 ・第一印象がよい。 ※誰とでも気軽に話することができる。
2050 明るい 明朗 陽気	<ul style="list-style-type: none"> ・快活。 ・笑い上戸。 ・おちゃめ。 ※いつもニコニコしている。
2060 にぎやか 騒がしい	<ul style="list-style-type: none"> ・面白い。 ・ひょうきん。 ・宴会要員。 ※はしゃぐことが好き。 ※祭り好き。
2070 おしゃべり	<ul style="list-style-type: none"> ・おしゃべりをよくする。 ・おしゃべりが好き。 ・口が軽い。 ・口数が多い。 ・沈黙が嫌い。 ※人と話すのが好き。
2080 ユーモアがある	<ul style="list-style-type: none"> ・冗談が好き。 ※ジョークをよく言う。

2090 協調性がある 同調的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社交的。 ・ 人付き合いがよい。 ・ 集団で何かするのが好き。 ・ 争いごとが嫌い。 ・ 妥協的。 ・ 他人がうれしそうにしているのを見るのが好き。 <p>※他人を馬鹿にしない。</p>
2100 寛容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鷹揚。 <p>※人のあやまちを許す。 ※冷徹になれない。</p>
2110 融通がきく	<ul style="list-style-type: none"> ・ 柔軟性がある。 <p>※臨機応変。 ※頑固でない。</p>
2120 温和	<ul style="list-style-type: none"> ・ 温厚。 ・ おだやか。 ・ 温かい。 ・ おおらか。 <p>※感情の動きがゆるやか。</p>
2130 優しい 思いやりが ある	<ul style="list-style-type: none"> ・ 親切。 ・ 気だてがよい。
2140 世話好き	<ul style="list-style-type: none"> ・ 面倒見が良い。 ・ 人の相談にのるのが好き。 <p>※おせっかい。 ※自分の知っていることを他人に教えてあげたい。</p>
2150 情にもろい 同情しやすい	<ul style="list-style-type: none"> ・ 涙もろい。 ・ 人間味あふれる。
2160 お人好し 人が良い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人を信じやすい。 ・ 人に頼られるとイヤとは言えない。 <p>※人に利用されやすい。</p>
2170 寂しがり屋	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人でいるのが嫌い。 ・ 別れが嫌い。 <p>※常に話し相手を求めている。 ※人がまわりにいないと不安。 ※いつもだれかにかまってもらいたい。 ※時には孤独になりたいと思うが、耐えられない。</p>

2180 おっちょこ ちょい そそっかしい ドジ 軽率	<ul style="list-style-type: none"> ・ うっかり。 ・ 注意力散漫。 ・ 早のみこみをする。 ・ あわてもの。 ・ よく失敗する。 ・ 思慮深くない。 ・ 無鉄砲。 ・ 考えずに行動する。 ・ 落ち着きがない。 <p>※そこつもの。 ※ちょっとぬけている。 ※計画的でない。</p>
2200 調子にのりや すい	<ul style="list-style-type: none"> ・ おせじによわい。 ・ のせられやすい。 <p>※はしゃぎ過ぎるときがある。 ※おだてにのりやすい。</p>
2210 飽きっぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・ 移り気。 ・ 浮気っぽい。 ・ 熱しやすく冷めやすい。 <p>※細かいことを長時間行なうのが苦手。</p>
2220 せっかち	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気ぜわしい。 <p>※いつもせかせかしている。</p>
2230 活発	<ul style="list-style-type: none"> ・ おてんば。 ・ 元気（性格的に）。 ・ エネルギーがある。 <p>※バイタリティがある。</p>
2240 行動的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実行型。 ・ じっと考えるのは嫌い。 ・ 行動しながら考える。 ・ やりたいと思ったことはたいていやってみる。 <p>※有言実行しないと気がすまない。</p>
2250 物事にこだわ らない 小さな事を気 にかけない	<ul style="list-style-type: none"> ・ 決断が早い。 ・ 物事を気軽に考える。 ・ くよくよしない。 ・ 小事に拘らない。 ・ さっぱりしている。 ・ 開き直りがきく。 <p>※物事にのめり込まない。 ※反省しない。</p>
2260 おおざっぱ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ずぼら。 ・ ややこしいことが嫌い。 ・ 几帳面でない。 ・ 繊細さに欠ける。 <p>※むずかしい話が苦手。</p>

2270 楽観的	<ul style="list-style-type: none"> ・先のことは余り考えない。 ・将来は明るい。 ・これといった悩みがない。 	2480 強情 頑固	<ul style="list-style-type: none"> ・融通がきかない。 ・切り替えが下手。 ※納得しないとできない。 ※気むずかしい。 ※一度思い込んだらまげない。
2280 のんき	<ul style="list-style-type: none"> ・のんびりしている。 ・おっとりしている。 ※脳天気。 	2490 しつこい 執念深い	<ul style="list-style-type: none"> ・根にもつ。
2290 気分転換が うまい	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちのきりかえが早い。 ・わりきりが早い。 ※失敗してもすぐに忘れる。 	2500 凝り性 一途	<ul style="list-style-type: none"> ・一生懸命。 ・情熱家。 ・全力投球。 ・物事に熱中しやすい。 ・興味のあることには熱中する。 ※ひとつのことに固執する。 ※好きなことはやり通す。 ※真剣になったときは視野が狭くなる。
2300 そう麟	<ul style="list-style-type: none"> ・わけもなく落ち込むことがある。 ・一人でいたくなることがある。 ※気持ちの浮き沈みが激しい。 	2510 努力家	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張り家。 ・地道（コツコツ型）。 ※努力をするのが好き。
2410 私はE その他	<ul style="list-style-type: none"> ・怒ると恐い。 	2520 勤勉	<ul style="list-style-type: none"> ・働き者。 ・働くのが好き。 ※いつも勉強している。
2420 自制心が強い	<ul style="list-style-type: none"> ・意志が強い。 ・自分に厳しい。 ※甘えはなるべく控えている。 ※怒りを感じてもストレートに外へは出さない。 	2530 まじめ	<ul style="list-style-type: none"> ・誠実。 ・杓子定規。 ※清純派。 ※面白くない人間。 ※非道徳なことは嫌い。 ※曲がったことは嫌い。
2430 精神的に強い	<ul style="list-style-type: none"> ・タフ。 ・気丈。 ・芯が強い。 ・逆境に強い。 ・動揺しない。 ※困難に負けず希望を持って暮らせる。 	2540 几張面	<ul style="list-style-type: none"> ・やりかけたことを残すと気になる。 ※身の回りのものはきちんとしておく。 ※服装などに関して几張面。
2440 度胸がある 大胆	<ul style="list-style-type: none"> ・あがらない。 ・勇敢。 ・何事にもあまりびくびくしない。 ※我を忘れればなんでもできる。 ※しばしば思い切った行動に出る。 	2550 まめ	<ul style="list-style-type: none"> ※「まめな人間」と言われる。
2450 鈍感 無神経	<ul style="list-style-type: none"> ・にぶい。 ・無頓着。 ・愚鈍。 	2560 約束を守る	<ul style="list-style-type: none"> ・パンクチュアル。 ※時間に遅れるのが嫌い。
2460 図々しい 図太い	<ul style="list-style-type: none"> ・ふてぶてしい。 ・あつかましい。 	2570 きれい好き	<ul style="list-style-type: none"> ・潔癖。 ・掃除好き。 ・いつも部屋のなかをきれいにしている。 ※不潔になると機嫌が悪くなる。
2470 忍耐力がある 忍耐強い 根気がある	<ul style="list-style-type: none"> ・我慢強い。 ・粘り強い。 ・根性がある。 ・やり通す。 ※最後まで諦めない。 ※きついことをされても黙っていられる。 		

2580 慎重	<ul style="list-style-type: none"> ・堅実。 ・じっくり腰を据えて考える。 ・計画的に行動する。 <p>※用意周到。 ※用心深い。 ※無理なことはしない。 ※石橋をたたいて渡るタイプ。</p>
2590 のろい	<ul style="list-style-type: none"> ・とろい。 ・ゆっくりしている。
2600 後半追い込み型	<ul style="list-style-type: none"> ・スロースターター。 ・取り掛かるのが遅い。 <p>※やり始めるのは遅いがやり始めると熱心にやる。 ※馬力はある。</p>
2610 気が長い	<p>※待ち合わせに相手が遅れても気長に待ってられる。</p>
2620 理屈っぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・理屈をこねるのが好き。
2710 私はS その他	<ul style="list-style-type: none"> ・関心のあることには詳しいが、知らないことには無関心。 <p>※貴族の高踏派。</p>
2720 内向的	<ul style="list-style-type: none"> ・非社交的。 ・自分の世界にこもりがち。 <p>※排他的。 ※好きな人間以外とはうまくやっ ていけない。 ※人付き合いが嫌い・下手。 ※自分から人に話しかける方では ない。</p>
2730 孤独が好き	<ul style="list-style-type: none"> ・大勢でいるのが嫌い。 ・一人でいても平気。 <p>※自分一人の時間を大切にしたい。</p>
2740 まわりを気に しない	<ul style="list-style-type: none"> ・世間体を気にしない。 ・回りが気にならない。 <p>※傍若無人。</p>
2750 無愛想	<ul style="list-style-type: none"> ・とっつきにくい。 ・あいぎょうがない。 ・他人に対してぶっきらぼう。
2760 感情を表さ ない	<ul style="list-style-type: none"> ・無表情。 ・喜怒哀楽が顔に出ない。 <p>※人から「よく分からない人だ」と 言われる。</p>

2770 執着心がない	<ul style="list-style-type: none"> ・淡泊。 ・熱中することがない。 ・一生懸命になることがない。
2780 物事に関して 無感動	<ul style="list-style-type: none"> ・反応が少ない。
2790 怠け者 面倒くさが り屋	<ul style="list-style-type: none"> ・横着。 ・ものぐさ。 ・筆不精。 ・ぐうたらしているのが好き。 ・まめではない。 ・面倒なことが嫌い。 <p>※勤勉でない。 ※きれい好きでない。</p>
2800 非行動的	<ul style="list-style-type: none"> ・じっとしているのが好き。 ・ぼんやりしている。 ・エネルギーがない。 ・無気力。 ・ぼーっとしている。 <p>※惰性で生きている。 ※計画はするがなかなか実行しな い。</p>
2810 気が利かない	<ul style="list-style-type: none"> ・他人に対する気配りに欠ける。
2820 口が堅い	<ul style="list-style-type: none"> ・秘密にすべきことはむやみに他 人に話さない。
2830 冷静	<ul style="list-style-type: none"> ・クール。 ・感情的にならない。
2850 冷たい 冷めている	<ul style="list-style-type: none"> ・ニヒリスト。 ・非情。 <p>※冷淡で人情に薄い。 ※思いやりに欠ける。</p>
2860 繊細 敏感	<ul style="list-style-type: none"> ・ナイーブ。 ・デリケート。 ・傷つきやすい。
2870 細かい事が 好き	<p>[例示なし。]</p>
2880 聞き役にま わる	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から話すより他人の話を聞 くのが好き。 <p>※聞き上手。</p>
2890 口数が少ない	<ul style="list-style-type: none"> ・無口。 ・寡黙。 ・無駄口は聞かない。 <p>※黙り込む。 ※話すのが嫌い。</p>

2900 思考的	<ul style="list-style-type: none"> 一人でいるときは考え事をしている。 一人で考えるのが好き。 行動より頭で考えるタイプ。 ※非現実的。 ※私は考え込むタイプ。
-------------	---

3. 性格 (その他)

小項目番号 小項目名	例 示
3010 短気である	<ul style="list-style-type: none"> 怒りっぽい。 けんか早い。 ※かんしゃくもち。 ※すぐ腹を立てる。
3020 短気ではない	<ul style="list-style-type: none"> あまり怒らない。
3030 話し上手	<ul style="list-style-type: none"> 人前で話すのが得意。
3040 口下手	<ul style="list-style-type: none"> 一対一になると話しをする。 大勢で話しをするのは苦手。 人前で話すのが苦手, 下手。
3050 おとなしい	<ul style="list-style-type: none"> 静か。 目立たない。 地味。 自己顕示欲がない。 我が強くない。
3060 内弁慶	[例示なし。]
3070 根暗	<ul style="list-style-type: none"> 暗い。 陰気。 ※明るいようで実は根暗。
3080 好奇心旺盛	<ul style="list-style-type: none"> 詮索好き。 野次馬。 何事にも関心を持つ。 気が多い。 好奇心が強い。 冒険心旺盛。
3090 感受性豊か	<ul style="list-style-type: none"> 情緒的。 ※感動しやすい。
3100 感覚的	<ul style="list-style-type: none"> 直感的。 ※好き嫌いを第一印象で決めてしまう。

3110 個性的	<ul style="list-style-type: none"> 個性がある。 ユニーク。 自己流。 ※奇抜。 ※人の真似が嫌い。
3120 エッチ	<ul style="list-style-type: none"> 好色家。 ※女に飢えている。
3130 ほれっぽい	※すぐに人に憧れる。
3140 気が強い	<ul style="list-style-type: none"> きつい。 ※心の中ではきついことを考えている。
3150 強引	[例示なし。]
3160 好戦的 攻撃的	<ul style="list-style-type: none"> 競争心が強い。 気が荒い。 運転が荒い。 ※けんかずき。 ※争い事が好き。 ※小さいときは暴れん坊だった。 ※戦争映画などを観ると血がさわぐ。
3170 意地悪	<ul style="list-style-type: none"> 陰険。 あげあしとり。 他人を傷つけてしまう。 ※気だてが悪い。 ※根性が悪い。
3180 口が悪い	<ul style="list-style-type: none"> きついことを口にする。 ※皮肉屋。 ※辛らつなことを言う。
3190 ずるい	<ul style="list-style-type: none"> 策謀家。 卑怯。 悪知恵が働く。 ※小賢しい。
3200 要領が良い	<ul style="list-style-type: none"> 世渡りがうまい。 調子が良い。 計算高い。 打算的。 ※取り繕うのがうまい。 ※八方美人。 ※外ヅラが良い。 ※人に取り入るのがうまい。 ※日和見主義。 ※手早く物事を運ぶ。

3210 要領が悪い	<ul style="list-style-type: none"> ・世渡りが下手。 ・いい面はあるが発揮できない。 <p>※生きるのが下手。 ※物事の運びが悪い。 ※時間配分が悪い。</p>
3220 素直	<ul style="list-style-type: none"> ・従順。 ・素朴。 ・純粋。
3230 あまのじゃく	<ul style="list-style-type: none"> ・素直でない。 ・ひねくれもの。 ・反発心が強い。 <p>※人と同じことをするのが嫌い。 ※一度は反対しないと気がすまない。</p>
3240 うそつき ほらぶき	<ul style="list-style-type: none"> ・虚言癖がある。 <p>※人をだますのが好き。</p>
3250 嘘が下手	<ul style="list-style-type: none"> ・嘘をつくのが下手。 ・嘘をついてもすぐばれる。 ・お世辞が言えない。 <p>※人をだませない。</p>
3260 頼りがいが ある	<ul style="list-style-type: none"> ・人から頼りにされる。 ・相談役・調整役になる。 ・包容力がある。 <p>※人望が厚い。 ※人々の尊敬的。</p>
3270 頼りがいが ない	<ul style="list-style-type: none"> ・包容力がない。
3280 しっかりして いる	[例示なし。]
3290 しっかりして いない	[例示なし。]
3300 情緒が安定 している	<ul style="list-style-type: none"> ・精神的に大人。 ・落ち着いている。 <p>※老成している。 ※感情に変化が少ない。 ※あまり若者らしくないところがある。</p>
3310 主体性がある	<ul style="list-style-type: none"> ・自立心がある。 ・自分をちゃんと持っている。 ・自分で行動している。 <p>※他人をひき合いに出したりはしない。</p>

3320 好き嫌いが ない	※私は余人を選び好みしません。
3330 地道でない	<ul style="list-style-type: none"> ・一夜漬け型。 ・努力家ではありません。 <p>※一発屋。</p>
3340 忘れっぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れものばかりしている。 <p>※健忘症気味。</p>
3350 けち	<ul style="list-style-type: none"> ※セコい。 ※守銭奴。 <p>※なかなか物を捨てたがらない。</p>
3360 欲張り 欲深い	[例示なし。]
3370 欲がない	<ul style="list-style-type: none"> ・野心がない。 ・物欲がない。 <p>※無私無欲。</p>
3380 気前がいい	<ul style="list-style-type: none"> ・けちではない。 ・人におごるのが好き。
3400 気が利く	<ul style="list-style-type: none"> ・よく気が付く。
3410 責任感がある	<ul style="list-style-type: none"> ・義務を果たす。 <p>※役割意識が強い。 ※人に迷惑をかけるのが嫌い。 ※自分の失敗を人のせいにしたくない。</p>
3420 責任感がない	<ul style="list-style-type: none"> ・いい加減。 ・投げやり。 ・ルーズ。 ・だらしない。 ・言行不一致 ・中途半端。 <p>※時間にルーズ。</p>
3430 積極的	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲が高い。
3440 消極的 (積極性に 欠ける)	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲がない。 ・謙虚。 ・控え目。 ・好奇心がない。
3450 適応性がある	<ul style="list-style-type: none"> ・順応性がある。
3460 適応性がない	<ul style="list-style-type: none"> ・順応性がない。 <p>※新しい環境に入ると、何もできなくなる。</p>

3480 通俗の性格 分類	<ul style="list-style-type: none"> ・典型的な～型の性格。 ・典型的な長女タイプの性格。
3490 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・自由奔放。 ・ふざけている。 <p>※性格がとんでもない。 ※性格を一口に言うと「変な奴」。</p>

4. 自己

小項目番号 小項目名	例 示
4010 成長欲求	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を成長させたい。 ・明日に向かって生きている。 ・アイデンティティを確立させていきたい。 ・世界中のことが知りたい。 ・目標に向かって努力する。 <p>※常に向上して生きたい。</p>
4020 成就欲求	<ul style="list-style-type: none"> ・社会に役立ちたい。 ・偉大な画家になりたい。 ・野心がある。 ・仕事で成功したい。 ・神の真理をみつけない。 ・自分について人間についてもっと知りたい。 <p>※卒業生代表を目指している。</p>
4030 自分を変え たい	<ul style="list-style-type: none"> ・性格を変えたい。 ・～な人間に成りたい。 ・機転が利く人間になりたい。
4040 逃避したい	<ul style="list-style-type: none"> ・蒸発したい。 ・消えたい。 ・家出したい。 ・大人になりたくない。 ・できるなら逃避したい。 <p>※どこか遠くへ行ってしまうたい。 ※すべてを忘れてしまいたい。 ※社会人になりたくない。</p>
4050 非現実的願望	<ul style="list-style-type: none"> ・翼が欲しい。 ・猫になりたい。 <p>※超能力があったらなあ。</p>
4060 能力に対する 願望	<ul style="list-style-type: none"> ・歌がうまくなりたい。
4070 健康・体質に 対する願望	<ul style="list-style-type: none"> ・健康になりたい。 ・体力が欲しい。 <p>※病気になるのが怖い。</p>

4080 容姿・体格に 対する願望	<ul style="list-style-type: none"> ・やせたい。 ・きれいになりたい。 ・もう少し身軽になりたい。 <p>※太りたくない。</p>
4090 進学への希望	<ul style="list-style-type: none"> ・進学したい。 ・～大学に入りたい。 <p>※進学する気はない。</p>
4100 就職への希望	<ul style="list-style-type: none"> ・～という職業に就きたい。 ・～という職業に就きたくない。 <p>※大きくなったら看護婦さんになりたい。 ※どんなに金に困っても水商売はしたくない。</p>
4110 結婚への希望	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚したい。 ・結婚生活に憧れる。 ・～さんと結婚したい。
4120 老後への希望	<ul style="list-style-type: none"> ・長寿でありたい。 ・老後はのんびり暮らしたい。 <p>※年をとっても老けたくない。 ※年をとったら孫の世話をして暮らしたい。 ※定年後は～したい。</p>
4130 その他の将来 への希望	<ul style="list-style-type: none"> ・将来は外国で暮らしたい。
4140 将来の予測	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の希望はまだない。 ・10年後は母親になっているだろう。 <p>※未来への明確なビジョンはまだない。 ※将来のことを考えて行動している。</p>
4150 今の精神状態	<ul style="list-style-type: none"> ・精神状態が良い(悪い)。 ・気分良好。 ・気分が安定している。 ・悩んでいる。 ・落ち込んでいる。 ・反省している。 ・後悔している。 ・昨日のテストの成績が悪かった。 <p>※かったるい。 ※いま、とても眠い。</p>
4160 年はとりたく ない	<ul style="list-style-type: none"> ※最近誕生日がきても嬉しくない。
4170 老いを感じる	<ul style="list-style-type: none"> ※近ごろめっきり白髪が増えた。 ※鏡を見るたび、年を感じる。

4180 現在の欲求・希望	<ul style="list-style-type: none"> ・ワープロを買いたい。 ・テニスがしたい。 ・(～がしたい・欲しい。) ※お金が欲しいなあ。
4190 生活習慣 (生活態度)	<ul style="list-style-type: none"> ・起床、就寝、癖、食習慣。 ・通勤、通学、無趣味。 ・電話をよくする、しない。 ・字が丸い。 ・タバコを吸う、吸わない。 ・ピアノを習っている。 ・いつも眠い。 ・鍵っ子。 ※掃除、洗濯に明け暮れています。 ※朝起きてまず植木に水をやるのが日課です。
4200 生活状態	<ul style="list-style-type: none"> ・予定、忙しい、暇。 ・犬を飼っていない。 ・経済的に自立している。 ・アルバイト。 ・田舎者。 ・自由に生きる人。 ・独身貴族・共働き。 ・最近テニスをやっていない。 ・すねかじり。 ・年金暮し。 ・～に行ったことがある。 ※その日暮し。
4210 ニックネーム	<ul style="list-style-type: none"> ・私は人から「チャコ」と呼ばれています。
4220 自己評価と 他者評価の 食い違い	<ul style="list-style-type: none"> ・人から誤解されやすい。 ・他人に本当より良く思われている。
4230 自分は幸せだ	<ul style="list-style-type: none"> ※人間に生まれてよかった。 ※日本人でよかった。 ※毎日が楽しい。
4240 自分は不幸だ	<ul style="list-style-type: none"> ・生きているのは辛い。 ※なぜこんな時代に生まれたのだろう。
4250 自分に満足している	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の性格に満足。 ・自分の性格が好き。 ・長所がある。 ・自分の生き方に満足している。 ※私が私であることは、本当に良かったと思う。

4260 自分に不満	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が嫌い。 ・自分の性格に不満。 ・自分の性格が嫌い。 ・短所がある。 ・自分の生き方に不満がある。 ※私は自己嫌悪の塊です。 ※私は欠点だらけです。
4270 自分に自信がある	<ul style="list-style-type: none"> ・可能性のある人。 ・絶対大きくなる人。 ・21世紀を背負う人。 ※常に自分だけを信じて生きてきた。
4280 自分に自信がない	<ul style="list-style-type: none"> ・劣等感がある。 ・自分はまだ未熟。
4290 自分に素直	[例示なし。]
4300 自分に素直でない	[例示なし。]
4310 経済観念がある	<ul style="list-style-type: none"> ・節約的。 ※やりくり上手。 ※貯金がうまい。
4320 経済観念がない	<ul style="list-style-type: none"> ・浪費的。 ・衝動買いをしてしまう。 ※やりくりが下手。 ※いつも赤字を出している。
4330 変化を好む	<ul style="list-style-type: none"> ・革新的。 ・新しいもの好き。 ※常に流行の先端を行っている。 ※メリハリのある、山あり谷ありの人生が理想。
4340 変化を好まない	<ul style="list-style-type: none"> ・保守的。 ※流行を追うのが嫌い。
4350 もてる	※チョコレート屋さん喜ばせ屋。
4360 もてない	※ナンバされたことの一度もない、悲しい女です。
4370 硬派・軟派	<ul style="list-style-type: none"> ・硬派・軟派。 ・ミーハー。 ・質実剛健。 ※人気のあるものには、すぐとびつく。 ※私は、はっきり言って“チャライ”。

4380 ～らしい (性役割)	・女らしい。 ・男っぽい。
4390 ～らしくない (性役割)	・男まさり。
4400 話題が豊富	※人と話していてもネタのつきたことがない。
4410 話題が少ない	※人といるとすぐ話題につまってしまう。
4420 合理主義	※常に能率の良さを考えて行動する。
4430 現実主義	[例示なし。]
4440 理想主義者 理想家	※妥協はしたくない。 ※いつも理想にむかってー!
4450 正義派	・フェア。 ・公正。 ・スポーツマンシップ。 ・陰口をきかない。 ・かげひなたがない。 ・お世辞が嫌い。 ・嘘が嫌い。 ・正直者。 ・曲がったことは嫌い。 ※私は愛想笑いをしたくありません。
4460 形式主義 建前主義	[例示なし。]
4470 個人主義	※個人主義で考えるので、時々世間がうっとろしくなる。
4480 常識がある	・常識家。 ・突飛な行動が取れない。 ・礼儀を知っている。 ・馬鹿になりきれない。 ※分別臭い。 ※冒険できない。
4481 常識がない	・常識のない行動を取るときがある。 ・突飛な行動を取るときがある。
4482 一般常識・ 教養がある	・知識がある。 ・博識。 ・物知り。 ※雑学博士と言われる。

4483 一般常識・ 教養がない	※無知。 ※無学。
4490 平凡	・平凡。 ・平凡な生活。 ・人畜無害。 ・常人。 ※無難な人間。 ※可もなく不可もない。 ※その他大勢。 ※何の才能にも恵まれていない。
4500 バランスが 大事	・中庸。 ※バランスを常に考える。
4510 態度がハッキ リしている	・思ったことをまっすぐに言う。 ・物事をはっきりさせる。 ・白黒をはっきりさせる。 ・けじめがある。 ※歯に衣着せない。 ※曖昧を好まない。 ※頭が二進法。 ※どっちつかずにイライラする。
4520 批判的 (批判癖)	※人をすぐにとがめてしまう。
4530 道徳重視	・モラリスト。 ・モラルを大切にする。
4540 古風	※骨董品など、懐古的味わいのあるものに心を魅かれる。
4550 マイペース	・独立自尊。 ※いつも私は「それなり」です。
4560 義理堅い 律儀	・義理人情に厚い。 ※仁義を重んじる。
4570 粗衣・粗食に 耐えられる	※質素に暮らせる。 ※貧しくても生きていける。
4580 心がけ	・余暇は有意義に過ごすべきだ。 ・物事に拘りを置かないようにしている。 ・毎日が充実するように生きる。 ・一日を大切にしたい。 ※ものを大切にする。 ※自分には厳しくしている。

4590 身だしなみ・ おしゃれに 関する心が け	<ul style="list-style-type: none"> ・格好は気にしない。 ・髪をのぼそうと思う。 ・身だしなみを気にする。 ・ファッションに興味がある。 <p>※パーマをかけたい。</p>
4600 健康に関する 心がけ	<ul style="list-style-type: none"> ・健康を気にする。 <p>※健康のためジョギングしている。</p>
4710 政治	<ul style="list-style-type: none"> ・政治に関心がある。 ・支持政党。 ・政治家の～さんが好き、嫌い。 ・世の中すべて力。
4720 経済	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日必ず経済新聞を読む。 ・株に興味がある。 ・経済摩擦が気になる。 ・世の中すべて金。 ・実業家志向。 ・自分に十分な金と暇があったら事業を始める。
4730 審美	<ul style="list-style-type: none"> ・絵をかくのが好き。 ・音楽が好き。 ・美しいものに憧れる。 ・星を見るのが好き。 ・茶道、華道、書道、園芸。 ・楽器を演奏するのが好き。 <p>※一日中書道をしていてあきない。</p>
4740 宗教	<ul style="list-style-type: none"> ・信仰は重んずるべきだ。 ・キリスト教の信者である。 ・わが家は浄土真宗である。 <p>※～教を信じない。</p>
4750 理論	<ul style="list-style-type: none"> ・真理を追求する。 ・理論家。 ・議論好き。
4760 社会	<ul style="list-style-type: none"> ・社会問題に興味がある。 ・愛国心がある。 ・人間が好き。 ・犠牲的精神が強い。 ・教育に関心がある。 ・社会の役に立ちたい。 <p>※日本人はもっと自分達にふさわしいものを見つめ大切にしていくべきだ。</p>

4770 飲食	<ul style="list-style-type: none"> ・辛いものが好き。 ・甘党。 ・食べるのが好き。 ・酒好き。 ・食べ物の好き嫌いはほとんどない。 ・タバコが好き。
4780 スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> ・運動をするのが好き。 ・好きなスポーツ。 <p>※ハンググライダーは雄大で気分がよい。</p> <p>※ダンスが好き。</p>
4790 旅行	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行するのが好き。 ・旅行するためには何でもする。
4800 ギャンブル	<ul style="list-style-type: none"> ・賭事が好き、嫌い。 ・麻雀はつきあい程度。
4810 その他の趣味	<ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータ、ドライブ、料理、映画。 ・将棋、文筆活動、～収集。 ・手芸、洋裁、読書（内容による）。 ・オーディオが好き。 ・私はよく本を読みます。 ・カラオケ。 <p>※(家事)が趣味。</p>
4820 好き	<ul style="list-style-type: none"> ・赤より白が好き。 ・山が好き。 ・ファン。 ・子供が好き。 ・外人が好き。 ・人混みが嫌い。 ・自然が好き。 <p>※(家事)が好き。</p>
4830 好きな異性・ 嫌いな異性 のタイプ	<ul style="list-style-type: none"> ・タバコを吸う人とはつき合いたくない。
4840 好きな人・ 嫌いな人の タイプ	<ul style="list-style-type: none"> ・京都・東京の人が好き。 ・都会の人・田舎者が好き。 ・貧乏ゆすりをする人は嫌い。
4850 勉強	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強が好き。 ・文系が嫌い。 ・(勉強をよくする、しない)。 ・哲学が好き。 ・テストが嫌い。

4910 生命に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・死は美しい。 ・死を受け入れる。 ・死は突然やってくる。 ・生きるとは素晴らしい。 ・死ぬのも運命です。
4920 運命(運)に 関する記述	<ul style="list-style-type: none"> ・運命を信じる。 ・運がいい。 ・占いを信じる。
4930 神に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・神は存在する。
4940 超自然に関 する記述	<ul style="list-style-type: none"> ・時の流れはとめられない。 ・四次元の世界はあると思う。
4950 その他の超越 者に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・自然は偉大。 ・地震が怖い。
4951 私は私	[例示なし。]
4952 私は誰	<ul style="list-style-type: none"> ・私はなんだろう。 ・私はどうなるのだろう。 ・(私は) わからない。 ・どこからきてどこに行くのだろう。 ・何のために生きているのだろう。
4953 実存的記述	<ul style="list-style-type: none"> ・生きている。 ・存在する個体。 ・唯一の個体。 ※(私一人しかいない。)
4954 上位概念 機能部分	<ul style="list-style-type: none"> ・宇宙人, 地球人。 ・生物, 人間。 ・手が2本, 足が2本。
4955 自己規定	<ul style="list-style-type: none"> ・私は花, 私は象。 ・私は貴公子。 ・はずれ者。 ・変わり者。 ・善人, 悪人。 ・アホ, バカ, 天才。
4956 過去志向	<ul style="list-style-type: none"> ・よく昔の思い出にふける。 ・過去を省みることが多い。
4959 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の中でしっかりした考えを持 っている。 ・水平思考。 ・垂直思考。 ・他人にも自分にも厳しい。 ・変な奴とよく言われる。 ・日記を書いていると心が落ち着く。

5. 性格(力動)

小項目番号 小項目名	例 示
5010 見栄張り	<ul style="list-style-type: none"> ・他人に良く見せようとする。 ・ええカッコしい。 ・虚栄心が強い。 ・人にかっこいいところを見せたがる。
5020 自信過剰	<ul style="list-style-type: none"> ・自惚れ屋。 ・自信をもちすぎる。
5030 プライドが 高い	<ul style="list-style-type: none"> ・自信家。 ・自尊心が強い。 ・高慢。 ・人を見下す。 ・人をばかにする。
5040 負けず嫌い	<ul style="list-style-type: none"> ・勝気。 ・くやしがり屋。 ・人と張り合いたがる。
5050 意地っぱり	<ul style="list-style-type: none"> ・強がり。 ・すぐ意固地になるのは欠点。
5060 生意気	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいげがない。
5070 自己顕示欲が 強い	<ul style="list-style-type: none"> ・自己主張が強い。 ・自分の考え方を押し付ける。 ・我が強い。 ・目だちたがり屋。 ・派手好き。 ・決まりきったことでは満足しない 人間です。
5080 野心的	<ul style="list-style-type: none"> ・向上心がある。
5090 高望み	<ul style="list-style-type: none"> ・理想が高い。 ・理想をもっている。
5110 子供っぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・無邪気。 ・気が若い。 ・考えが幼稚です。
5120 甘えんぼう	<ul style="list-style-type: none"> ・家にいると親に甘えてしまって何 もしない。
5130 世間知らず	<ul style="list-style-type: none"> ・考えが甘い。

5140 主体性がない	<ul style="list-style-type: none"> ・依存心が強い。 ・依頼心が強い。 ・他人志向。 ・すぐ相談する。 ・自立心がない。 ・付和雷同。 ・自主性がない。 ・多数派。 ・人に左右されやすい。 ・すぐ人にまかせてしまう。
5150 被暗示性	<ul style="list-style-type: none"> ・感情移入しやすい。 ・自己暗示にかかりやすい。
5160 ロマンチスト	<ul style="list-style-type: none"> ・ムード派。 ・夢多き人。 ・感傷的。 ・空想家。 ・夢想家。 ・夢見る少女。
5170 気分屋	<ul style="list-style-type: none"> ・気分に波がある。 ・(泣いた鳥がもう笑った。) ・落ち込みが激しく、立ち直りが早い。
5180 好き嫌いが 激しい	<ul style="list-style-type: none"> ※人の好みははっきりしている。 ※好きな人とはとことんつきあうが、嫌いな人とはそうではない。
5210 自分勝手	<ul style="list-style-type: none"> ・自己中心的。 ・傍若無人。 ・独断的。 ・利己主義。 ・思いやりにない。 ・わがまま。 ・身勝手。
5220 自制心がない	<ul style="list-style-type: none"> ・衝動的。 ・克己心がない。
5230 感情が激しい	<ul style="list-style-type: none"> ・感情的。 ・情感を抑えられない。 ・情緒不安定。 ・うれしがり屋。 ・泣き虫。
5240 やきもちやき	<ul style="list-style-type: none"> ・妬み深い。 ※うらやましがり屋。
5310 神経質	<ul style="list-style-type: none"> ・神経が細かい。

5320 くよくよ悩む	<ul style="list-style-type: none"> ・考えすぎ。 ・すぐ気に悩む。 ・悩みが多い。 ・内省的。 ・後悔ばかりしている。 ・ノイローゼ気味。 ・物事を気にする。
5330 心配性	<ul style="list-style-type: none"> ・不安を感じやすい。 ※出かけるときに戸締りがあれこれ気になる。
5340 悲観的	<ul style="list-style-type: none"> ・何事も悪い方に考える傾向がある。 ※将来が暗い。
5350 物事にこだ わる	<ul style="list-style-type: none"> ・完全主義。 ・好みにうるさい。 ・物事への執着心がつよい。
5360 まわりを気に する	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の顔色を気にする。 ・世間体を気にする。 ・人の言うことや評価を気にする。 ・気を使い過ぎる。 ・精神的に疲れやすい。 ※他人と自分をよく比較することがある。
5370 気が弱い 気が小さい	<ul style="list-style-type: none"> ・精神的には弱い、もろい。 ・意気地がない。 ・押しが弱い。 ・はっきりノーと言えない。 ・人の失敗を責められない。 ・臆病。 ・小心。 ・引込み思案。 ・遠慮しがち。 ・内気。
5380 恥しがり屋	<ul style="list-style-type: none"> ・照れ屋。 ・はにかみ屋。 ・人見知り。 ・私は一見おとなしいが親しくなるとよく話す。 ・知らない人には進んで話しかけられない。
5390 あがりやすい 緊張しやすい	<ul style="list-style-type: none"> ・焦る。

5400 目立ちたく ない 派手な事は 嫌い	<ul style="list-style-type: none"> ・波風を立てるのがいや、立てたくない。 ・他人の前であまり自分をさらけ出すことをしない。 <p>※自分をあまり飾りたてない方。</p>
5410 自分の考えを ストレート に表せない	<p>※自分自身を表現することが苦手。</p>
5420 優柔不断	<p>※ぐずぐずする傾向がある。</p>
5430 根気がない 諦めが早い	<ul style="list-style-type: none"> ・粘りが無い。 ・忍耐力がない。 ・根性がない。 ・持続性がない。 ・意志薄弱。
5440 未練がましい	<p>[例示なし。]</p>
5450 ひがみっばい	<ul style="list-style-type: none"> ・いじけやすい。 ・卑屈。 ・疑い深い。 <p>※いつも自分だけが損をしている。</p>
5460 自意識が強い	<ul style="list-style-type: none"> ・ナルシスト。 <p>※自分がかわいい。</p>
5510 反動形成	<ul style="list-style-type: none"> ・から元気。 ・女らしさを意識するあまりに、男っぽくふるまってしまう。
5520 自己防衛的	<ul style="list-style-type: none"> ・逃避型。 <p>※責任転嫁しがち。</p>
5530 アンバランス	<ul style="list-style-type: none"> ・明るいけど暗い。 ・優しさと厳しさが同居。 <p>※積極的であるようでいて引っ込み思案です。</p>
5540 ～ぶる	<ul style="list-style-type: none"> ・かわい子ぶる。 ・ぶりっ子。 ・真面目ぶる。 ・偽善的、偽悪的。 <p>※私は自分を演出することができる。</p>
5550 多重人格	<ul style="list-style-type: none"> ・二重人格。 ・人格が分裂している。 <p>※私は「ジキルとハイド」のようなところがある。</p>

5560 恐怖症	<ul style="list-style-type: none"> ・強迫観念的。 ・被害妄想的。 ・高所恐怖症。 <p>※とがったものを見るとゾッとする。</p> <p>※赤面恐怖症。</p>
-------------	---

6. 身体

小項目番号 小項目名	例 示
6010 身体に関する 記述 (容姿・体格)	<ul style="list-style-type: none"> ・身長、体重。 ・やせている。 ・太っている。 ・背が低い、高い。 ・中肉中背。 ・体格が良い、悪い。 ・筋肉質。 ・年齢より若く(年取って)見られる。 ・大人っぽい。 ・手足が短い。 ・容姿に劣等感を持っている、自信がある、人並。 ・顔が大きい。 ・色黒。 <p>※父親に似ている。</p>
6020 身体に関する 記述 (健康・体質)	<ul style="list-style-type: none"> ・健康である、持病がある。 ・病気。 ・体力がある、ない、なくなってきた。 ・目(視力)が悪い、(眼鏡・コンタクト)をしている。 ・疲れやすい。 ・ひ弱、貧血。 ・血液型。 ・～体質(アレルギー体質)。 ・汗かき。 ・寒がり、暑がり。 ・利き手(左利き)。 ・入院経験。 <p>※酒を飲むと赤くなる・陽気になる。</p>

6030 身体機能 身体的能力	<ul style="list-style-type: none"> ・テニスが得意, 苦手。 ・運動神経が発達している。 ・スポーツマン。 ・器用・不器用。 ・味覚が発達している (五感に関するもの)。 ・音痴。 ・歌が下手。 ・リズム感。 ・声が大きい。 ・方向感覚。 ・運転が上手, 下手。 ・腕力がある。 ・字が上手, 下手, きれい, 汚い。 ・スポーツの選手。 ※酒に強い, 弱い。 ※少しの酒で酔っばらう。
-----------------------	--

7. プライマリー・グループ

小項目番号 小項目名	例 示
7010 血縁的役割	<ul style="list-style-type: none"> ・夫, 母, 嫁, ~の子供。 ・妊婦 (もうすぐ母親になる)。 ・一人っ子, 兄。 ・~人兄弟の~番目。 ・~家の子供。 ・~家の一人。 ※親父である。 ※旦那の奥さん。
7020 両親に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・両親とうまくいっている。 ・親孝行。 ・親を大切にしない。 ・両親健在。
7030 父親に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・父親が好き。 ・父親とうまくいっていない。 ・父親がいない。
7040 母親に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・母親を尊敬している。 ・母親と仲が悪い。
7050 兄弟に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・弟思い。 ・兄弟のことがたまに気になる。 ・兄弟と仲が悪い。 ・~人兄弟。
7060 配偶者に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・良妻賢母の妻がいる。 ・夫とうまくいっていない。 ・夫と死別。

7070 子供に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・子煩悩。 ・父親らしい。 ・自分の子供が嫌い。 ・子供が一人いる。 ・子供に厳しい。
7080 祖父母に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃん子。 ・祖父と仲が悪い。 ・祖父母は健在。
7090 孫に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・孫が可愛い。 ・孫はうるさい。 ・孫は元気だ。
7100 その他の親族 に関する 記述 (義理の両親 も含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・叔父 (叔母・姪・従兄弟) が好き。 ・姑とうまくいっていない。 ・あまり親戚付き合いはしていない。
7110 家族・家庭に 関する記述	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭は安らぎの場。 ・家族に冷たい。 ・~人家族。
7120 家系・階級	<ul style="list-style-type: none"> ・~家の子孫。 ・上流階級。

8. セカンダリー・グループ

小項目番号 小項目名	例 示
8010 名前	・氏名, 姓, 名。
8020 性別	<ul style="list-style-type: none"> ・男, 女。 ※男でない。
8030 人種	<ul style="list-style-type: none"> ・東洋人。 ・アングロサクソン人。
8040 国籍	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人。 ・国籍はアメリカ。
8050 出身地	<ul style="list-style-type: none"> ・~出身。 ・江戸っ子, 浜っ子。 ・本籍は~。 ・~で生まれた。
8060 住所	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都民。 ・杉並区に住んでいる。
8070 年齢	・~才。
8080 生年月日	<ul style="list-style-type: none"> ・~年~月~日生まれ。 ・~座 (星座)。

8090 世代Ⅰ (年齢)	<ul style="list-style-type: none"> ・未成年，中年。 ・三十代。 ・思春期。 ・大人と子供の間。 ・適齢期。 <p>※選挙権を持っている。 ※青春真っ盛り。</p>
8100 世代Ⅱ (いつ生まれたか)	<ul style="list-style-type: none"> ・戦前派，戦後派。 ・犬年生まれ。 ・昭和一桁。
8110 資格・免許がある	<ul style="list-style-type: none"> ・運転免許を持っている。 ・英検1級を持っている。 <p>※剣道5段。 ※書道3段。</p>
8120 資格・免許がない	<ul style="list-style-type: none"> ・運転免許を持っていない。 <p>※英検1級に落ちた。</p>
8130 世帯主	<ul style="list-style-type: none"> ・当主。 ・扶養家族を持っている。
8140 生活形態	<ul style="list-style-type: none"> ・アパート暮らし。 ・寮生，下宿生。 ・下町育ち。 ・山の上に住んでいる。 ・～と暮らしている。 ・独身，新婚，離婚。 ・一人暮らし。 ・未・既婚，再婚。 ・金婚式。 ・別居中。 ・単身赴任。 ・未亡人。 ・保護者，被保護者。 ・結婚～年。
8150 所属団体 (ゼミ)	<ul style="list-style-type: none"> ・～ゼミに入っている。 <p>※榎田ゼミのOBである。</p>
8160 所属団体 (学内サークル)	<ul style="list-style-type: none"> ・児童文化研究会に入っている。 ・クラブに青春をかけている。 <p>※～サークルの幽霊部員です。 ※学生時代ラグビーをしていた。</p>
8170 所属団体 (職場サークル)	<ul style="list-style-type: none"> ・会社でサークルに入っている。

8180 所属団体 (その他)	<ul style="list-style-type: none"> ・町内会の役員です。 ・町内会長です。 ・創価学会に入っている。
8190 所属団体 (無所属)	<ul style="list-style-type: none"> ・どのサークルにも属していない。
8200 学校に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・学校が好き。 ・学校へ行きたくない。 ・先生が嫌い。 ・学校名，学生，学年，学部，学籍番号。 ・浪人，受験生。 ・大学に行って良かったと思っている。 <p>※高校生活は面白かった。</p>
8210 学歴	<ul style="list-style-type: none"> ・学歴。 ・出身校。
8220 職場・職業に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・上司(職場の仲間)とうまく行っている。 ・仕事に不熱心。 ・上司に恵まれていない。 ・会社名，会社員，社会人。 ・職種，仕事内容，部署。 ・地位，無職，主婦。 ・東電学園。 ・仕事が忙しい。 <p>※サラリーマンに向いていなかった。</p>
8230 職歴	<ul style="list-style-type: none"> ・職歴。 ・勤続年数。
8240 収入	<ul style="list-style-type: none"> ・年収，月収，収入が多い・少ない。 ・年金を～円もらっている。
8250 友人に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・友人を大切にしている。 ・友人が多い・少ない。 ・～君と友達。
8260 恋人・恋愛に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・恋人がいる。 ・片思い中。 ・～さんは私の恋人です。
8270 故郷に関する 記述	<ul style="list-style-type: none"> ・故郷が懐かしい。 ・故郷に帰りたい・帰りたくない。 ・故郷が嫌い。 ・故郷は遠きにありて思うもの。 <p>※郷土愛が強い。</p>

8280 人間関係に 関する記述	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間意識が強い。 ・人間関係に疲れている。 ・顔が広い。 ・今時の若い衆には幻滅させられる。 ・～の後輩です。
------------------------	--

9. その他

小項目番号 小項目名	例 示
9060 その他	<ul style="list-style-type: none"> ・このテストはおもしろい。 ・このテストはくだらない。
9070 無回答	

索引

- あ**
- 明るい……………2050
 あがりやすい……………5390
 飽きっぽい……………2210
 諦めが早い……………5430
 頭が良い……………1010
 頭が悪い……………1020
 甘えんぼう……………5120
 あまのじゃく……………3230
 アンビバレンス……………5530
- い**
- 意地っぱり……………5050
 一途……………2500
 意地悪……………3170
 一般常識・教養がある……………4482
 一般常識・教養がない……………4483
 一般的能力がある……………1070
 一般的能力がない……………1080
 今の精神状態……………4150
 飲食……………4770
- う**
- 嘘が下手……………3250
 うそつき……………3240
 内弁慶……………3060
 運命（運）に関する記述……………4920
- え**
- エッチ……………3120
- お**
- 老いを感じる……………4170
 おおざっぱ……………2260
 おしゃべり……………2070
 おしゃれに関する心がけ……………4590
 おちょこちょい……………2180
 おとなしい……………3050
 お人好し……………2160
 思いやりがある……………2130
 温和……………2120
- か**
- 階級……………7120
 外向的……………2020
- 開放的……………2030
 学歴……………8210
 家系……………7120
 過去志向……………4956
 家族に関する記述……………7110
 学校に関する記述……………8200
 活発……………2230
 家庭に関する記述……………7110
 神に関する記述……………4930
 感覚的……………3100
 頑固……………2480
 感受性豊か……………3090
 感情が激しい……………5230
 感情を表さない……………2760
 寛容……………2100
- き**
- 気が利かない……………2810
 気が利く……………3400
 気が小さい……………5370
 気が強い……………3140
 気が長い……………2610
 気が弱い……………5370
 聞き役にまわる……………2880
 気さく……………2040
 几張面……………2540
 機能部分……………4954
 気分転換がうまい……………2290
 気分屋……………5170
 気前がいい……………3380
 兄弟に関する記述……………7050
 協調性がある……………2090
 恐怖症……………5560
 嫌いな異性のタイプ……………4830
 嫌いな人のタイプ……………4840
 きれい好き……………2570
 緊張しやすい……………5390
 勤勉……………2520
 ギャンブル……………4800
 義理堅い・律儀……………4560
- く**
- 口数が少ない……………2890
 口が堅い……………2820
 口が悪い……………3180
 口下手……………3040

くよくよ悩む……………5320

け

経済……………4720
 経済観念がある……………4310
 経済観念がない……………4320
 形式主義……………4460
 軽率……………2180
 けち……………3350
 結婚への希望……………4110
 血縁的役割……………7010
 健康に関する心がけ……………4600
 健康に対する顔望……………4070
 現在の欲求・希望……………4180
 現実主義……………4430

こ

恋人に関する記述……………8260
 強引……………3150
 好奇心旺盛……………3080
 攻撃的……………3160
 好戦的……………3160
 強情……………2480
 行動的……………2240
 硬派……………4370
 後半追い込み型……………2600
 合理主義……………4420
 故郷に関する記述……………8270
 国籍……………8040
 心がけ……………4580
 個人主義……………4470
 個性的……………3110
 孤独が好き……………2730
 子供っぽい……………5110
 子供に関する記述……………7070
 好み……………4820
 古風……………4540
 細かい事が好き……………2870
 凝り性……………2500
 根気がある……………2470
 根気がない……………5430

さ

寂しがり屋……………2170
 冷めている……………2850
 騒がしい……………2060

し

資格がある……………8110

資格がない……………8120
 自意識が強い……………5460
 思考的……………2900
 自己規定……………4955
 自己顯示欲が強い……………5070
 自己評価と他者評価の食い違い……………4220
 自己防衛的……………5520
 自信過剰……………5020
 自制心が強い……………2420
 自制心がない……………5220
 実存的記述……………4953
 自分勝手……………5210
 自分に自信がある……………4270
 自分に自信がない……………4280
 自分に素直……………4290
 自分に素直でない……………4300
 自分に不満……………4260
 自分に満足している……………4250
 自分の考えをストレートに表せない……………5410
 自分は幸せだ……………4230
 自分は不幸だ……………4240
 自分を変えたい……………4030
 しっかりしていない……………3290
 しっかりしている……………3280
 しつこい……………2490
 社会……………4760
 宗教……………4740
 住所……………8060
 就職への希望……………4100
 執着心がない……………2770
 収入……………8240
 執念深い……………2490
 主体性がある……………3310
 主体性がない……………5140
 出身地……………8050
 上位概念……………4954
 消極的……………3440
 常識がある……………4480
 常識がない……………4481
 成就欲求……………4020
 情緒が安定している……………3300
 情にもろい……………2150
 将来の予測……………4140
 職業に関する記述……………8220
 職場に関する記述……………8220
 職歴……………8230
 所属団体(学内サークル)……………8160
 所属団体(職場サークル)……………8170
 所属団体(ゼミ)……………8150

所属団体(その他).....	8180
所属団体(無所属).....	8190
進学への希望.....	4090
神経質.....	5310
人種.....	8030
身体機能.....	6030
身体的能力.....	6030
身体に関する記述(健康・体質).....	6020
身体に関する記述(容姿・体格).....	6010
慎重.....	2580
心配性.....	5330
審美.....	4730

す

図々しい.....	2460
好き嫌いが無い.....	3320
好き嫌いが激しい.....	5180
好きな異性のタイプ.....	4830
好きな人のタイプ.....	4840
素直.....	3220
図太い.....	2460
スポーツ.....	4780
ずるい.....	3190

せ

生活形態.....	8140
生活習慣(生活態度).....	4190
生活状態.....	4200
正義派.....	4450
精神的に強い.....	2430
政治.....	4710
成長欲求.....	4010
生年月日.....	8080
性別.....	8020
生命に関する記述.....	4910
責任感がある.....	3410
責任感がない.....	3420
世間知らず.....	5130
世帯主.....	8130
世代Ⅰ(年齢).....	8090
世代Ⅱ(いつ生まれたか).....	8100
せっかち.....	2220
積極性に欠ける.....	3440
積極的.....	3430
世話好き.....	2140
繊細.....	2860
専門的能力がある.....	1030
専門的能力がない.....	1040

そ

粗衣・粗食に耐えられる.....	4570
そう鬱.....	2300
そそっかしい.....	2180
その他(性格).....	3490
その他(自己).....	4559
その他.....	9060
その他の将来への希望.....	4130
その他の趣味.....	4810
その他の親族に関する記述(義理の両親も含む).....	7100
その他の超越者に関する記述.....	4950
粗父母に関する記述.....	7080

た

体格に対する顔望.....	4080
体質に対する顔望.....	4070
对人的能力がある.....	1050
对人的能力がない.....	1060
大胆.....	2440
態度がハッキリしている.....	4510
高望み.....	5090
多重人格.....	5550
建前主義.....	4460
頼りがいがある.....	3260
頼りがいがない.....	3270
短気である.....	3010
短気ではない.....	3020

ち

小さな事を気にかけない.....	2250
父親に関する記述.....	7030
地道でない.....	3330
超自然に関する記述.....	4940
調子にのりやすい.....	2220

つ

通俗的性格分類.....	3480
冷たい.....	2850

て

適応性がある.....	3450
適応性がない.....	3460

と

逃避したい.....	4040
年はとりたくない.....	4160
同情しやすい.....	2150
同調的.....	2090

道徳重視	4530
度胸がある	2440
ドジ	2180
努力家	2510
鈍感	2450

な

内向的	2720
生意気	5060
名前	8010
怠け者	2790
軟派	4370

に

にぎやか	2060
ニックネーム	4210
人間関係に関する記述	8280
忍耐強い	2470
忍耐がある	2470

ね

根暗	3070
年齢	8070

の

能力に対する願望	4060
のろい	2590
のんき	2280

は

配偶者に関する記述	7060
恥しがり屋	5380
派手な事は嫌い	5400
話し上手	3030
母親に関する記述	7040
バランスが大事	4500
反動形成	5510

ひ

被暗示性	5150
悲観的	5340
ひがみっぼい	5450
非現実的願望	4050
非行動的	2800
人が良い	2160
批判的(批判癖)	4520
敏感	2860

ふ

無愛想	2750
～ぶる	5540
プライドが高い	5030

へ

平凡	4490
変化を好まない	4340
変化を好む	4330
勉強	4850

ほ

ほらふき	3240
ほれっぼい	3130

ま

マイペース	4550
負けず嫌い	5040
孫に関する記述	7090
まじめ	2530
まめ	2550
まわりを気にしない	2470
まわりを気にする	5360

み

見栄張り	5010
身だしなみに関する心がけ	4590
未練がましい	5440

む

無回答	9070
無神経	2450

め

明朗	2050
目立ちたくない	5400
免許がある	8110
免許がない	8120
面倒くさがり屋	2790

も

もてない	4360
もてる	4350
物事に関して無感動	2780
物事にこだわらない	2250
物事にこだわる	5350

や

やきもちやき	5240
約束を守る	5260
優しい	2130
野心的	5080

ゆ

ユーモアがある	2080
優柔不断	5420
友人に関する記述	8250
融通がきく	2110

よ

陽気	2050
容姿に対する願望	4080
要領が良い	3200
要領が悪い	3210
欲がない	3370
欲張り	3360
欲深い	3360

ら

楽観的	2270
～らしい(性役割)	4380
～らしくない(性役割)	4390

り

理屈っぽい	2620
理想家	4440
理想主義者	4440
両親に関する記述	7020
旅行	4790
理論	4750

れ

冷静	2830
恋愛に関する記述	8260

ろ

老後への希望	4120
ロマンチスト	5160

わ

忘れっぽい	3340
私はE・その他	2410
私はS・その他	2710
私はZ・その他	2010
私は誰	4952
私は私	4951
話題が少ない	4410
話題が豊富	4400

2. 事例集

この事例集には、9才（小学校3年生）から18才（高校3年生）までの48事例を掲載した。掲載された事例には、その年齢において一般的なものと特殊例の両者が含まれるよう努めたが、適切な事例がない場合もあり、年齢・性別ごとの事例数には偏りがある。年齢・性別ごとの事例の構成は以下のようになっている。

事例1	小学校3年生	男性
事例2	小学校3年生	女性
事例3	小学校4年生	男性
事例4～5	小学校4年生	女性
事例6～7	小学校5年生	男性
事例8～9	小学校5年生	女性
事例10	小学校6年生	男性
事例11～12	小学校6年生	女性
事例13～15	中学校1年生	男性
事例16	中学校1年生	女性
事例17～18	中学校2年生	男性
事例19～21	中学校3年生	男性
事例22～24	中学校3年生	女性
事例25～28	高校1年生	男性
事例29～31	高校1年生	女性
事例32～34	高校2年生	男性
事例35～38	高校2年生	女性
事例36～44	高校3年生	男性
事例45～48	高校3年生	女性

各事例は、被験者の反応を忠実に掲載しようと極力努めた。従って、誤字・脱字等もそのまま掲載してある。各回答は、回答番号をつけて1つずつ掲載してあり、その回答に自分らしいものとして○が付けられている場合、回答番号を○で囲んである。また、1988年度版基準書での反応の評価コードを、各回答の最後の（ ）内に示してある。被験者の回答の中には、プライバシーの保護や印刷の都合からそのまま掲載できなかった部分もある。それについては以下のような変更を行なって掲載した。

- ① プライバシー保護の立場から、そのまま掲載することができない固有名詞は、《 》の中に説明を入れて省略を行なった。
- ② 被験者自身が反応内容の訂正を行っている部分は、■を用いてある。
- ③ 文字や文章が、各行の上や下から挿入されているものは、{ }の中に入れて印刷してある。
- ④ その他説明が必要なものについては、※を用いて回答の後で説明するか、あるいは、[注:]として反応の中で説明を加えた。

事例1 男性 9才0ヶ月（小学校3年生）

- 1 しんぞうをうごかして生きている。(4954)
- 2 食物をたくさんたべて 学校にいつている。(4190, 8200)
- 3 どうぶつではありません (4954)
- 4 力はふつうで かけっこもふつうです。(6030)
- 5 ふとってはいません。やせでもありません。(6010)
- ⑥ めいろを作るのが大きすぎです。(4820)
- ⑦ たんけんとかぼうけんがすきです。(4820)
- 8 工作がとともすきです。(4820)
- 9 うわばきで クロスごっこをとときどきする人間 (4200)
- 10 べんきょうがにがて。国語がとくいの人間 (1080, 1030)
- ⑩ 本をよむのがとともすきな人間 (4810)
- 12 ブランコもすき。(4820)
- 13 いろいろなめいろを作るのがとくい。(1030)
- 14 ローラースケートがだいすきな人間。(4780)
- 15 テレビをみるのがすき。(4820)
- 16 むぎ茶がすきな人間 (4770)
- 17 しけんのむずかしい学校には入いつている。(8200)
- ⑪ とくいじめられるけど ほんきだせは強い人間 (4959)
- 19 サラダが大きすぎ。(4770)
- 20 頭がふつう。(1010)

遊びのことについての反応が多いが、自分の性格についての記述は見られない。性格の反応が少ないという傾向は小学生全般に見られる。しかし、この事例は、小学校3年としてはしっかりしたものと言える。

事例2 女性 9才3ヶ月 (小学校3年生)

- 1 おちついて しずかなことをするのが あまりできない。(2180)
- ② 勉強より体育の方がとくい。(6030)
- ③ おどるのが好きでその場ですぐおどりたくなるくせがある (4820, 4190)
- 4 けんかが とくい。(3160)
- ⑤ なによりもスケートが好きです。(4780)
- 6 かけ足はとくいではないけれどもおそくもない。(6030)
- 7 勉強好きではない。(4850)
- ⑧ 毎日ドジなことをやっている。(2180)
- 9 しょうらいスケートのオリンピックでゆうしょうしたい。(4130)
- ⑩ シャベるがとっても好きです。(2070)
- ⑪ 勉強や体育など計画をたててやる。(2580)
- 12 すぐ おこりっぽくなるくせがある。(3010)
- 13 せいせきがあまりよくない。(1080)
- 14 作文の題名と文しょうの考がえるのがすき。(4820)
- 15 自由ノートに自分の好きな絵をかくのが 好き。(4820)
- ⑫ 自分が自分に「くやしいなあ。」と思うことがある。(4959)
- 17 すべり台で遊ぶのがすき。(4820)
- 18 女の子とあそぶくせがある。(4190)
- 19 学校の せい服がすきでわ ない。(8200)
- 20 どく書がすきではない。(4820)

この事例には、勉強や学校生活についての記述が多く見られる。16は、自己意識、自己態度のあらわれと見ることができる。このような反応は、小学校3年生においては稀なものである。

事例3 男性 10才0ヶ月 (小学校4年生)

- 1 人げん (4954)
- 2 《姓》です (8010)
- 3 男です (8020)
- ④ せのちいさいほうです (6010)
- 5 いまはさがみはらしにすんでいます。(8060)
- ⑥ 10才です (8070)
- ⑦ たいくのマットがすきです (4780)
- 8 ファミコンと手うちがすきです。(4820)
- ⑨ てんびんぎです (8080)
- ⑩ ■■■■ [注:「おわり」と書いてある] 4年です (8200)
- ⑪ ぼくはこわいです (3010)
- ※ 12~20は無回答 (9070)
- ※ 実際には、回答番号に○が付いておらず、反応自体が○で囲まれている。

生物学的、社会的属性と自分の興味の記述に終始しており、ひらがなの反応も多い。このような反応は、精神的分化があまり進んでいない者に多く見られる。

事例4 女性 9才11ヶ月 (小学校4年生)

- ① すぐはずかしがる。(5380)
- ② 一度大笑いをすると、すぐに止まらなくなる。(2050)
- ③ きらいな人はきらいという思いこみがはげしい。(5180)
- 4 何 度も同じことを言ってしつこいと思う。(2490)
- ⑤ すぐおこりっぽくなると思う。(3010)
- ⑥ ピーマンをたべるのがにがて。(4770)
- 7 こいみどりがきらい。(4820)
- ⑧ 大きい花より小さい花の方が好き。(4820)
- ⑨ なきまねをするのがとくい。(3190)
- ⑩ みみずが大きい。(4820)
- ⑪ ねぎをたべるのがにがて。(4770)
- ⑫ 絵をかくのが好き。(4730)
- 13 色をつかうときは、なるべく多くの色をつかう。(4200)

- ⑭ こい色よりうすい色の方が好き。(4820)
 ⑮ ちょっとしたことでもすぐ弟とけんかをす
 る。(7050)
 ⑯ かくれるのがとくい。(1070)
 ⑰ さむがりだと思う。(6020)
 ⑱ すぐ忘れっばい。(3340)
 19 ふつうのリボンよりレースの方がいい。
 (4820)
 20 おいしいものはあとにとっておく。(4190)

1から5までと15から20までは性格や行動傾向
 の記述を行なっているが、それ以外のほとんどは
 好みについての記述である。好みについての記述
 が多いのは、女性の反応の1つの特徴である。

事例5 女性 9才8ヶ月 (小学校4年生)

- ① 私は、女の子ですが手芸などは、あまりとく
 いでは、ありませんが、今いっしょうけんめい
 努力しています (1080)
 ② 私、じっとしているのがいやで おちつかな
 い子です。(2180)
 ③ 私のとくぎという物は、あそびしかありませ
 ん。(4820)
 ④ 私は、あまり女の子らしい子では、ありませ
 ん。(4390)
 ⑤ 私は、一番楽しいのは、自分の物を 買のが
 大好きです (4820)
 ⑥ ベットショップの犬やねこの洋服や首わやシ
 ャンプを見るのが大好きです。(4820)
 7 家の近くには、捨てねこがたくさんいます。
 (かわいそう) (8140)
 ⑧ 本屋、古本屋などでマンガを買ってしまって
 あまりお金がなくなったことがありました
 (4320)
 ⑨ 私は、ドジです。(2180)
 10 私は、あまり人におこされたようじゃ起きな
 い時もあります人がに起されておきることもあ
 ります。(4190)
 ⑪ 私は、弟と24時間起きていようと言って12時
 くらいにねてしまうタイプです (4190)
 ⑫ 私は、旅行大好き少女ですがそのほとんどが

- ショッピングにつかってしまいます (4790)
 13 私は、休日に、はやく起きて平日おそくおき
 るタイプです。(4190)
 ⑭ 私は、ペットがわりにミッキー・マウスをし
 ています。(4200)
 ⑮ 私は、いがいと字がへたです。(6030)
 ⑯ 私は、今度のクリスマスこそ ペットをもら
 うつもりです (4180)
 ⑰ 私は、小説を書くのが大好きです (4820)
 ⑱ ノートなどにらくがきするいたずらっ子で
 す。(4200)
 ⑲ 私は、日本では軽井ざわが大好きです。
 (4820)
 ⑳ 私は、エスパーになりたいです (4050)

日常的なことを記述しているが、反応にバラエ
 ティがあり、それぞれの反応も長いものとなっ
 ている。また、自分の性格や行動傾向を客観的に記
 述している点も、この年齢では珍しい。

事例6 男性 11才3ヶ月 (小学校5年生)

- ① 僕のしゅみは、も型とかコイン、切手 とか
 です。(4810)
 2 僕の生かくは、ひょうきんです。(2060)
 ③ 僕のとくいな物は、絵を書くことです。
 (1030)
 ④ 僕の一番にがてな物は、音学です。(1040)
 ⑤ 僕は、あんまりべんきょうは、好きでは、
 ありません。(4850)
 ⑥ 僕は、動物が大■好きです特に 犬 (4820)
 ⑦ 僕は、じゅうどうをやってます。でもな
 かなかうまく行きません (6030)
 8 僕は、ぼうけんとか たんけんが 大好きで
 す。(4330)
 ⑨ 僕は、ハッキリいってグズです。(2590)
 ⑩ 僕の体重39.4キロです。(6010)
 ⑪ 自分では、そんなに、うん動 がへたとは、
 思いません。(6030)
 ⑫ ぼくは、すぐちょうしにのるのが 次点です。
 (2200)
 13 僕は、すぐ感どうしてしまいます。(3090)

- ⑭ 僕は、しょうらい自分で会社を作ろうと思います。(4130)
- ⑮ 僕が、今一番ほしい物は、{ポケット}さるです。(4180)
- 16 僕は、くうそうがすきです。(5160)
- ⑰ 僕は ■目■のしゅ力 2.0と2.0です。(6020)
- ⑱ 僕は、日本人です。(8040)
- 19 僕は、いたずらすきです。(4820)
- ⑳ 僕の最大の次点は、(くすぐられると、ちびってしまふ事です) (6020)

自分の興味、身体、能力についての記述は、小学生に多い反応であり、これは小学生男子の典型的な反応の1例である。

事例7 男性 10才7ヶ月 (小学校5年生)

- 1 ぼくは《姓名》です (8010)
- 2 けんきゅうが大すぎる人間です (4850)
- 3 すきなだべものはくだものいす (4770)
- ④ すきなかもくは体育や理科です (4850)
- 5 すきなりのものはいちりん車や自動車です (4820)
- 6 ぼくは、あんまりすききらいがありません (4190)
- 7 すぐにびょうきにすぐかかりやすいタイプです (6020)
- 8 ぼくは長男でおとうとは、すぐけんかします (7010, 7050)
- ⑨ 絵がすきです (4730)
- ⑩ ぼくのゆめは、ががやレーサやきょうじゅ
- 11 になりたいとかんがえているうちにすぐ
- 12 頭の中がゴチャゴチャになってしまいます。
※ 10~12で1回答 (4100, 4959)
※ 13~20は無回答 (9070)

10から12のような反応は珍しい。それ以前ではちゃんと1行に1答ずつ反応しているので、反応の仕方を理解していないわけではない。これは、自分の将来の夢について記述しようとしたところ、收拾がつかなくなってしまうためと思われる。

事例8 女性 10才11ヶ月 (小学校5年生)

- ① 女の子 (8020)
- ② 人間 (4954)
- 3 動物 (4954)
- 4 男の子 (4955)
- 5 ロボット (4955)
- 6 ブス (6010)
- 7 美人 (6010)
- 8 天才 (4955)
- 9 バカ (4955)
- 10 ケチ (3350)
- ⑪ 根明 (2050)
- 12 根暗 (3070)
- ⑬ ふつうの子供 (4490)
- ⑭ 変人 (4955)
- 15 でぶ (6010)
- 16 やせている。(6010)
- 17 大食 (4190)
- ⑮ 小食 (4190)
- ⑯ 《学校名》生 (8200)
- ⑰ 好きな男の子のいる女の子 (8260)

単語の反応が多く、しかも20答の中には相互に反対の意味を持つ単語も含まれている。このような反応は、男子高校生にはよく見られるが、小学生の女子では非常に珍しい。おそらく施行時の被験者の態度にも問題があるものと思われる。

事例9 女性 10才9ヶ月 (小学校5年生)

- 1 《姓名》です。(8010)
- 2 《学校名》の児童です (8200)
- 3 ピアノを習っています (4190)
- ④ 音楽が得意です (1030)
- 5 英語も得意です (1030)
- ⑥ 体育が苦手です (6030)
- 7 給食も苦手です (8200)
- ※ 8~20は無回答 (9070)

氏名と学校名以外は、自分の能力について記述しようとしたものである。反応数も少なく、自己

の内面については、全く目が向けられていない。

事例10 男性 11才7ヶ月 (小学校6年生)

- 1 わたしは、だれで■■■しょう (4952)
- 2 わたしは、生きています。(4953)
- 3 " どうして生きているんでしょう (4953)
- 4 " ゴミ■■■ {ばこ} です (4955)
- 5 " いま空をとんでいます (9060)
- 6 " ■人間です。(4954)
- 7 " いまへんなきもちです (4150)
- 8 " 本当にだれなんでしょう (4952)
- ⑨ " つりがすきです (4810)
- ⑩ " 気があらいです (3160)
- 11 " いまちぎゅうにいます (4954)
- 12 " つくえにむかっています(9060)
- 13 " くもっています (9060)
- 14 " 犬とあそんでいます (9060)
- 15 " しんかんせんをみえています (9060)
- 16 " ほけんだよりです。(4955)
- ⑰ " 子どもです (8090)
- ⑱ " 早くらくになりたいです(4180)
- 19 " 白衣です (4955)
- ⑳ " むしをよくころします。(3160)

イマジネーションの中で様々な行動をしたり、自分を物にたとえたりしている、非常に珍しい事例である。内容から見ても、決して施行時の被験者の態度がふまじめなわけではなく、一生懸命反応している。

事例11 女性 11才8ヶ月 (小学校6年生)

- ① 私は、人間です。(4954)
- ② 私は、《学校名》生です。(8200)
- ③ 私は、末っ子です。(7010)
- 4 私は、ピアノを習っています。(4190)
- ⑤ 私は、動物が大好きです。(4820)
- 6 私は、テニスが大好きです。(4780)
- ⑦ 私は、高い所が大好きです。(4820)

- ⑧ 私は、遊ぶのが大好きです。(4820)
- ⑨ 私は、算数が得意です。(1030)
- 10 私は、音楽が苦手です。(1040)
- 11 私は、ソフトクリームが大好きです。(4770)
- ⑫ 私は、灰色や黒色や白色が大好きです。(4820)
- 13 私は、トマトジュースが大きいです。(4770)
- 14 私は、球技が大好きです。(4780)
- ⑬ 私は、将来、メガネ屋になりたいです。(4100)
- 16 私は、あわてんぼうです。(2180)
- ⑭ 私は、めん類が大好きです。(4770)
- 18 私は、ファミコンが大好きです。(4820)
- ⑮ 私は、目が悪いです。(6020)
- 20 私は、スカートをあまりはきません。(4190)

日常生活に関する好みを中心に記述しているが、学校名、家族の中での位置づけ、性格、将来の希望など幅広い反応をしている。個々の反応は小学生において一般的なものであるが、このように広く自分を捉えている点で注目に値する事例である。

事例12 女性 11才10ヶ月 (小学校6年生)

- ① 私は女の子です。(8020)
- 2 私は ボケです。(4955)
- 3 私は 天才です。(4955)
- ④ 私は 動物が好きなものです。(4820)
- 5 私は Aがたです。(6020)
- 6 私は かっぱの 三吉 です。(4955)
- 7 私は 三うら ひこく の かくし子 (4955)
- 8 私は かわいい です。(6010)
- 9 私は 男です。(4955)
- 10 私は きょうぼうなものです。(3160)
- ⑪ 私は 背が高いです。(6010)
- ⑫ 私は 氷河サマが 大大大大大好きです。(4820)
- ⑬ 私は アニメが 好きなものです。(4820)
- 14 私は さる です。(4955)
- ⑮ 私は 子供 です。(8090)

- 16 私は こじき です。(4955)
 ⑰ 私は 聖闘士です。(4955)
 ⑱ 私は 人間です。(4954)
 ⑲ 私は 紫龍とあく手をした。(4959)
 20 私は さんまのあいじんです。(4955)

テレビ、マスコミの影響が認められる反応がいくつも見られ、7や20のような非現実的な反応もある。この事例の場合、施行時の被験者の態度にも若干問題があったものと思われる。

事例13 男性 13才0ヶ月 (中学校1年生)

- 1 本を読むのが好きなものです。(4810)
 2 ゲームが好きなのものです。(4820)
 3 れいちょう目です。(4954)
 ④ 人間です。(4954)
 ⑤ 男です。(8020)
 ⑥ 中学生です。(8200)
 ⑦ 陸上部員です。(8160)
 8 未成年です。(8090)
 9 ぜんかがないものです。(4200)
 10 中学受験で成功したものです。(8200)
 ⑪ 友達がたくさんいるものです。(8250)
 12 地球人です。(4954)
 13 日本人です。(8040)
 14 飛行機に乗ったことがないものです。(4200)
 15 外国に行ったことがないものです。(4200)
 16 九州四国北海道に行ったことがないものです。(4200)
 17 ゲレンデでスキーをしたことがないものです。(4200)
 18 重病にかかったことがないものです。(6020)
 ⑲ 次男で末っ子です。(7010)
 ⑳ 動物が好きな者です。(4820)

一般的には平均的な事例であるが、9、18のような否定表現や10のような言い回しには、自己を単純に捉えるのではなく、複雑に捉え、表現しようという姿勢がうかがえる。

事例14 男性 13才0ヶ月 (中学校1年生)

- ① 《小学校名》出身 (8210)
 ② I. D. 21. (8200)
 ③ 日本人 (8040)
 ④ 人間 (4954)
 ⑤ 男 (8020)
 ⑥ 13才 (8070)
 ⑦ ラグビーがすき。(4780)
 ⑧ 《小学校名》のとき 6. O. 18 だった (8200)
 ⑨ しりょく 1.2 1.5 (6020)
 ⑩ 体重 49kg (6010)
 ⑪ 身長不明 (6010)
 ⑫ 「宮ざきはやお」にあいたい (4180)
 ⑬ ねぼう (4190)
 ⑭ おそね (4190)
 ⑮ チョコレートがすき (4770)
 ⑯ 天空の城ラピュタがすき (4820)
 ⑰ 風の谷のナウシカがすき。(4820)
 ⑱ こわい映画はきらい (4820)
 ⑲ 足の大きさ 25.0 (6010)
 ⑳ スキーがへた (6030)
 21. アニメがすき (4820)
 ※ 21. は上部の余白に書かれている。

この反応は、主に自分の社会・生物的基礎についての記述と、アニメに対する興味・関心についての記述で構成されている。社会・生物的基礎についての記述は、小学生、中学生の男性の反応において特に多い。

事例15 男性 13才2ヶ月 (中学校1年生)

- ① 私の長所は努力・頑固型という事だと思う。(2510, 2480)
 ② 私の短所といえば、ゆうじゅう不断型ということでしょう。(5420)
 3 私は偉伝記を読むのが好きである。(4810)
 4 私は努力すれば必ず何か得られると思っている。(2510)
 5 私は恥ずかしがり屋だと思う。(5380)
 6 私は、{何か} やりはじめると、とても熱中し

てしまう。(2500)

7 私は、1 辺に 2 つの事ができない性格である。(2500)

8 私は国語の問題を解くのが好きである。(4850)

9 私は、神けい質・完べき主義な面が少しあると思う。(5310, 5350)

※ 10~20は無回答 (9070)

この事例の特徴は、自分の性格について記述が非常に多いことである。中学生になると自己意識の発達にともない、自己の性格の把握も進むものと考えられるが、男子中学生の WAI 反応では性格の反応は比較的少ない。

事例16 女性 12才9ヶ月 (中学校1年生)

- 1 電話ま (4190)
- 2 こうもり (4955)
- 3 こんたくとれんず (4955)
- ④ 天気 (4955)
- 5 スポーツ (4955)
- 6 手紙ま (4190)
- 7 明るい太陽 (4955)
- 8 月 (4955)
- ⑨ 心 (4955)
- 10 ばくはつむすめ (4955)
- 11 笑顔 (4955)
- 12 炎 (4955)
- 13 写真 (4955)
- ⑭ 夢追い人 (5160)
- 15 あらし (4955)
- 16 風せん (4955)
- 17 奥深い谷 (4955)
- 18 チームワーク (4955)
- 19 希望 (4955)
- 20 お化け (4955)

この事例の場合、メタファーで自己を表現しているが、ほとんどの反応の意味するところは、本人以外には理解できない。中学生から高校生にかけては、このような自己満足的なメタファーが多

く見られる。

事例17 男性 13才11ヶ月 (中学校2年生)

- 1 私は人間です。(4954)
- 2 私は生き物です。(4954)
- ③ 私は宇宙人です。(4954)
- ④ 私は命のある生物です。(4954)
- 5 私は地球人です。(4954)
- 6 私は外国人です。(4955)
- 7 私は日本人です。(8040)
- ⑧ 私は世界で1人しかいない生物です。(4953)
- 9 私は頭の発達した生物です。(4954)
- 10 私はサルです。(4955)
- 11 私は中学生です。(8200)
- 12 私は大人です。(8090)
- 13 私はわがままな人です。(5210)
- ⑭ 私は自分かってな人です。(5210)
- ⑮ 私は今度死ぬ人です。(4910)
- 16 私は服を身につけている人です。(4200)
- ⑰ 私はキリギリスです。(4955)
- 18 私は心のせまい人です。(2480)
- 19 私はなまけものです。(2790)
- 20 私は脊椎動物です。(4954)

「人間」や「生き物」のような上位概念で自己を規定しようとする反応は、どの年齢層でも見られるが、男子中学生に最も多い。これは、その傾向が特に顕著な事例と言えるであろう。

事例18 男性 14才0ヶ月 (中学校2年生)

- ① 男です。(8020)
- ② やさしいです (2130)
- ③ 決してイルカではありません (4955)
- ④ バカではありません (4955)
- ⑤ 戦争をしたことはありません (8100)
- ⑥ はちゅうるいでは、ありません (4955)
- 7 ふろうしゃになりたくない。(4130)
- 8 《学校名》生。(8200)
- ⑨ ごっきげんだぜ〜! (4150)

- 10 「わたしは、こういうものです」といって、めいしをだす。(9060)
- 11 「アワのおふろのポータブル」がだいっ…きらいだ (4820)
- 12 I am a ハンプティダンプティ。(4955)
- 13 I am a ビズィ。(4955)
〔クラウン I 年より。〕〔注：12, 13 に対する補足〕
- 14 まるべにるーとについてのけつろんをていぎして
- 15 「トン…トン…非国人…しけい」っていう人になりたいな
- ※ 14, 15 で 1 回答 (4100)
- 16 大金持ち (4955)
- ⑰ 中 1 のときから 学校を休んだことないけんこーな人で〜す (6020)
- ⑱ かくせんそうになっても生きのこれるような運がいいやつです (4920)
- ⑲ ちょうのう力者です。(4955)
- ⑳ ↑ 上記のような人間です。(12 {13} 以外) (9060)

中学生や高校生の男性には、この事例の12, 13のような“遊び”が時々見られる。これは自己を真剣に直視することを嫌う傾向のあらわれと考えることもできる。

事例19 男性 15才1ヶ月 (中学校3年生)

- 1 本人に聞いて下さい。(9060)
- 2 好青年です (4270)
- ③ どこかの国の参謀です (4955)
- ④ 高橋名人の弟子です。(4955)
- ⑤ 日系の日本人です (8040)
- ⑥ アンラッキーな少年です。(4240)
- 7 ミーハーです。(4370)
- 8 窓ぎわ族です。(4955)
- 9 まじめな人です。(2530)
- ⑩ 元茨城県の主です。(4955)
- ⑪ そこで問題です 私はいったい誰でしょう。(4952)
- ⑫ 松下幸ノ助と 田中角栄 と孫子のファンで

- す。(4820)
- 13 クールな奴です。(2850)
- ⑭ 右に同じです。(9060)
- 15 辞書で調べなさい。(9060)
- ⑯ そんなことも わかんないの? (9060)
- 17 変な人です (4955)
- 18 新人類です (4955)
- ⑰ ながら族の ヘッドです。(4955)
- ⑳ 上記に示したことを書くような、ちょっと変わった少年です。(4955)

11, 15, 16は, WAI 自体に対する不快感を表現したものと思われる。このような反応は, 中学生, 高校生の男子にはよく見られるが, これも自己を直視することを嫌う傾向のあらわれと考えられる。

事例20 男性 14才 (中学校3年生)

- ① 短気な性格の人間です。(3010)
- 2 人と対話する時は常に自分が次に言うべきことの正誤を心の中で確認します。(2580)
- ③ 人を外見で判断し、余りその内面を見つめることができませぬ。(1060)
- 4 自分にとって良い事があると、すぐ表情に出してしまいます。善悪の判断はできると思う。(2030, 1070)
- 5 自慢する事が多いと思います。(5070)
- ⑥ 性格の合わない人間とはいっさいつきあいません。(5180)
- 7 親友とはこのまま関係を保つことができるよう、努力しています。(8250)
- ⑧ 他人に過大評価されていると思います。(4220)
- ⑨ 生活面の全てにおいて努力はおしまず、たえず心掛けているつもりです。(4580)
- 10 仲間外れの人間をつくってしまう側にいます。(3170)
- 11 余りおしゃべりでなく、どちらかといえば無口な方です。(2890)
- 12 家と学校では人格が全く違った時がありました。(5550)

- ⑬ 興味を魅かれるものには熱中しますが、その時期はすぐに過ぎてあきっぽい面があります。(2500, 2210)
- ⑭ 1つの物事について落胆したならその気持ちの回復が遅い面があります。(2300)
- 15 他人の優劣や性格の分別はたえず、頭にいられています。(5360)
- 16 どちらかといえば根が暗いと思います。(3070)
- ⑰ リーダー格になれるような統率力はありません。人に使われるか、独立するのみです。(1060)
- 18 1人きりでも余り寂しいと思わない。(2730)
- ⑱ 兄弟の存在が嫌だ。(7050)
- 20 どちらかといえば勇敢でなく、憶びょうだと思ふ。(5370)

自分の性格や能力を客観的に、しかも、かなり深く見つめている。中学生ではこのような事例は希少である。おそらくこの被験者は、普段から自己の内面に強い関心を持っているものと思われる。

事例21 男性 15才4ヶ月 (中学校3年生)

- ① 俺はロックン・ローラーだ！ (4730)
- ② 俺は音楽を愛している男だ！ (4730)
- ③ 俺は仲間をたくさん持っている男だ！ (8250)
- 4 俺は強い男だ！ (2430)
- 5 いや俺は弱い男だ…！ (5370)
- 6 俺は考えを持っている男だ！ (3310)
- ⑦ 俺はかっこつけたがる男だ！ (5010)
- ⑧ 俺は幸せなことの多い男だ！ (4230)
- ⑨ 俺は苦勞も多い男だ！ (4240)
- ⑩ 俺は人を見るのが好きな男だ！ (4760)
- ⑪ 俺は楽しいだけではダメだと思っている男だ！ (4959)
- ⑫ 俺はめだちたがりやな男だ！ (5070)
- ⑬ 俺は親の言ってることがわかるがしたがえないひねくれた男だ！ (7020, 3230)
- ⑭ 俺はいじっぱりな男だ！ (5050)
- ⑮ 俺はすぐ熱くなる男だ！ (5230)

- 16 俺は完璧主義ではない男だ！ (2250)
- ⑰ 俺はいじめ他がゆるせない男だ！ (4450)
- ⑱ 俺 {は、} 今の社会に恐怖を感じる男だ！ (4760)
- ⑲ 俺は、凡人でないと信じている男だ！ (4270)
- ⑳ 俺は愛を持っている男だ！ (4959)

全ての回答の最後に「！」が付けられており、非常に元気な印象を受ける。しかし、決して表面的で単純な反応だけではなく、自己の性格についても客観的な把握が為されている。

事例22 女性 15才6ヶ月 (中学校3年生)

- ① 私は舌先が器用です。(6030)
- ② 私は笑いじょうごです。(2050)
- ③ 私は精神年齢が低くて年下の子に持てます。(5110)
- 4 私は Clarinet player [注：筆記体] です。(1030)
- 5 私はクラシックが好きです。(4730)
- ⑥ 私は野球を見るのが大好きです。(4820)
- 7 私はいつも弱いチームばかり応援しています。(4820)
- 8 私は芸能界のことをほとんど知りません。(4820)
- ⑨ 私はでしゃばりです。(5070)
- 10 私は、ファッションなどどうでもよく、{(女ばなれした)} 男 {今、男の子もおシャレ!} の子のような女の子です (4590)
- 11 私は背が小さくて、体重が重くて顔が丸いです。(6010)
- 12 私はバレーボールをするのが大好きです。(4780)
- 13 私はバスケとハンドボールはできないので嫌いです。(4780)
- 14 私はけじめのない困った子です。(3420)
- ⑮ 私ははしゃぎだすと恥もいぶんもなくなります。(2060)
- 16 私はお料理はできません。(1040)
- ⑰ 私は、ほとんど好き嫌いなく何でも食べる良い子です (4190)
- 18 私は元気です。(6020)

- ⑱ 私は かくしごとができずに、すぐ本当のことを言ってしまうタイプです。(2070)
 20 私は一般的な常識がまるでなく、社会は苦手です(特に経済) (4483, 1040)

好みについての反応が多く、女子中学生らしい事例である。14, 17のような「～子です」という表現も中学生や高校生の女子によく見られるものである。

事例23 女性 14才9ヶ月 (中学校3年生)

- ① 私は、虫をさわることができません (4820)
 ② 私は、音楽が大好き [注：イラストあり] です (4730)
 3 私は、いまお金をためています (4310)
 4 私は、今、髪をのばしています (4590)
 ⑤ 私は、遊ぶことがだぁーいすきです (4820)
 ⑥ 私は、本を読むことが好きです (4810)
 7 私は、勉強がきらいです (4850)
 ⑧ 私は、動物がすきです (4820)
 ⑨ 私は、虫が死ぬほどきらいです (4820)
 10 私は、玉ねぎがきらいです (4770)
 11 私は、家庭料がとくいです (1030)
 ⑫ 私は、海がすきです (4820)
 13 私は、外国のアーティストが大好きです(4730)
 14 私は、好きな人がいます (8260)
 ※ 15～20は無回答 (9070)

これも好みについての反応が多く、女子中学生らしい事例と言える。5の「だぁーいすき」のように日常使っている言葉を、文字に表現しようとする傾向も、この年齢層の女子の反応には多い。

事例24 女性 15才0ヶ月 (中学校3年生)

- ① 私は 動物がとても好きです (4820)
 ② 私は 落葉の上を歩くのが好きです、(4820)
 ③ 私は 推理もののTVが好きです。(4820)
 4 私は ねおきが悪いです (6020)
 5 私は 心配しょうです。(5330)
 ⑥ 私は 性格 が とても 明るい です。(2050)

- ⑦ 私は 運動が好きです。(4780)
 ⑧ 私は 夢がよく現実になります。(4959)
 ⑨ 私は 天気の良い日は空を見て歩きたくなります。(4820)
 ⑩ 私は 雲が大好きです (4820)
 ⑪ 私は 季節の中で 冬が一番好きです (4820)
 ⑫ 私は 雪を見るのが好きです。(4820)
 13 私は 勉強 は 好きではありません (4850)
 ⑬ 私は 毎日が楽しい人です (4150)
 ⑭ 私は 悩みはあまりもったことはありませんが、悩みをもつととことん落ちこみます(2300)
 ⑮ 私は 夜の星を見るのが好きです。(4820)
 ⑯ 私は 今とても幸福です (4230)
 ⑰ 私は 友達 が 大好きです (8250)
 ⑱ 私は シャベることが好きです (2070)
 ⑳ 私は ものまね が できます。(1080)

この事例では、審美的なキャセクションについての記述が多く認められる。また、自己や環境に対する非常に肯定的な態度も読み取ることができる。

事例25 男性 16才1ヶ月 (高校1年生)

- ① サッカー 少年 (4780)
 2 頭が、悪い。(1020)
 3 背が高い。(6010)
 4 やせている (6010)
 5 燃えている (4959)
 6 スポーツ大好き少年 (4780)
 ⑦ 全国高等学校サッカー選手権大会を目指している。(4020)
 8 健康には、自信がある。(6020)
 9 なわとびが 特い。(6030)
 10 甘いもの が 好き。(4770)
 11 ふとりたいと思っている (4080)
 12 耳を動かすことが 出来る (6030)
 13 足が 長いといわれている。(6010)
 14 好きな言葉が、努力、こんじょう、がまん、である (4820)
 15 テレビを、見る時間が あまりない。(4190)
 16 マンガを読むのが 好きだ。(4820)

- 17 視力は、左右、1.5である。(6020)
- 18 いつも、お金をあまりもっていない (4200)
- 19 授業中 いつもねている (4190)
- 20 好きな科目は、体育と英語である (4850)

身体に関する記述が多く、運動、特にサッカーに対する指向がよくあらわれている。運動をやっている高校生らしい事例である。

事例26 男性 16才3ヶ月 (高校1年生)

- ① 私は新田恵利です うたいます♪冬のオペラグラスで～ (4955)
- ② 私は永田ルリ子です (4955)
- ③ 私は渡辺美奈代です ♪探さないでネ!! (4955)
- ④ 私は渡辺満里奈です (4955)
- ⑤ 私は少年隊のカッチャンです ♪I want you non non non (4955)
- ⑥ 私は国生さゆりです ♪夏を待てない～ (4955)
- ⑦ 私は吉沢秋絵です ♪いちず いちず いちず～ (4955)
- ⑧ 私は本田美奈子です ♪マリリ～ン (4955)
- ⑨ 私は菊地桃子です ♪空に say yes!! (4955)
- ⑩ 私は佐野量子です ♪量子は 量子は…… (セリフ) (4955)
- ⑪ 私は斉藤由貴です ♪平気 涙がかわいたあとには～ (4955)
- ⑫ 私は川島なお美です (4955)
- ⑬ 私は 五味岡たまきです (4955)
- ⑭ 私は白石麻子です (4955)
- ⑮ 私は寺本容子です (4955)
- ⑯ 私は 山瀬まみだよ ♪メロンメロンメロンメロン (4955)
- ⑰ 私は森恵です ♪ダンスアウェイ～ (4955)
- ⑱ 私は 薬師丸ひろ子です ♪あいてよくわからないけど (4955)
- ⑲ 私は 岡田有希子です ♪oh summer beach ～小さな～太陽ね～ (4955)

- 20 私はミーハーではありません (4370)

女性歌手の名前を列挙し、その歌手の持ち歌を反応の中に書いている。施行時の被験者の態度にも問題のある事例ではあるが、テレビ、芸能界への指向はあらわれている。

事例27 男性 16才0ヶ月 (高校1年生)

- 1 高校生である (8200)
- 2 練馬区に住んでいる (8060)
- 3 3人兄弟の一番下 (7010)
- 4 2人の兄弟とも今は家にいない (7050)
- ⑤ 麻雀が得意 (1030)
- 6 ゲームセンターによく行く (4190)
- 7 本はどんなものでも読む (4200)
- 8 温和である (2120)
- ⑨ 自分のことを自分のこととして考えない (4959)
- 10 あまり多くをしゃべるほうではない (2890)
- 11 のん気である (2280)
- 12 他人に対して冷たいほうである (2850)
- 13 テレビを1週間以上見なくても平気 (4820)
- ⑭ 生活が不規則になりがち (4190)
- 15 他人が自分をどう思っていようと気にしない (2740)
- 16 わりあいに社交的 (2090)
- ⑰ 色弱であったが だいぶ治った (6020)
- ⑱ あきらめないほうである (2470)
- ⑲ いつでも冷静である (2830)
- 20 後のことをあまり考えず行動する (2270)

反応の初めの部分でデモグラフィックな属性について記述し、その後、性格や日常生活についての記述を行なっている。これは、高校生男子によくある反応パターンの1つである。

事例28 男性 16才2ヶ月 (高校1年生)

- ① 地球人 です (4954)
- ② 日本人 です (8040)
- 3 都民 です (8060)

- 4 男 です (8020)
 5 学生 です (8200)
 ⑥ 生物 です (4954)
 7 球児 です (4780)
 8 かくことがねーと思っている人です。 (9060)
 9 わけのわからん調査に答えている人です。 (9060)
 10 こんなことやらせてんじゃねーよと思っている人です。 (9060)
 11 おれらは、心理学の実験材料か、と思っている人です。 (9060)
 12 こんな調査してなんになると思っている人です。 (9060)
 13 いみがわかんねえーんだよと思っている人です (9060)
 14 こんなこと調べてよるこぶやつの顔がみてーと思っている人です (9060)
 15 こんなこと何のともねーのにやられるかと思っている人です。 (9060)
 16 むってる人です。 (9060)
 17 といいつつやっている人です。 (9060)
 ⑱ WAI を わーいといっている人です。 (9060)
 19 16だから バイクにのりたいと思っている人です。 (4180)
 ⑳ さいごに 思いつかない人です。 (9060)

初めの1から7までは、上位概念で自己を規定しているが、それから後は、WAI に対する批判を行なっている。高校生男子には、このようなWAI に対する批判が多く見られる。

事例29 女性 16才4ヶ月 (高校1年生)

- 1 人間です (4954)
 2 高校1年生 (8200)
 ③ 10人並の容姿 (6010)
 4 明るい性格 (2050)
 5 責任感は強い。 (3410)
 ⑥ さびしがりや。 (2170)
 7 自己主張が かなりできる。 (5070)
 8 読書が好き。スポーツはまあまあ (4810, 4780)
 ⑨ 自由が好きだけど時々不安になる (4820,

2300)

- ⑩ だまされても、裏切られても人を信じたい (8280)
 11 友だちは多い。 (8250)
 12 音楽が好き (4730)
 13 精心年令はかなり高い (3300)
 14 時々 素直になれない (3230)
 ⑮ わりと、ひんぱんに自己嫌悪におちいる。 (4260)
 ⑯ やや、ソウツ症気味 (2300)
 17 ショパンが好き。バッハは嫌い。 (4730)
 18 わがまま (5120)
 19 人前では ならない (5050)
 ⑳ 根は きっと 明い (2050)

「人間」、「高校1年生」などの属性、容姿、性格、趣味・好み、対人関係についての記述など、非常に広い視点から自己を捉えている。高校生になると、このような多角的な視点から自己を記述する者も見られるようになる。

事例30 女性 15才9ヶ月 (高校1年生)

- 1 私は鳥です (4955)
 2 私は人です (4954)
 ③ 私はへびです (4955)
 ④ 私は水です (4955)
 ⑤ 私は風です (4955)
 6 私は木です (4955)
 7 私は月です (4955)
 8 私は太陽です (4955)
 9 私はだれでしょう (4952)
 10 私は私です (4951)
 ⑪ 私は音です (4955)
 12 私は波です (4955)
 13 私は霧です (4955)
 ⑭ 私は川です (4955)
 15 私は海です (4955)
 16 私は声です (4955)
 17 私は心です (4955)
 ⑱ 私は生命いのちです (4954)
 ⑲ 私は宇宙です (4955)

20 私は色です (4955)

非常に抽象的なメタファーを用いて自己を記述している。これは、女子高校生によく見られるロマンチズムのあらわれと考えることもできるが、その反応の意味を理解することは難しい。

事例31 女性 15才10ヶ月 (高校1年生)

- 1 私は少し ひょうきんです シリアスな面もあると思います (2060)
- 2 私は髪の毛が短かいです (6010)
- 3 私ははっきりいって明るいです。(2050)
- 4 私はスポーツが大好きです 特に陸上がとくいです。(4780, 6030)
- 5 私は高校に入ってふとりました すこしやせます (6010, 4080)
- 6 クラブは茶道部です (8160)
- 7 テレビをみるのが すき です (4820)
- 8 兄が2人います 仲は いい方でもなく悪い方でもないです。(7050)
- 9 性格は全く二重です (5550)
- ⑩ 顔は ご想像 におまかせします。(6010)
- 11 ジュースは もりながのヨーゴドリンクが好きです (4770)
- 12 父はすきなときときらいなときが ありますが また好きでしょう (7030)
- 13 食物は、カレーが好きです。(4770)
- 14 東京都内 にはすんで いますが はっきりいってはしっこです (8060)
- 15 川が {家の} すぐそばに あります。(8140)
- 16 飼っているものはありません。でもかうとしたら いぬのちいさいのです。(4200)
- 17 夜はすぐねむくなります 朝方でもありませんが。(4190)
- 18 よく食べます 米とパンでは 日本人ら{し}く米をとります (4770)
- 19 背は高い方■だと思えます。その分体重もあります。(6010)
- 20 料理とか お菓子作りが すきです (4810)

容姿についての記述と飲食についての指向が目

立つ事例である。容姿と飲食は、女子高校生の反応には多く見られ、これらは彼女らにとっては重大な関心事であるようだ。

事例32 男性 17才0ヶ月 (高校2年生)

- 1 私は《学校名》の学生です。(8200)
- 2 私は ティーンエイジャーです。(8090)
- 3 私は 音楽(洋の東西を問わず)が好きな男です。(4730)
- ④ 私は好きな事に熱中する反面、嫌な事にはすぐあきて投げだしたくなります。(2500, 5430)
- 5 私は 好奇心の割と強い男です。(3080)
- 6 私は 不正、暴力などは好みません。(4450)
- ⑦ 私は 多少 ロマンチック などところのある男です。(5160)
- 8 私は 時々気分がゆううつになり、無口になります。(2300)
- 9 私は 自分の両親に さほど 親密感を覚えません。(7020)
- 10 私は 金遣いが普通の人に比べて荒いです。(4320)
- ⑪ 私は 自分が責められると反論したくなる、割合短気な男です。(3010)
- 12 私は さほど遊び(ゲームセンターでの、金を使う遊び、etc.)を知らないです。(4190)
- 13 私は 映画(洋画)、テニスを趣味とする男です。(4810, 4780)
- 14 私は 目が 悪く、コンタクトをしている男です。(6020)
- 15 私は 服装、髪型 などのファッションにはあまり関心がありません。(4590)
- 16 私は 割と 大食いです。(4190)
- 17 私は (9070)
- ※ 18~20は無回答 (9070)

学校名、年齢、性格、趣味・関心などの自己の様々な側面について記述している。これは、高校生の男子における典型的な事例といえる。

事例33 男性 17才5ヶ月 (高校2年生)

- ① 人一倍 自尊心が強い 男です (5030)
- ② 《姓名》という名の者です (8010)
- 3 酒も、たばこもしない 健全な 高校生です。(4190)
- ④ 将来、弁護士をめざしている者です (4100)
- 5 《大学名》法学部法律学科を進路希望をとっています。(4090)
- ⑥ 神・靈魂を信じている男です (4930)
- ⑦ 田中角栄を尊敬している者です。(4710)
- 8 アニメが好きな高校生です。(4820)
- 9 数学が好きな男です。(4850)
- 10 私はむしろ悪人かもしれません。(4955)
- ⑪ 私は神から選ばれた人間の一人とは思わない。(4930)
- 12 横文字が 好きでない男です。(4820)
- 13 おちつきのない男です。(2180)
- 14 新聞を読むことが好きな男です。(4760)
- 15 F・F雑誌を買ったこともない男です。(4200)
- ⑯ 自殺したいと一度も思ったことはない 人間です。(4959)
- 17 剣道部に属している高校生です。(8160)
- 18 剣道よりもサッカーの方が好きな高校生です。(4780)
- ⑲ 祖父がすばらしい人だということを誇りに思っている人です。(7080)
- ⑳ あまり長生きはしたくないと思っている十七歳の少年です。(4120)

将来の希望や尊敬する人物などを述べている一方で、6, 10, 11のような宗教的・哲学的な表現も見られる。このような表現の仕方は、高校生や大学生には時々見られる。

事例34 男性 17才3ヶ月 (高校2年生)

- ① 「頭わるいんじゃない？そんなバクゼンとした質問に答えられるわけない。」(9060)
- 2 「あなたに答える義務、あるわけ？」(9060)
- ③ 「また？きのうもきかれたよ。」(9060)
- 4 「お茶つきあってくれたらおしえてあげる。」

(9060)

- 5 「……(無視).」(9060)
- 6 「そんなことはどうだっていいじゃない。"今、だけが問題なのさ。」(9060)
- ⑦ 「それは明日の天気を当てるのに等しいほどむずかしいな。」(9060)
- 8 「おれが誰だか当てられたら答えてあげるし、はずれたら食事をおごってもらうけど、それでも答えてほしい？」(9060)
- 9 「もう1回いって」(と相手が嫌になるまでくり返す。)(9060)
- 10 (9070)
- ⑪ 「私は、《姓》と申しまして、《学校名》2年に在学中であります。」(8010, 8200)
- 12 「私は、ただの男であります、ただの人間ではありません。」(8020, 4959)
- 13 「わからない」という返事が返ってきたら、「いっしょに食事してくれたら教えてあげる」とナンパする。(9060)
- ⑭ {私}「あんた、例の3億円事件 {の記事の新聞} 読んだ？」相手「読んだ」■私「じゃあ知ってるはずだ。」相手「犯人か？」
- 15 私「そんなわけねーだろ、その新聞をくばった配達人だよ！」
- ※ 14, 15で1回答 (9060)
- ※ 16~20は無回答 (9070)

WAI を施行している人間との会話の形式で反応している、非常に珍しい事例である。おそらくこれは、WAI に対する拒否反応の1つのあらわれと考えるべきであろう。

事例35 女性 17才3ヶ月 (高校2年生)

- 1 さい疑心が 前に出る人 (5450)
- 2 完全主義 (5350)
- 3 さびしがり屋 (2170)
- 4 神経質 (5310)
- 5 他人の犠牲になることを かえりみない時がある (2160)
- 6 あらゆる分野の事に 挑戦してみようという 気持ちが 湧く (3080)

- 7 常に他人よりもある事に対し上(先)へ行くようにする(5040)
- 8 多重人格的(5550)
- ⑨ 自分の心のままに素直になれる(4290)
- 10 社会的に自分の認められることに満足・喜びを感じる。(5070)
- 11 努力家(2510)
- 12 トラブル・苦勞を割り切って受けとめられる(2430)
- 13 冷静に沈着な行動、考え方をする(2830)
- 14 沢山のひとと接し、話しをし、共に行動できる(2090)
- 15 スポーツ大好きな子(4780)
- 16 空想へきがある。(5160)
- 17 理想を永遠に求める(4440)
- 18 意地悪(3170)
- 19 きちょうめん(2540)
- ※ 20は無回答(9070)

性格を中心に、客観的に自己を記述しようという姿勢がうかがえる。性格などの内面を含めた自己の客観的な把握は、高校生以下にはあまり見られない。

事例36 女性 17才1ヶ月(高校2年生)

- 1 17才の女の子です。(8070, 8020)
- 2 《学校名》に高校から入りました。(8200)
- 3 数学の嫌いな人間です。(4850)
- 4 自分にやさしく、他人にわがままです(5210)
- ⑤ 食べることと寝ることが好きです(4770, 4820)
- 6 わりと理想が高いです。(4440)
- ⑦ 必要ない深いことまで考えてしまいます(5320)
- 8 人に何か言われると黙ってられません。(5040)
- 9 コンプレックスのかたまりです(4280)
- 10 異様に健康で元気です(6020)
- ⑪ ジャンケンポンに生きがいを感じます(4810)
- ⑫ 歌番組や歌をきく・うたうことが好きです

(4810)

- ⑬ いちお[注:イラストあり]正義感のつよい方です(4450)
- 14 怒るととんでもないことをしてしまいます(3010)
- ⑮ 満腹中枢が欠如しています。(6020)
- 16 ちょっと自意識過剰です。(5460)
- 17 本をよむのが好きです。(4810)
- ⑯ そう状態とうつ状態の違いが激しいです。(5230)
- ⑲ 妙に見栄っぴりです(5010)
- 20 人を傷つけるのをこわがります(5360)

反応内容自体は、女子高校生で一般的なものであるが、9, 11, 15などオーバーな表現が目につく。このような表現をとって、反応自体をコミカルなものにしてしまう傾向は、高校生で時々見られるものである。

事例37 女性 16才9ヶ月(高校2年生)

- 1 そんなことわからない。(4952)
- 2 宇宙人です(4954)
- ③ 普通の女の子です(4490, 8020)
- ④ 学生です(8200)
- ⑤ 日本人です(8040)
- 6 アメリカ人です(4955)
- 7 フランス人です(4955)
- 8 イギリス人です(4955)
- 9 ドイツ人です(4955)
- 10 インド人です(4955)
- 11 オランダ人です。(4955)
- 12 スペイン人です(4955)
- 13 ロシア人です(4955)
- 14 ベトナム人です(4955)
- 15 中国人です(4955)
- 16 メキシコ人です(4955)
- 17 アフリカ人です(4955)
- 18 オーストリア人です(4955)
- 19 オーストラリア人です(4955)
- 20 韓国人です。(4955)

5の「日本人」以降は、「～人」という記述に終始している。これは明かにWAIに対する拒否のあらわれである。

事例38 女性 17才6ヶ月 (高校2年生)

- ① ワタシハダイニッポンテー コクシンミンデアル。(8040)
- 2 ワタシハ、コクセキヲ モツモノデアル。(4954)
- 3 ワタシハ、シンゾーガ ウゴイテイル。(4954)
- 4 ワタシハ、ワケノワカラヌ チョーサヲウケテイルモノデアル。(9060)
- 5 ワタシハ、キョウカラ テストベンキョーヲセネバナラヌモノデアル (4200)
- ⑥ ワタシハ、イマハ ワタシデアル。(4951)
- ⑦ ワタシハ、シネバ ワタシデハナイ (4951)
- 8 ワタシハ、ワタシハダレデショートオモウモノデアル (4952)
- 9 ワタシハ、WAIトハナシダト、カンガエルモノデアル (9060)
- ⑩ ワタシハ、コレハニンゲントーセイダトイカルモノデアル (9060)
- 11 ワタシハ、カネガナイ (4200)
- 12 ワタシハ、カネガナイカラクレトオモウモノデアル (4180)
- ⑬ ワタシハ、ショーライ グンジンニナルトオモウモノデアル (4100)
- 14 ワタシハ、モーカイグイハシナイト オモウモノデアル (4200)
- 15 ワタシハ ソンナモンワカラナイトオモウモノデアル (9060)
- 16 ワタシハ モクヒケンヲ ツカウモノデアル (9060)
- 17 ワタシハ (9070)
- 18 ワタシハ (9070)
- 19 ワタシハ (9070)
- 20 ワタシハ (9070)

すべてカタカナで反応している珍しい事例である。部分的には一般的な内容もあるが、かなり特

異な内容が目につく。これもWAIに対する拒否的反応と考えるべきであろう。

事例39 男性 17才 (高校3年生)

- 1 日本人謀県民謀市民 (8040, 8060)
- ② 多趣味な人 (4190)
- ③ 浅く広くをモットーとする人。(4580)
- 4 テニスプレーヤー (4780)
- 5 ゴルフプレーヤー (4780)
- 6 二人兄弟の長男 (7010)
- 7 長距離通学者 (4190)
- ⑧ 自由、気ままな遊び人。(4200)
- ⑨ 理想が高く、感情が豊かな人。(5090, 3090)
- 10 昔は強かった人 (6030)
- ⑪ 身長が欲しい人 (4080)
- 12 法律学科に生きたいが、難しい人 (4090)
- 13 10年後にはアメリカ在住の予定の人 (4140)
- 14 英語が話せない人 (1040)
- ⑮ 意志薄弱な人 (5430)
- 16 せっかちな人 (2220)
- ⑰ 目が悪い人 (6020)
- ⑱ 歯はやたら丈夫な人 (6020)
- 19 短命な人 (4910)
- ⑳ 免許が欲しい人。(4180)

趣味、性格、欲求・願望などが中心に述べられており、その他にも社会属性、身体などについての記述もなされている。これは、高校生男子の事例として一般的なものと言える。

事例40 男性 18才 (高校3年生)

- 1 私は2足歩行し、火を使い、物を考える生き物です。(4954)
- 2 私は、社会を動かす1歯車です。(4955)
- ③ 私は、知識をため込む大きな風船です。(4955)
- ④ 「私」は私をコントロールするためにいる精神生命体です。(4955)
- 5 私は目という双眼鏡で外界をながめる頭の中に住む小人です。(4955)

- 6 私は世界で一番ねむたい人間です。(4150)
- 7 私は、いったい何だろう？(4952)
- 8 私は、空間を超越した旅人 (4955)
- ※ 9～20は無回答 (9070)

全般的に抽象的なメタファーによって自己規定をしている。しかし、自己満足的な自己記述ではなく、理解可能な表現が用いられている点で、他者の目も考慮されているものと思われる。

事例41 男性 17才11ヶ月 (高校3年生)

- 1 まじめ (2530)
- 2 短気 (3010)
- 3 髪に癖がある (6010)
- 4 前歯がない (6010)
- 5 背が低い (6010)
- 6 日本人 (8040)
- 7 集中力に欠けた人間 (1080)
- 8 {事に} 中途半端な人間 だがそのくせ完璧さを求める (3420, 5350)
- 9 人目を気にする (5360)
- 10 将来の自分を心配している (5340)
- ⑩ 全てに自信をもてない人間 (4280)
- 12 時間を気にする (5310)
- 13 行動に おそい事と速い事との差がある。(5530)
- 14 自分で なやむ (5320)
- 15 悪い癖 (生活習慣) がなかなかおせない (5430)
- 16 自立する意識が いまだに持てない。(5140)
- 17 将来に 常に 無理な期待を抱いている。(5090)
- 18 他人より劣ってしまうことを おそれる。(5040)
- 19 人の 好き嫌いが 激しい (5180)
- 20 人に 頼りやすい (5140)

全体的に自己に対する否定的な評価が目につく事例である。否定的な自己意識は、高校生において強くなる傾向があるが、このように WAI 反応に直接的にあらわれることは珍しい。

事例42 男性 17才10ヶ月 (高校3年生)

- 1 インクの漏れたペンがある。[注：イラストあり] (9060)
- 2 青くて黄色くて、黒い絵を■■描く、(装飾的ですね)。美しい。(9060)
- 3 本を読■む。写真が好きであったが、それはドストエフスキーにとどまった。(4730)
- 4 周りには笑っている人ばかりいる。(9060)
- 5 自己紹介するとき、家族のことから話したくない。家族がいやなわけでない。あれは別です。(7110)
- 6 現職の教師であつたらいい■と思う。(4050)
- 7 自転車が好きだ。自動車は遅い。きらいだ。(4820)
- 8 1番の■■ {答え} のとなりのイラストは今■描いた。8番の■答えとする (9060)
- 9 [注：ムーミンのイラストあり] ムーミンは、感情に対する理由がしっかりしすぎている。子供にはとてもよい。(9060)
- 10 食事をしたくなくなることもある。(4200)
- 11 да。ロシア語が好きだ。(4850)
- 12 コンピューターは、システムが複雑なほうがいい。再帰や、自己書きかえは他人にわかりにくくてよい (9060)
- 13 これを書く時間がほしい、あと 6分と せん告された。(9060)
- 14 火をふいたことは1度もない。(4959)
- 15 しかし、その絵はすきだ。[注：イラストあり] (9060)
- ⑩ 雨が好きなのは、本当は、それがきらいだからだ。同じようなことはいくつもある {参考にならないかな。} (4820)
- 17 分析者を意識しすぎてますね (9060)
- 18 成績は悪い。努力してないつ■ {も} りだった。(1080, 3330)
- ※ 19, 20は無回答 (9070) だが、この2行にわたってイラストが描いてある。

中学生や高校生の女子の反応の中には、イラストの描かれたものが時々あるが、男子の反応には少ない。この事例の場合、反応自体も詩的な表現

が用いられており、反応の意味がわかりにくい。

事例43 男性 17才5ヶ月 (高校3年生)

- ① 男である (8020)
- 2 高校生である (8200)
- 3 バスケを5年間やった (8160)
- ④ 東京生まれで東京育ちである (8050)
- 5 17才である (8070)
- ⑥ 大学へ行きたいと思っている (4090)
- 7 趣味はない (4190)
- ⑧ 面倒くさがり (2790)
- ⑨ 忍耐力がない (2210)
- ⑩ 注意力散漫 (2180)
- 11 眼鏡をかけていない (6020)
- 12 虫歯がない (6020)
- 13 祖父、祖母がいない (7080)
- ⑭ 長所、短所が自分でわからない (4952)
- ⑮ 健康である (6020)
- 16 数学が嫌いである。 (4850)
- 17 一戸建ての家に両親と姉と一緒に住んでいる。 (8140)
- ⑯ 年老りになるまで生きていたくない (4120)
- ⑰ 夢がない (5340)
- ⑳ 遊びたい (4180)

社会属性、家族、身体、性格、将来の希望など広範な反応をしている。このような反応はかなり一般的なものであり、高校生の self-image が小学生や中学生よりも広い範囲に及ぶことを示している。

事例44 男性 17才6ヶ月 (高校3年生)

- ① 私は私であって私でないものではない (4951)
- ② 人間であって人間でない。 (4955)
- ③ 質問するならばまず自分の意けんを言うべきだ。 (9060)
- ④ こんなくだらないことをいまさら答をだすひつようはない (9060)
- ⑤ 私が誰であってもかまわないではないか (9060)

⑥ なぜこの質問を私にたいしていうのか (9060)

- ⑦ 私は人間でなく、機械によりちかい。よってアンケートのとうけいにいみをなさない (4955, 9060)
- ⑧ この質問はあまりにもちゅうしょう的すぎ意味をなさない (9060)
- ⑨ 「私は誰でしょう」の私とは答をかいている私のことか、質問者のことか (9060)
- ⑩ 質問には答えがいのもので 答をかえすことにしている。 (9060)
- ⑪ 答はつねに変化する。ただし変化はゆるされない。よってこうきゅう的にいみはない (9060)
- ⑫ 「私は誰でしょう」と聞かれたら英語で Who Am I と英語のしけんなら答えなければならない (9060)
- ⑬ ちゅうしょう的な質問に対して具たいたないようでこたえてもよいのか (9060)
- ⑭ 私は人間をこえることをめざし、人間のわくをこえた。ただし、どっちへこえたのか (4955)
- ⑮ なぜたいしょうを私にえらんだのか (9060)
- ⑯ 他とはちがったものでしかなく、他とちがったものにならねばならない (4953)
- ⑰ 「Who Am I?」ときかれたら「私は英語がわからない」と英語に対して日本語で答える (9060)
- ⑱ あなたはどこのまわしものか。 (9060)
- ⑲ 心理テストだとしたら私をとくい点としてあつかわねばならない。 (9060)
- ⑳ 20の答をおもいだすにくろうする 国語のう力のないものだ。 (1030)

WAI に対する拒否的な反応を示している事例である。しかし、単に嫌悪感を表すのではなく、教示に対し合理的に反駁をしようとしている点が興味深い。

事例45 女性 18才1ヶ月 (高校3年生)

- 1 性格がはっきりしない人間 (4952)
- ② 小さなことでも気にしてしまう性格 (5320)
- ③ 皆とちがう 行動をとりたがる人間 (3230)

- 4 女の子 (8020)
- 5 高校生 (8200)
- 6 私は私よ (4951)
- ⑦ 環境の良い中に生きてます (4230)
- 8 テニスが なかなか うまいです。(6030)
- ⑨ 料理が とても好きです。(4820)
- 10 精神的に少し 強くなりたいと思っている (4030)
- 11 かわいい お嬢さま (6010, 7120)
- 12 少しボーっとしちゃう人間 (2800)
- 13 単純な子 だけど 少し 偏屈者ともいえる (5530)
- 14 自分のことを卑下しちゃうところがある。(4260)
- 15 努めて 友達との 話を盛り上げようとする。(2090)
- 16 けっこう 言ってることと考えていることが 矛盾 (3240)
- ⑩ あせっちゃうと 何にも まともになんか できなくなっちゃう。(5390)
- 18 人前ではいい子 家の中ではわがままで 甘えん坊かな? (5120)
- 19 意志が 弱い ことが いやだと思う。(5430)
- 20 まわりに 動揺されやすいから、1人で生きようとしてる (5140)

社会属性や興味・関心も述べられているが、性格や行動傾向が中心に述べられている。このような反応は、普段から強い自己意識を持っている場合に多いようである。

事例46 女性 17才11ヶ月 (高校3年生)

- 1 私は《学校名》生です (8200)
- 2 私は人間です (4954)
- 3 私は 女です。(8020)
- 4 私は 学生です。(8200)
- 5 私は もうすぐ大学に行く少女です (4140)
- 6 私は もうすぐ18才になる少女です (8070)
- 7 私は 食べるのが 好きな少女です。(4770)
- 8 私は 眠るのが 好きな少女です。(4820)
- 9 私は 音楽 が好きな少女です。(4730)

- 10 私は 日本人です。(8040)
- 11 私は アメリカに住んだことのある少女です。(8140)
- 12 私は 外国に行きたいと思っている少女です。(4130)
- 13 私は フランスが好きな少女です。(4820)
- 14 私は フランス語をもっと勉強しよう と思っている少女です。(4850)
- 15 私は 髪の毛の長い少女です。(6010)
- 16 私は バイオリンを弾くことのできる少女です。(1030)
- 17 私は 高校生活をおおらせたくないと思っている少女です。(8200)
- 18 私は 音楽系クラブに入っている少女です。(8160)
- 19 私は ふとっている少女です (6010)
- 20 私は やせたいと 思っている少女です。(4080)

社会属性と好みが中心に記述されている。また、希望や願望も述べられており、女子高校生の反応としては一般的なものと言えるであろう。

事例47 女性 17才6ヶ月 (高校3年生)

- ① けなげ (2530)
- ② うるさい (2060)
- ③ すぐ泣く (5230)
- 4 笑いじょうご (2050)
- 5 いい加減 (3420)
- 6 遊び好き (4820)
- 7 ふまじめ (3420)
- ⑧ めんどくさがりや (2790)
- ⑨ 掃除が嫌い (4820)
- ⑩ 料理がうまい (1030)
- 11 寝坊がとくい (4190)
- ⑫ 変なところでまじめ (2530)
- ⑬ 数学と理科が嫌い (4850)
- 14 お金に飢えてる (4180)
- ⑮ 眠るのが好き (4820)
- 16 普通の男は嫌い (4830)
- 17 流行を追ってるだけの■ {奴} は嫌い (4840)

- ⑬ ハード・ロックが大好き♡ (4820)
- ⑭ 甘い物大好き (4770)
- ⑮ 年柄年中1人の男に恋してる (8260)

1つ1つの反応が非常に簡潔な表現でなされている。このような傾向は女子よりも男子の方に強い。しかし、内容自体は、女子高校生では一般的なものである。

事例48 女性 17才8ヶ月 (高校3年生)

- 1 女子高校生で毎日を楽しくすごしています。(8200, 4230)
- ② 何にでもすぐに感動する感動屋です。(5230)
- 3 夜も昼も好きだけど夜の方がおちついて話ができます。(4820)
- ④ 夜星を見るのが大好きで一晩中でも見えています。(4730)
- ⑤ 夕暮れ時に夕焼けや雲を見るのが大好きです。(4730)
- ⑥ 高い所にのぼってあたりの風影をぼーっとして見ているのが好き (4730)
- ⑦ 高い所から見る夜影が好きです。(4730)
- ⑧ 部屋のベッドで庭の白樺が風にゆれるのを見ているのも好きです。(4730)
- 9 部屋のベッドでものを考えるのも好きです。(2900)
- 10 映画を撮影したり、その後の語らいが好きです。(4810)
- ⑪ 伊豆の城ヶ先海岸に毎年行くと、小さいこ

ろからの思い出がいっぱい (胸もいっぱい) (4956)

12 伊豆の別荘のベランダから海を見ていたとか、

⑬ 河を1kmぐらい下ってゆくと流が早くなってそして目の前に広がる海を見た時 (あの気持ち)

※ 12, 13で1回答 (4956)

14 大きくて深い塩だまりにもぐって上を見あげた時の水面がキラキラ光っているのを見るのが {好き} (4730)

⑮ いろんな人と友達になりたいです。(4180)

⑯ 自分の意志主義主張を自分の中に取り持っているのが魅力があって好きです(4840)

⑰ 長所、短所ともにおっとりしている事。(2280)

18 不思議な出来事や歴史的にとっても不思議な事をもっと追求したい。(4750)

⑱ S.F. 的なものはもう目がないくらい好きです。愛読書は「星の王子さま」と「銀河鉄道の夜」{「時計仕掛けのヒロイニ」} (4820)

20 とても雰囲気にもまれるタイプで お城とか広い野原が好きです。(5160, 4820)

詩的な表現が多く、文学的な指向が認められる。内容も自己の属性を記述するよりも、自分の心を魅くものを記述することで自己を表現している。自己が単なる属性の集まりではなく、興味や関心の対象との関係をも含むことを示す事例である。